
建築都市文化史誌 aft 第3号 目次

序言

墨壺 (1) 赤野一人……5

論考

吉川清作と乞食の家 (3) 落合悠斗……6-28

移民住宅論 Pham Ngoc Thanh Phuc……29-36

空間権力装置としての建築 尾上篤……37-41

ノート

アフリカ近代都市民と軽業師 赤野一人……42-47

展覧会

明後日のはなし 赤野一人……48

小屋 Cook Book 江尻悠介ほか……49-72

連載

私の研究 (1) : 群論からみた Galois 理論, 楕円曲線論

へと導く環論と体論 松井颯治……73-88

雑報

設計演習 A 展 開催ほか……89

本会からのお知らせ……90

編集後記……90

表紙・裏表紙 : 本間董子

扉写真 : Pham Ngoc Thanh Phuc

Foreword

Sumitsubo (1) by Kazuto Akano……5

Contributions

Seisaku Yoshikawa and his works (3) by Yuto Ochiai……6-28

Housing for immigrants by Pham Ngoc Thanh Phuc ……29-36

An architecture as space apparatus by Atsushi Onoe……37-41

Note

Residents of modern African cities and their “soft resistance” by Kazuto Akano……42-47

Exhibitions

Let's talk about the day after tomorrow by Kazuto Akano……48

Hut Cook Book by Yusuke Ejiri et al.……49-72

Serial

My research topic (1) : The Galois theory viewed from the group theory And 2-dimensional field leads to elliptic curves by Soya Matsui……73-88

News

“Exercises in Architectural Design A” exhibition……89

Information from ASKEN……90

Editor's note……90

AFT Journal of Architecture and Urban Cultural History No.3

Published in May. 1, 2016 / Edited by Yuto Ochiai / Published by ASKEN

1-3-5 Tsunishi, Kamakura, Kanagawa, Japan 248-0034 / Tel: +81-(0)50-3746-9540 / Fax: +81-(0)467-33-1887

E-mail: asunokenchiku@yahoo.co.jp / Website: <https://sites.google.com/site/aftkenchiku>

Twitter: @asunokenchiku, @asuno_future_t / Printed in Japan / Print edition ISSN 2189-5600

All articles published in this journal are licensed under CC-BY-NC-ND 4.0.

墨壺 SUMITSUBO (一)

入学式を終えて、キャンパスは初々しい新入生諸氏で溢れている。桜は少しばかり咲いて、早々に散ってしまった。まだ少し肌寒く感じる時があるけれど、列島は初夏に向かって猛進している。もう少しゆっくり進んでくれればいいのと思うが、そんな自由は効かない。

あすけんは相変わらずの休眠団体で、キャンパスの隅に辛うじて棲息している。入会希望者でもないかと思って、気持ちばかりのピラを撒いてみたが、振り向いてくれたのは一人だけだった。目下、沈黙を貫き通す彼がLINE グループに加わったことが、今春の成果である。

とはいえ、何もせず、だらだらと無為に過ごすわけにはいかないの
で、雑誌に手を加えることを当面の努力目標にすることにした。今号から(ちょびっと)体裁が変わっているのはそのためである。変更点をつらつら挙げると、第一には皆さんが読んでいるこのコラム『墨壺』を巻頭に置くこと、それから新しい連載をはじめること、刊行の目的をきちんと示すこと、その他こまごました変更もある。これらはいずれも、雑誌としての方針をきちんと打ち出して、体系立てていこうという企図によるものである。

古い新建築誌をめくっていたら、「本誌は漸進主義をとる。少しずつでも変わってゆく」という吉岡保五郎の言葉があった。小誌もこれを見習うことにしたい。

このコラムでは編集子の持ち回りにより、折々の話題に触れながら、自らの問題意識の所在を明らかにしてゆくつもりである。

読者諸賢の御叱正をお願いする。(赤野)

図版：伊藤為吉『木工術教科書』共益商社、1894年、46頁「猪鼻形墨壺」



吉川清作と乞食の家（3）

落合悠斗

Seisaku Yoshikawa and his works (3) by Yuto Ochiai

前回まで

今回は吉川が独立するきっかけとなった二つの映画館について概観した。今回は、これらより半年ほど遅れて竣工した第三の映画館である葵館について見てゆきたい。

作品各論（続き）

葵館—1924年

葵館は、神田・京橋日活館と同じく日活直営の映画館である。場所は溜池町30（現 東京都港区赤坂1丁目1番17号 細川ビル、35° 40'15.5"N 139° 44'38.5"E）である。定員は475名と、神田日活館（794人）よりやや小さく、京橋日活館（464人）と同程度であった¹。初代葵館（図1）は西洋城郭風の建物で、1913（大正2）年7月に開館したが²、1923（大正12）年9月1日の関東大震

災により焼失してしまったため、吉川に再建が依頼されたものである。この二代目葵館は³、同じく震災で焼失した神田・京橋日活館よりやや遅れて、1924（大正13）年10月17日に新築落成した⁴。しかしながら、その後の経営はあまり芳しくなかったとみえ⁵、日活からの売却と直



図1 初代葵館（1915/大正4年撮影）

¹ 「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』大正14年1月11日 第182号 p.34。神田・京橋日活館の定員数については前号参照。葵館の定員を421名とする資料もある（国際映画通信社編『日本映画事業総覧 昭和5年版』国際映画通信社、p.553）が、これは年代がやや離れているので、竣工直後の記事の方の数値を採った。

² 『日活四十年史』日活株式会社、1952、p.141

³ 吉川の手になる再建葵館は一般に「二代目」と言われているが、『日活四十年史』p.47には震災翌年の1月までに焼失した直営16館のうちキネマ倶楽部を除く全館をバラックで再建したとあり、これを信じるならば、葵館には吉川の手になる二代目が竣工する前に仮建物が存在していたことになる。ただ、吉川の二代目葵館も「バラック劇場」と言われ、震災以来それが竣工するまで「長らく放任されて居た」言われているので、それに先立って仮建物が存在していたというのは非常に疑わしく思われる（本文内引用記事参照）。

⁴ 1924（大正13）年10月11日付『朝日新聞』夕刊1面広告。神田・京橋日活館よりも竣工が半年ほど遅れた理由は定かではない。後述のように、日活は葵館を特に重要視し、誇りとして

いたため、設計・施工に念を入れたのかもしれない。あるいは、次註に示すように葵館はそもそも儲かる館ではなく、収容人員も小さい館であるので、後に回したということなのかもしれない。

⁵ きちんとした数字があるわけではないが、例えば開館直後の記事の一つに次のように記されている。「東京に於ける映画シーズンは最う盛りを過ぎた。各館を通じて昨今成績は著しく悪く営業車は非常に苦心である。優秀なる映画を封切して一頭地を抜かんとする精勤努力の苦心が鮮かに分るけれど、怎う言ふものか矢張り悪い。先週などは何處の高級館を見ても一日千圓を通過して七千圓の成績は得られなかった。誠に痛心事である。……日活経営の三友館、神田日活館、葵館が怒濤の彼方へを上映し、目黒キネマが西班牙の踊子を封切してホリーウッドを添え二流間には今尚ほ椿姫、戦争ネロ等が呼び物となってさえ此の成績だもの他は推して知るべしである。東京の映画界は全く不振の経路を余程下って来た。……愛光輝くて千代田館が五百圓とは何たる惨憺であつたらう。戦争で一頭地を抜いた丈けに一層に物哀れを感じる。僕は最う神田日活館や葵館の成績は書くまい。」（南條生「東京映畫瞥見」『キネマ旬報』大正13

営化を繰り返し⁶、最終的に1935（昭和10）年に閉館した⁷。使用されていたのはおよそ10年間であった。

この建物は閉館当初から巷の大きな話題となったようで、当時の雑誌記事では「バラック劇場の異彩」「新東京名所」などと評されている。当時の気分を知るのに好適と思われるので、長くなるがそれぞれの記事を引用しておこう。

映画常設館見聞さまざま その一 葵館

一昨年の震災の為に焼失以来長らく放任されて居たが昨年十月十七日新築落成開館した。日活の直営館。定員四七五名。主任は鈴木伊平氏。東京市赤坂区溜池町卅番地。

目下日活の外国映画封切館である。映画を知る者で葵館の名を知らぬものは少ない程に、此館は東京^{マア}。否全国映画界に於ける昔からの一種の名物であった。それは震災前の建物が映画劇場として感じの良いものであつた事や、場所の関係などからいつて観客に智識^{マア}附級殊に外人や學生やそれから美しい人達などの多かつたことや、葵の徳川が徳川の葵かと云はれた程に説明者徳川夢聲君がその獨特の説明でファンを喜ばせて居た事や、色々な原因でそうなつたもので、此處には昔から日活が特別の力を入れて居たのである。現在西本日活営業部長が「君、あすこは別に儲けんでもいいのだ、日活にも斯んな高級な館があるといふことを誇れいばいいんだ」と力

んで居る程に慾を放れた理想興行振りを発揮して居るかどうか、それはまあ細く詮議立てはせぬとして、兎に角日活が一つの誇りとして現在も大切に居る事は事実である。復活後土地の利如何を第二として純然たる封切館としたに徹してもそれは解る。ファンの要望であつた外国映画の市内封切が此處で行はれる様になつた事なども偶然から味はれる興味を呼ぶ。

目下の建物はバラックには違ひないが萬事に相當の費用を惜しまず、特等一等は全部單獨椅子、粗末乍ら各等共絨毯敷きといふ本建築ならぬ常設館としては正に設備に於て一異彩を放つて居る。建築様式に於ては特に日活が震災後バラック映画劇場の建設に當つて他會社と全然特色を異にした設計を欲して招聘した吉川氏の手に成つた物だけに、一見新時代の要求に依つて生まれた現代味豊かなものである感じを受ける事請合ひである。所謂看板の出し方から館内売店の装置迄新しい人々には此様式の効果は充分に賞味され得ると思ふ。尚各等全部靴草履はそのまゝ、下駄類全部下足の制度であつて之れも洋服連にはカヴァーの必要なくて喜ばれて居る。更には館内の裝飾や正面の幕模様にと誰でも一寸その平凡を脱し過ぎて居るのに驚くことであらう。これは二科會で知られて居るマボイスト村山氏の手になるもので、現在の映画劇場の裝飾に此派のものゝ使用が適當であるかどうかには異論も多い事であらうが。

年11月21日 第178号 30頁)。本文引用記事でも葵館は「別に儲けんでもいいのだ」という旨の日活関係者の発言が紹介されている。また、この頃には娯楽の中心が新宿・渋谷などの西側に移っていったという背景もある。

⁶ 1928年5月直営廃止、1931年12月直営化、1932年12月直営廃止（『日活四十年史』上掲、pp.150-156）。1928年に売却された時の相手は日本興行株式会社のはずだが、1930年時点での館主は市島亀三郎であった（国際映画通信社編『日本映画事業総覧（昭和5年版）』1930、p.553）。一方で、1932年の売却相手は、やはり日本興行株式会社であつたらしい（同 昭和9年版 p.408）。この会社は、1911（明治44）年に中小の映画館主が合

同で設立した日本初の映画興行を目的とした株式会社で、設立当初より日活の（最初の1年は日活の前身のひとつである横田商会の）配給を受けており、日活と深い関係を持った企業であった。最終的には1935年に会社ごと日活に買収された（下注参照）。

⁷ 牛原虚彦『虚彦映画譜50年』鏡浦書房、1968、p.195。『日活四十年史』には、なぜか葵館の閉館時期については記載がないが、1935年11月の欄に日本興行株式会社の買収に伴い葵館を含む9館を直営化したとの記事があるから（p.156）、葵館はその時に整理され閉館となったのであろう。



葵館(1924)

設計：吉川清作

施主：日本活動写真株式会社

施工：不明

竣工：1924（大正13）年10月17日

現況：非現存（1935/昭和10年閉館）

図2（上） 外観（縦長窓の上部が開かれホースが引き出されている。歩道の柱には看板が立てかけてある。左手には棚があるが靴棚であろうか）

図3（右） 外観（歩道上に奇妙な柱が建っている。縦長窓は三角形に突出していることがわかる。窓から引き出したホースで散水している）





図 4 客席正面（各椅子には番号札が貼られている。どこで読んだのか忘れてしまったので典拠を示せないが、現代と同じように席を指定して買うことも可能であつたらしい）



図 5 客席後背（左手のドアは洗面所に通じる。その斜め上に掛けられた札の文字は幸うじて「定員四百七十五人」と読める。三角形の照明が随所に見えるが、これは吉川によるものであろう。仕切りや後背のデザインと側面は明らかに異質で不調和である）

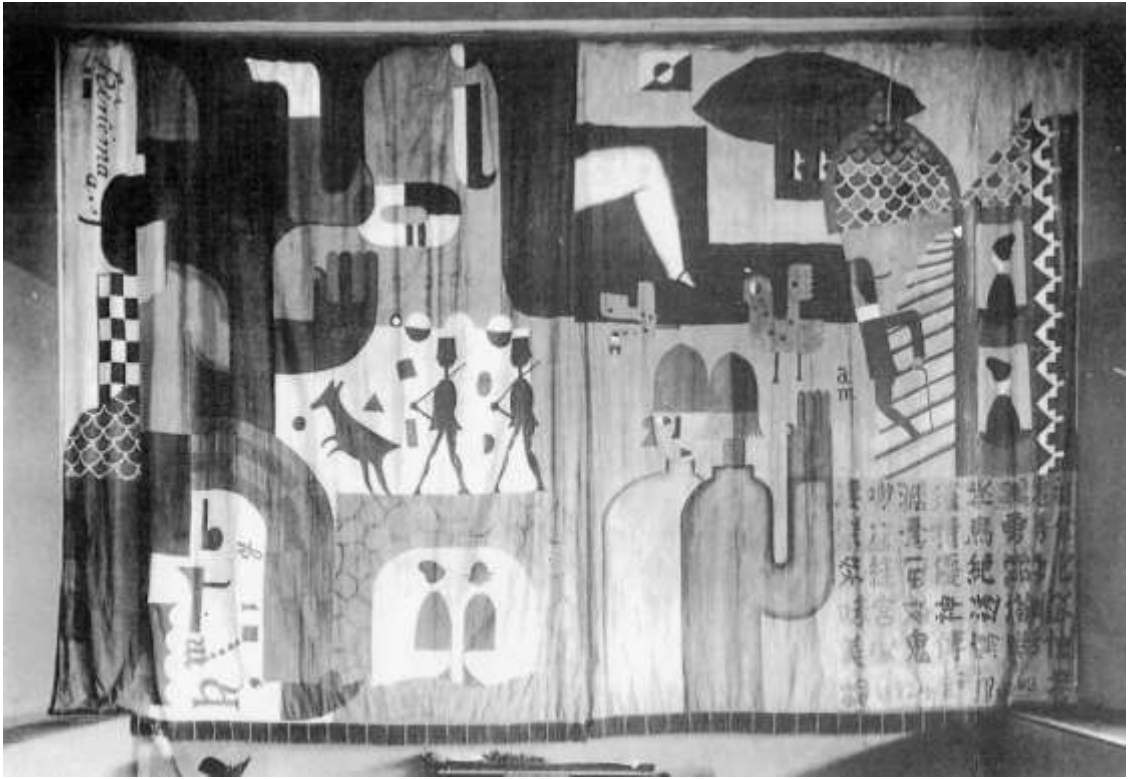


図6 緞帳（村山知義によるもの。右下の髪の毛の長い男が村山自身であるという（『演劇的自叙伝2』p.233）

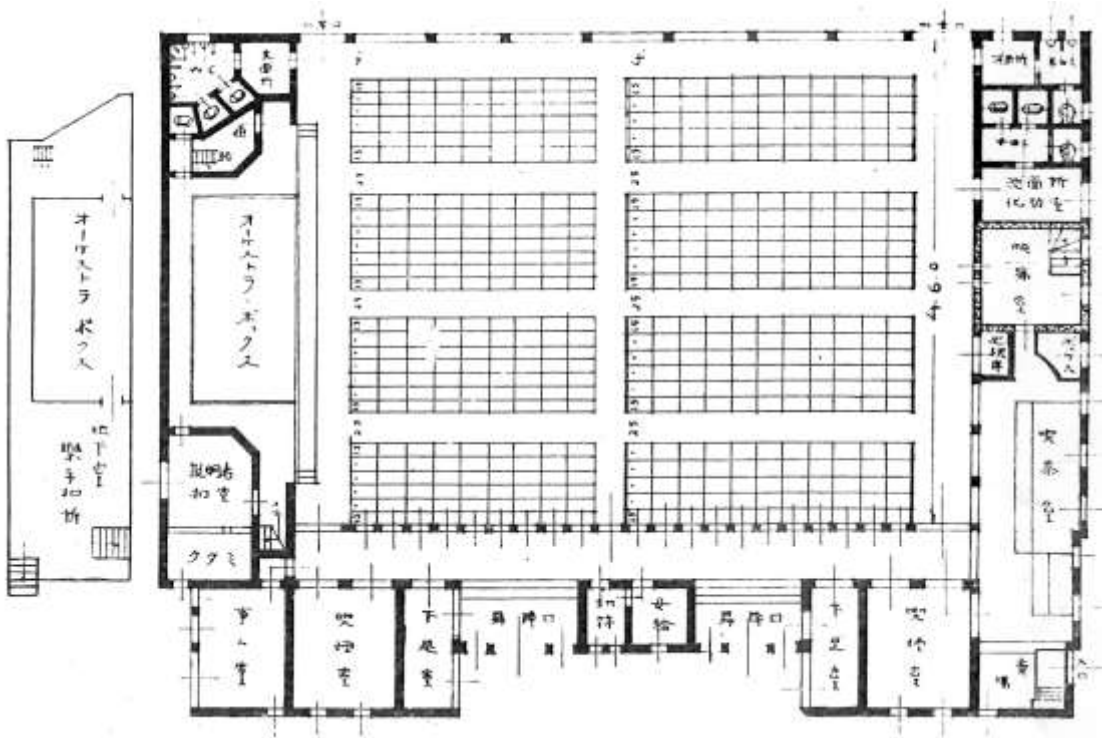


図7 平面図（右手外周の壁がボリュームに合わせて段々状になっている。下足室が設けられているが、この大きさでは十分に処理できなかったとみえ、開館後早々に土足制に切り替えられた（本文中で引用したキネマ旬報記事参照）

兎に角素晴らしく好奇の眼をそばだくしめる。全く以て去る頃にその保守的態度を我々が始終難詰した日活が常設館装飾を此派の美術家の手に依頼したことは正に驚くべき出来事である。決して宣傳をたのまれたわけではないが、地方の館の諸君など上京の際には一時間を割いて此の葵館の装飾畫を一見したならば良いお土産の種となるであらう。⁸

新東京名所「葵館」

十月二十二日夜。初めて新装の葵館へ行く。切符を買つて中へはいると（こゝでは土足が許されない）唯今奏楽中ですからと、カアテンの外へ暫く待たされる。十数人の人が待たされてゐる。いやにきびしいなと思ひつゝ風變りな建物の壁に描いてある風變りな繪を眺める。中からは「ラトラビータ」の組曲がひびいてくる。實にいい音色だ。私はトラビータの曲が大へん好きである。

やがてそれが終わると、ようやく我々は場内へはいる事ができた。新築落成初興行の最終の晩で、ぎつしりの大入りだ。私はまづ正面の幕に驚いた。實に感じのいい、表現派だか構成派だか知らないが。

珍奇といふだけでも十分私の目をよろこばせる繪がかいてある。ルシアンバレイの舞臺意匠にでもありさうな繪だが、幕としてこんなすばらしいのを見たのは初めてである。その次私には建物が頗る風變りで目新しいのを心地よく見廻した。そしてこれは素的だぞと思つた。震前にもなかつた高級常設館だと思つた。私は新東京景物詩の中へ、日比谷音楽堂や築地の劇場と共に、この葵館を加へなければなるまいと思ふ。これの設計者は、築地小劇場を設計した人ださうなが⁹、見た目の感じではこちらの方がずつといふ気分には思はれた。何しろ私はすつかり気に入つてしまつた。

……はねて外へ出てから私は小屋の外観をつくづく眺めた。なかなか悪くない。たゞ客を澤山入れさへすればいいといふ頭で造られた活動館ばかりの中に、かういふものをこしらへた日活の新しさをほめてやりたい。この上の願ひには、この入れものにふさはしい内容をたへず番組の上に心がけてほしい事だ。¹⁰

これらの記事から分かるように、葵館は当時としては

⁸ 「映画常設館見聞さまさま その一 葵館」『キネマ旬報』大正14年1月11日 第182号 34頁。せっかくの機会なので続きも引いておく。「…(略)…お客扱ひといふ事は結局女給さんの評判記めたものになるから遠慮したい。選抜宜しきを得たか、観客が上品だからか品の良い女給さんが多く嫌に化粧した奴や化物に近い様なやキャア々々騒ぐのが居ない事が気持ちよくて結構であるとして申し上げておく。それと下足の整理を一層敏活に行く様に工夫する事。心配になつた前の電車の音は案外軽微である。それから少々餘事だが開館後二カ月半に近い迄、売店が始まらないのはどうした事か。葵館といへば旬報社としては是非書き添えておかねばならないのは旬報社が未だ搖籃の貧弱時代に同情と理解を以て親切に階上の一室を明けて事務所として約一年半餘の間提供して呉れたのは葵館であつた。時移り人變るとも我々の葵館に対する懐しさと感謝の念は永く消えるものではない。現在の葵館に、その好意を持つて呉れた日活當事者に、それからとりわけて當時の葵館の人々たる山崎政雄、鹿野千代夫、徳川夢聲の諸氏其他に深謝の意を此の機会に表明しておき度い。」

⁹ この記述によれば1924(大正13)年に開場した築地小劇場の設計に吉川清作が関与していたことになる。しかしながら、主に設計に当たったのは「中榮一徹、浦田竹次郎の兩氏」(三宅周太郎『演劇五十年史』鱗書房、1942, p.305)とされており、吉川が関与したという資料はない。現時点では、吉川が築地小劇場の設計者であるというのは寄稿者の勘違いだと考えるのが妥当であろう(もっとも、意匠面から検討すれば、築地小劇場と吉川の設計した映画館の間には共通点がいくつか見られ、吉川が補助的に参加していたと考えられなくもない)。

* 例えばファサードがシンメトリーとなるようにポスターの貼り方で氣をつかっていること、上部にロンバルディアバンドが見えること、正門アーチの使用など(ただし当然のことながらこれらの要素は、必ずしも吉川のみに見られるのではないのであって、これを以て吉川が関与したと断定することは出来ない)。

¹⁰ 藤田草之助「映畫街散策」『キネマ旬報』大正13年12月1日 第179号 44頁

珍しい清新な意匠をもつ建物であった。特にファサードのレリーフや、緞帳といった装飾面での新奇さが目立つが、これらは（記事内であるように）吉川の手になるものではなく、彫刻家・荻島安二や美術家・村山知義によって制作されたものである。このような、神田・京橋日活館では行われなかった建築家と芸術家の協働が行われたのは、葵館が日活の設立当時から続く直営館であり、特に外国映画の封切館として日活の誇りとするところであったために、その建築にあたって特段の配慮が払われたからである。

この三人のそれぞれの担当範囲は、村山の『演劇的自叙伝』の記述によれば、以下のようなものであった。

一九二四年の夏¹¹、赤坂溜池の葵館という映画館の建築を、建築家の吉川清作、彫刻家の荻島安二と私の三人で引き受けた。吉川は建物全体の設計、荻島は正面の壁面の十二体の女の浮彫り、そして私は正面廊下の壁画、喫煙室と客席背面の設計と緞帳を受け持った。¹²

しかしながら、三人が葵館を引き受けることになった経緯や具体的な役割分担についての検討は、これまで充分になされてこなかった。そこで、本稿では、今日まで残された数葉の写真から、彼らの葵館における（意匠面での）役割分担について検討し、そこから三人が出会った経緯について推理してゆくことにしたい。

と、その前に、まずは吉川と協働した二人がどのような人物であったのかを簡単に確認しておこう。

村山知義・荻島安二とは誰か

村山知義は1901（明治34）年、東京神田に生まれた芸術家である。熱心なクリスチャンであった母の影響でキリスト教に興味を持ち、第一高等学校卒業後、原始キリスト教を学ぶためにドイツに渡



図8 村山知義

る。在独中から旺盛な創作活動を行い、帰国後の1923（大正12）年6月18日、門脇晋郎・大浦周蔵・尾形亀之助・柳瀬正夢と「大正期新興美術運動の代名詞、さらには日本におけるダダの代名詞」¹³的存在である芸術団体「マヴォ（MAVO）」を結成した。

村山はかなり早い段階から建築への志向を持っており、ドイツ留学前の1922年頃には母と弟のために住宅（「たった千円の家」（図9））を設計したほか、帰国後すぐに「たった千円の家」に増築する形で「三角アトリエ」を建設した。マヴォ第一回展覧会（1923年）においては建築作品を同人の中で唯一出品したほか、関東大震災後の帝都復興草案展（1924年4月13-29日）でも、建築作品を発表している¹⁴。

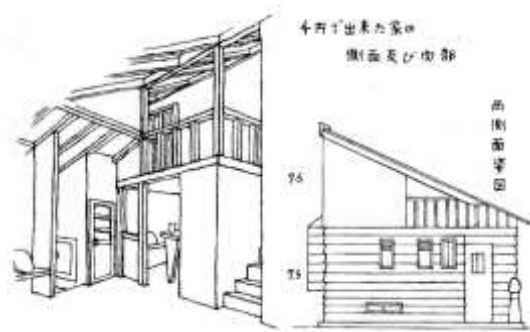


図9 たった千円の家

¹¹ 正確には、村山に声が掛かったのは10月のことである（五十殿1995:525。これは、『演劇的自叙伝』が戦後になってから書かれたものであるために起きた記憶違いであろう）。

¹² 村山知義『演劇的自叙伝 2』東邦出版社、1971、p.197

¹³ 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイデア、1995、p.454

¹⁴ 以上は本橋 n.d.:59-82 をもとにまとめた。村山知義の活動範囲は絵画から建築まで幅広いが、ここでは本稿に関係のある範囲の事項を記すに留めた。あまりに乱雑だが、村山やマヴォについては既に多くの論考がある（五十殿1995:453f.など）ので、詳しくはそちらを御参照願いたい。

一方の彫刻家・荻島安二は以下のような人物であった。

1895(明治28)年に横浜で生まれた荻島は、慶応大学予科在学中に彫刻の道を志し、朝倉文夫の門下生となった。1917(大正6)年第11回文展



図10 荻島安二

に「自刻」が初入選して以後、帝展や二科展などで出品を重ねていく。当初の因習的な写実から脱し、大胆に抽象化された女性の頭部や胸部の塑像を多く手がけはじめて以降、頭角をあらわすようになってきた。彼の破格の作風はほどなく、マネキン作りに生かされることになる。1925(大正14)年、京都の島津マネキンに請われて、日本で最初の西洋マネキンを制作し、その後もマネキンの原型作家として、時代の気分を反映するようなモダンガール像を多く手がけている。また、1924(大正13)年に建築家の吉川清作と美術家の村山知義と協力して手がけた赤坂の映画館、葵館では、建物正面のレリーフで裸婦の躍動するイメージをリズムカルに表現し、大いに話題になったという。¹⁵

この二人と吉川が出会った経緯については後に検討するが、少なくとも葵館で協働する以前に直接的な面識があったことを示す資料はない。本橋は村山知義が帝都復興創案展へのマヴォの出展にあたって中條精一郎宅を訪れていること、バラック装飾社の「カフェキリン」(1923)が曾根中條設計事務所によって設計されたことを

挙げて、少なくとも吉川は村山やMAVOの存在は聞き及んでいたであろうと推測している¹⁶。

葵館の意匠について

ファサード

葵館のファサード(図2,3)は総じて淡泊である。上部に大きな裸婦のレリーフを配しているほかは、装飾的な細部はほとんどない。ただ、パラペット天端に見える波模様や、両脇に3本ずつ配された縦長窓、入口軒裏に見える三角(錐?)形の照明¹⁷などは装飾的である(特に縦長窓は、内部では平滑であるにも関わらず、外部では三角形状に突出している特殊な形のものである。このようなデザインは当時流行したもののだが¹⁸、三角の部分がそのまま回転することは特異である(図2)。この形状の開口は、後のK氏邸の家族室においてより大胆に取り入れられる)。

吉川としては(もともとは)神田・京橋日活館と同じように外周を飾り立てるつもりであったのだろうが、ここでは荻島によるレリーフの背景になることに徹している。

全体の構成から言うと、マッシブなボリュームを段々状に組み合わせる構成自体は、神田・京橋日活館と共通している(ただし、葵館においては正面右側面の壁が、わざわざ直方体であることを明示する為に段状にされ、単に屋根のみが段々になっている京橋日活館よりも直方体であることが強調されている)。また、葵館においては、今までの2館よりも純粹なプラン・立面となっており、特にファサードはきれいなシンメトリーとなっている。(一方でレリーフ自体は正確なシンメトリーでない。このことは重要である。すなわち、ファサードから言うと、建物の平面・立面計画・窓周りなどの計画は吉川清

¹⁵ 前村文博「境界領域としてのフィギュール 清水三重三と荻島安二」『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレイターズ、2005、pp.35-36

¹⁶ 本橋 n.d.:42

¹⁷ 神田日活館でも軒裏に三角形の照明が見られた(前号 p.6 図3 参照)が、それよりも扁平なようである。「三角形」は、最初

期の『現代の住宅』から後年の「紫カントリークラブハウス」まで繰り返し現れる、吉川清作の中心的なモチーフである。

¹⁸ 例えば千疋屋フルーツパーラー(前田健二郎設計、『建築写真類聚 第4期第19巻 バラック建築』p.66)や、『建築写真類聚 第4期 第23,24巻(レストランとカフェー 巻1,2)』所収の応募作の中などに類例が見られる。

作によるものとみてよく、荻島安二の介入は、レリーフのみに限られているということである¹⁹。また一方で、荻島も中央に両手を掲げた人物を、その両脇にひざまずいた人物を置き、このみシンメトリカルに扱うことで、(左右対称形の)建物全体の構造に配慮しているようである)。

ところで、歩道に彫刻的な柱が建っている(図3)。違う写真(図2)からそれが立て看板を固定する為に利用されていたことがわかる。ただ、これは誰の設計によるものか判然としない。私はこれを、村山知義によるものではないかと考えている(根拠は後述する)。

喫煙室

ここで内部に目を向けよう。墓館に二室ある喫煙室は、村山知義が設計したとされる部分である。その内部は『演劇的自叙伝』の記述によれば

喫煙室の中央には太い柱をつくり、その中をくり抜いて照明を仕掛けた。小さい部屋なので椅子は置かず、その代り、その柱の四周や三方の壁の、立って倚りかかってちょうど背中あたりに、直径三十センチの丸い布団をつくりつけた。²⁰

というものであった。しかしながら、内部写真(図12)を見ると、この柱に設けられた照明は位置が低すぎて人が寄りかかると隠れてしまい、あまり実用的でなかったようである。そもそも、これだけ照明の位置が低いと、寄りかかった時に背中とぶつかってしまい、ここにクッションを取り付けることなどできなかったであろう。また、壁際には(村山の話では存在しないはずの)長椅子

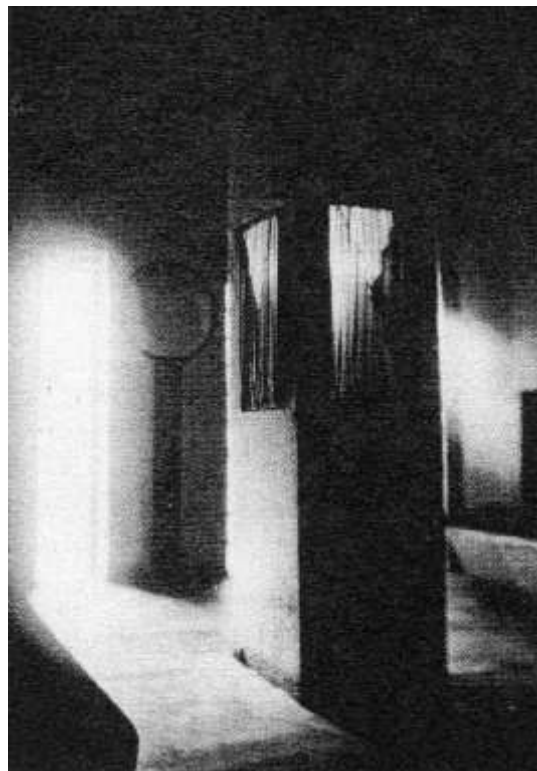


図11 喫煙室の内部(村山の話にあるはずのクッションは無く、逆に彼の話にはなかった長椅子が造りつけられている。柱は村山のデザインにしては簡素に過ぎ、武骨であるが、これは、緞帳の方で手がいっぱいだったために、柱の監理まで手が回らなかったためであろう)

が映り込んでおり(図11)、この記述を額面通りに受け取るのは危険である²¹。

ところで、喫煙室のインテリアとして伝えられている写真の中に、先の歩道の柱と同じような柱が見える。ここでは村山知義らによるペインティングが施されているが、その造形のみを取り出してみれば、歩道にあった柱と、屈曲部分に曲線が付いている点でよく似ている。しかし、私はこれを、荻島安二によるものであると考え

¹⁹ これは村山の記述通りなので何を取り立ててといふかしがられる向きもあるかもしれないが、実は荻島は喫煙室や客席後背の設計においては墓館の建築計画に食い込んでいるのである(後述する)。

²⁰ 村山 1971:197

²¹ この説明として、①墓館には喫煙室が2室あったので、村山の言うクッションを取り付けた室とは、別の喫煙室のことなの

かもしれない。②あるいは、村山はこの頃、緞帳制作に掛かり切りになっており、喫煙室の施工を監理できなかったために、柱の照明高さや造作に手違いが起ったのかもしれない。③あるいは、竣工時にはクッションがあったものの、直ちに撤去され、長椅子に置き替えられたのかもしれない。といった仮説が立てられるが、いずれにせよ、喫煙室のデザインが『演劇的自叙伝』の記述通りでない瞬間が存在したことは事実であろう。



図12 (左) 喫煙室内観(左が村山知義。ところで正面(図3)では窓は棧で16分割されているのに、この写真では10枚になっている。どうも、道路側の縦長窓の下部6枚はフェイクであるらしい。平面図の入口部分に階段が見えるので、床が上がった分が伊達になったのであろう。そして、図2からこのうち上部6枚が開放できたことがわかる)

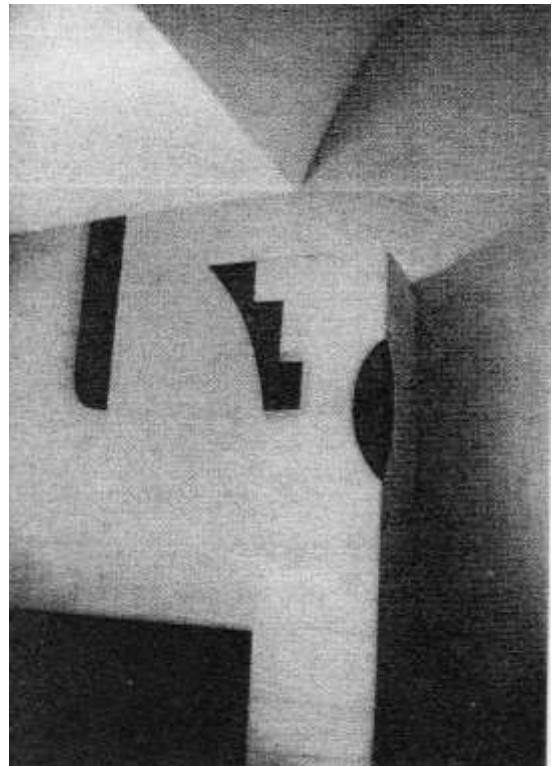


図13 (右) 喫煙室の柱(曲線のついた彫刻的な柱にペイントが施されている。天井の一部は曲面となっており、また斜めになっている。引用元では、図11,12と合わせてロビーというキャプションを振っているが、ここでは喫煙室で統一した)

ている。

ここで読者諸賢は、ちょっと待てよとおっしゃるであろう。これに似た歩道上の柱は村山知義によるデザインだと貴君は述べたし、そもそも喫煙室の設計自体は村山知義によるのではなかったのかと。なぜ、喫煙室の柱が、荻島安二に結び付けられるのか。

その疑問に答えるためには、客席後背を検討しなければならない。

客席後背

一般には、客席後背の設計も、村山知義の手になると言われてきた。例えば五十殿氏は

一方、〔客席〕後方の壁画は対照的に抽象的な文様で構成されている。円をモチーフとして、音符のよ

うにみえるかたちもあり、規則正しく並んだ開口部のかたちを締めくくするような直線と曲線の組み合わせもある。また映写室のドアとそれに呼応する四分円のようなかたちをした暗色に塗られた映写のための開口部(さらにそれは客席後方の開口部や座席を分ける仕切りの開口部のかたちにも対応している)があり、細かな配慮をうかがわせる。

いずれにしても、バラック装飾のかかなりダダ的な構成とは趣が異なることが納得できよう。商業的な仕事と言う制約があるにせよ、村山ははっきりと画風を変えたのである。その原因は何か。おそらくはこの年(一九二四年)『みづゑ』七月号と九月号に連載した構成主義論に端的にうかがえ、その造形思想に対する理解の深まりに由来しているように考えら



図 14 (左) ロリガンのカウンター (写真が不鮮明だが、酒瓶の並ぶ棚の断面が帆型になっていることがわかる)



図 15 (右) バー・カフェ マッターホンの客席 (明らかに葵館と同様の帆型が使われている。中央のテーブルを支える脚は頂部がギザギザになっているが、実は客席背後 (図5) の帆型の下梁部に、これと同じようなレリーフが見える (表1参照。もっとも、それが照明器具である可能性も否定できない。しかし、荻島が葵館の建築部分に関与したことは帆型を検討するだけでも十分証明され得る)

れる。²²

と述べ、四分円の形をした開口部 (煩雑なので以下帆型と呼ぶ) を、その他の壁画と同様に村山の手になるものと考え、それをダダから構成主義への転換として捉えている。

ところが、実際には、この帆型は、荻島安二の建築作品に頻出する特徴的な造形なのである。荻島安二がインテリアを手掛けたカフェ・バー「マッターホルン」の内部写真には、明らかに葵館と同様の帆型が存在しており、バー「ロリガン」の棚にも (不鮮明だが) 帆型が存在していることが分かる。一方で、この頃の村山知義の作品

の中には、このような帆型の造形は見られない。

これをさらに検証するために、この頃の村山と荻島の作品から、それぞれ帆型のような部分を抜き出した表を作製したのでご覧いただきたい (表1)。村山作品にも同じような造形は存在するが、次の二点で異なる。

第一には、荻島は帆型を、必ず頂部を上にして用いるが、村山はかなり自由であり横や下向きに使うこともある (これは、荻島が彫刻家であって、重力への意識を有しているのに対し、平面デザインから出発した村山はあくまでグラフィカルに帆型をとらえているからであろうと思われる²³)。

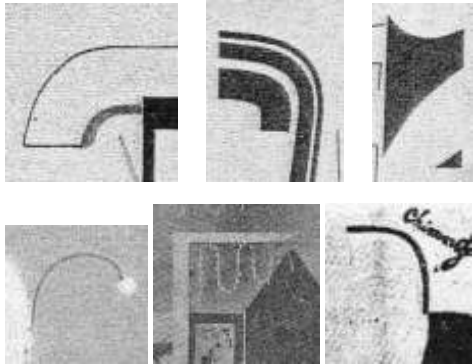
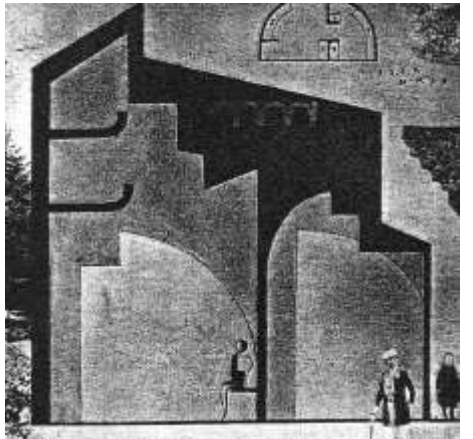
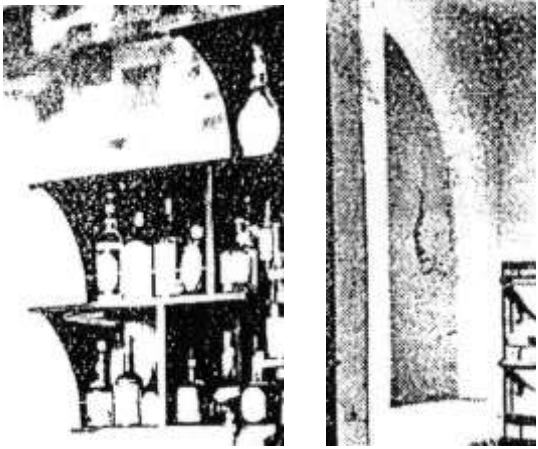


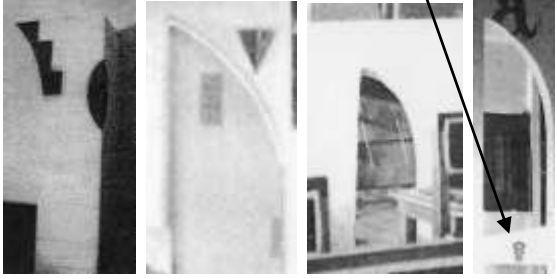
第二に (これが一番決定的であるが)、垂直線と曲線部

²² 五十殿1995:528 (下線・□内は引用者)

²³ さらに丁寧に述べておくと、彫刻は (建築から見れば構造がないと言われるが) やはり物質であって構造に支配される (著しく不安定なものはいらない)。その結果、必然的に上下が固定される (平面作品はひっくり返して観ることもできるが、彫刻はひっくり返すわけにはいかない)。ゆえに、上下の区別を

意識せざるを得ないし、だからこそ重力に抗することが一つの表現として成立し得る (これは建築も同様で、だからこそ磯崎新の群馬県立近代美術館が革新的なのである)。荻島の帆型の頂部が鋭角で、かつ、天に向けられているのはこのような抗重力の意識によるはずである。村山知義にこの意識がなかったのは、彼の舞台装置『朝から夜中まで』を検討すれば了解され

表1 村山知義と荻島安二の作品にみる「帆型」の違い

| | 村山知義 | 荻島安二 |
|-------|---|--|
| 例 |   |   <p>左上はバー「ロリガン」のカウンター、右上は「マッターホン」の客席。いずれも荻島安二によるもの。頂部のとがった帆型が確認できる。ところで、左は「マッターホン」のテーブルの脚だが、これに近いものが葵館の帆型の下に見える。</p> |
| 問題の部分 |  <p>左が歩道上の柱。右が喫煙室の柱と客席后背のドア・通路仕切り・開口部。こうして比べてみると、明らかに左は村山に近く、右は荻島に近い。</p> |  |
| 出典 | <p>(左上から順に) 村山知義研究会編『村山知義の宇宙』読売新聞社 p.132 (以下3点同)、『建築新潮』6(3) 口絵 (以下2点同)、『村山知義の宇宙』p.121 (以下2点同)、本稿図3、</p> | <p>本稿図14, 15 (以下2点同) , 13, 5 (以下3点同)</p> |

村山の「公園内の休憩所」(表中で一番大きく示した)は、一見判別に窮するが、頂部の角度を見れば荻島安二のものよりもずっと曲線が緩いことが観取されるであろう。上表は筆者作成。

る。五十殿氏はロシア構成主義のヴェスニンの作品を取り上げて比較しているのでこれに則ると、ヴェスニンの舞台装置(「木曜日の男」、五十殿 1995:532)がブレースを多数露出させ、また全体的に上すぼまりでまとまりがあるのに対し、村山の舞台装置は構造体の露出がわずかで、また全体に水平的でとりとめがない。これは村山の構造への意識(ひいては重力への

意識)が薄いことを示唆している。というよりも、むしろ、この頃の村山が取り組んだのは、絵画において自明のものとしてされている重力による上下の区分に対して、それが本質的には不要のものであることを示そうということであったと理解するほうが良いだろう(例えば雑誌『マヴォ』における組版の仕方に、それが良く表れている)。

が交わる頂点部の角度が異なっていることである。荻島作品では、帆型の頂部はいずれも鋭角になっている。一方で、村山の用いる曲線は、一様に 90° に曲がっており、頂部では扁平になっている。

これを葵館に適用すると、客席后背の開口部やドアの形・客席間の仕切り・それに喫煙室の柱の頂部はまさに荻島作品に頻出する帆型であり、歩道上の柱における曲線は村山のものに近いことが理解されるであろう。

つまり、荻島は、レリーフ以外の建築部分においても、デザイン面で関与していた可能性が高い。

客席側面

客席の左右側面（図 4, 5）には連続した正円アーチが見られる。正円アーチは吉川の好んだデザインで、『現代の住宅(1920)』のいくつかの作品²⁴において葵館と同様に連続した形で使用されているほか、後の K 氏邸でも門扉に使用しているのが確認できる。客席側面は、荻島の関与が認められる客席後背部と比べるとかなり異質で（よく言えば安定感があり、率直に言えば単調）、これは吉川の手になると考えてよいように思う。

その他の部分について

これまで触れてこなかった部分の役割分担については、概ね村山の記述通りであると考えてよいだろう。すなわち、正面廊下の壁画・カフェー・緞帳が村山知義の手になり、その他は吉川清作の手になると考えられる。ただし、写真では見えない、廊下の天井形状などいくつかにおいて、荻島の手が入っていることは考えられる（図 13 において天井に R が付いているのは、吉川というよりは荻島のアイデアだと考えた方が素直に理解できそうである）。

三人はいつ出会ったか

それでは、この 3 人はどのような経緯で出会ったのだろうか。先に述べたように、（管見の限りでは）互いに直接の面識があったことを示す資料はないから、結論から

言ってしまうえば葵館を契機として出会ったものであるが、それでは元も子もないので、ここでは更に詳しい背景について、現存する資料を基に（知り得ない部分は想像によって補いながら）時系列に沿って再現してみたい。

最初の依頼

最初に、葵館の設計の仕事を請け負ったのは（当然ながら）吉川清作であろう。この直接的な証拠はないが、葵館は神田・京橋日活館と同時に関東大震災によって失われたものであって、再建も同時に請け負ったとみるのが自然である。

しかし、何らかの理由により葵館の工事は後回しになり、同じく吉川が手掛けていた神田・京橋日活館が先に竣工する。震災直後は娯楽に飢えた人々は映画館に殺到して空前の好況をもたらしており²⁵、先行して開館した二館もかなり優秀な興行成績を上げたものと思われるが、施主である日活の担当者にしてみれば、その意匠には、やや物足りなさを感じたかもしれない。というのも、（外部はともかく）内部はかなりシンプルな造りだったからである（例えば、神田日活館の内部は白く塗りまわされた曲面天井と板チョコ状の凹凸で覆われた壁面のみによって構成され、また京橋日活館の内部も、モールディングが施されてはいたけれども、平滑な壁面が占める割合が多く、全体としては静かな印象を与えるものであった）。

急に話は変わるが、震災直後に『此際！』という言葉が新聞などの言説中で流行したという興味深い話がある。佐藤美弥氏²⁶によると、『此際！』とは「震災が白紙からの出発点を創出し、平常時では不可能な見直しが可能になり、それゆえ変革・改善の好機である、という感覚」に基づく様々な改善提案に付されたキャッチフレーズである。しかし、主には第一次世界大戦以降急速に発展した日本の都市生活を奢侈で浮薄なものと考え、震災を契機に「社会・生活の簡素化・科学化」、すなわち合理

²⁴ 例えば<7, 10, 19>など。

²⁵ 『日活五十年史』日活株式会社, 1962, p.79

²⁶ 佐藤美弥「都市社会における文化活動の研究 両大戦期の創宇社建築界を中心に」一橋大学 博士論文, pp.44-49

化を目指そうという主張の中で使われることが多かった。そしてそれは、「壊滅した都市としての東京」を復興する文脈では、もっぱら技術的な見地からの実用的な都市計画（端的に言えば不燃都市化）を行うことが第一に想定されていた。

佐藤氏はバラック装飾社、マヴォなどをはじめとする芸術団体が一様に「東京の復興」と結びつくことを目指したのは、『此際！』に代表される社会・生活の合理化の波に対する反動ゆえであったと主張する。つまり、合理化が進めば、「簡素」でも「科学的」でもないものは排除されるのではないかという危惧があった。そこで、特に震災後の喫緊の課題であり、最も目立つものであった「帝都東京の復興」という課題に対し取り組むことで、社会における剰余のもつ豊かさとその美を知らしめるべく、彼らは街へ飛び出していったのである²⁷。

このような視点を踏まえると、吉川が神田・京橋日活館に於いてセセッションという近代的ではあるが、やや装飾的な様式を選択したのは、『此際！』という合理化への共鳴と、芸術界の一員としての意識との狭間の中で揺れ動いた結果であると言えるだろう。

しかし、畢竟ひとつの娯楽施設に過ぎない映画館も、生活の合理化が推し進められれば自らが猥雑なものとして排除されることを危惧せざるをえない立場にあった。そこで、より直接的に芸術界と結びつくことで保身を図ろうとした。葵館において、吉川に留まらずに荻島安二が呼び出されたのは、まさにその為であろう。

荻島安二の参加

荻島と日活との接点をはっきりとしないので、経緯を明らかにすることは出来ないが、葵館への参加は日活側

依頼があったものだろう。というのも、既述のように、荻島はレリーフのみならず、客席後背や、喫煙室の柱（もしかしたら柱の写真に写り込んでいる上部の R 天井の部分も）などの建築内部のデザインにも関与しているが、しかし、吉川が自力で一つの建物を設計しうるのは神田・京橋において示されており、吉川が芸術家の協力を自主的に求めたとは考えづらからだ。

当初計画について考えてみると、もともと吉川にファサードの装飾への企図があったことは、左右対称に三対配された縦長窓やパラペット天端の波型から窺い知ることが出来る。内部については、ローマンな正円アーチが整然と並ぶような構成を採ろうとしていたのであろう。

しかし、竣工した神田・京橋日活館は先に述べたように、ややシンプルなものであった。これは、神田・京橋では良いとしても、封切館としての歴史のある葵館においては許容されないものであったために、文展・帝展に出品を重ね、順調なキャリアを築いていた若手彫刻家・荻島に正面のレリーフを依頼し、また単調な内部についてもアドバイスを求め、その提案により帆型のモチーフをとり入れることになったものであろう。客席側面に荻島のデザインが見られないのは、すでに工事が進みつつあり手が付けられなかったところか、あるいはこの部分を守ることを引き換えに、吉川は荻島の提案を後面に採用することを認めたのかもしれない。吉川だって天才肌で気が向かないと仕事をしないような性格の人なのだ²⁸。

その時期は、恐らく設計が固まり躯体工事も始まった1924（大正13）年の夏ごろであったろう。というのも、

²⁷ 佐藤氏は「芸術界の社会的活動の活発化は、思想統制政策に対する反動というよりはむしろ、それを含めた精神的側面の変革への社会的関心の高まりを積極的に利用し『復興』の言説を同時に読みかえる戦術」であり「震災直後における文化界の、社会に対して反応を示し存在意義を高めようとする意思のあらわれだった」と述べ、つまり彼らの行動の根底には自己顕示欲があったと指摘するのであるが、本稿の文脈ではそこまで穿った見方をする必要もないと思われるので脇に置いておく。(Ibid.

pp.48-49)

²⁸ ここでは、荻島と吉川は直接的な面識がなかったと仮定して、両者の間に軋轢があったかのように書いたが、実は旧知の関係にあり、吉川が内部のデザインに悩んでいたところに荻島がアドバイスしたのだと考えても良いかもしれない（葵館の後に彼らはサイセリアにおいて協働しており、友好的な関係にあったことが認められる）。だが、いずれにせよ概ねの流れは変わらない。

もっと早い段階から関与していたのだとすると、もう少し様々な箇所に萩島らしいデザイン（例えば尖頭アーチ、帆型など）が現れてよいと思われるからだ。今知られている萩島の担当部分は、後付けとは言わないまでも、いずれも躯体とは無関係の部分に限られている。また、萩島の手になる客席後背や通路仕切り壁は、客席側壁などと比べると異質なデザインであり、お世辞にも調和したのではなく、それがより突発的な介入であったことをうかがわせる。

村山知義の参加

しかし、想像してほしい。とりあえず帆型の開口が客席の後ろや通路の間仕切りに採用され、室内の単調さは多少救われたにせよ、西洋城郭風で華やかかなりし先代の葵館と比較するとやはり何か寂しい気がしないだろうか。ファサードは大きなレリーフを彫りこむことになったから良いとしても、内部は依然としてモノクロームの世界である。工事途中の椅子も映写幕もない、埃っぽいガランドウに立った日活担当者は、このままで良いものかとハタと困っただろう。その時、彼は開館したばかりの神田日活館を借り受けたいと申し込んでいた謎の青年美術家がいることを思い出した。その青年美術家こそ村山知義であった。

この頃 MAVO では盛んに展覧会を開いており、神田日活館でも作品展示を企画していた²⁹。その詳細は以下の記事より知れる。

²⁹ 五十殿 1995:523

³⁰ 「マヴォの廣告」『マヴォ』第3号（大正13年9月1日発行、日本近代文学館 復刻）

³¹ これも（『此際！』に関連して先に示した）街中へ飛び出し直接的に作品を示そうという当時の芸術界の機運に沿うものであろう。MAVO もまた二科落選に抗議して野外での移動展覧会を開くなど、大衆により積極的に（直接的に）接触しようとしていた。

³² これは日活担当者の賢明な判断であるか、もしくは、官憲の圧力があったのかもしれない。というのも、この常設展の中止を知らせる『マヴォ』第4号の「マヴォの廣告」では、同3号が発禁処分となったことを合わせて挙げて「権力のある諸君

△マヴォの常設展覧会

九月五日（金曜日）より神田日活館でぶつ續けてマヴォの常設展を開く。主としてキネマ演劇、俳優、舞踏等に関する作品を發表する。毎週映画の變る度に作品を取換える。³⁰

ここから分かるように、この企画は（期限を限って会場を借り切って行う）通常の展覧会とは異なり、長期にわたって映画を上映する脇で展示しようというものであった³¹。

これは結局何らかの事情で³²流れてしまうのだが、おかつ頭の青年とその奇怪な作品のことは、担当者の印象に強く残ったことであろう。葵館の綴帳を描いてほしいという依頼があったのは、まさにその直後の10月のことなのである³³。

しかし、葵館の開館したのは10月17日だということだから、村山に残された時間は1か月もなかった。本当の直前である。つまり日活の人はそれだけ焦っていたのだ。萩島安二を招聘し、内外の意匠に手を加えさせたが、色彩的な華やかさとは無縁であることを知って。村山は「活動写真館であるから思ひ切つて愉快ではでなもののにした」と記している³⁴が、それは日活側からの要求でもあったに違いない。

依頼があってからの慌ただしさについては、村山が『アトリエ』1925年2月号に寄せた文章が一番よく伝えてい

よ。裸体画なんかはいくら虐待してもいい。藝術冒険なんてブーいふ肥つた紳士達なんかには耳なんかし給ふなあいつらはローレツなるアホーなんだから横つ面でもひつばたいてやり給へ。だが僕達はただ絶望してゐるだけでローレツではないんです。或ひはただ希望を持つてゐるだけでアホーではないんです。だからかんべんして下さい。」と不満を述べているからである。

³³ 五十殿 1995:525。村山は後年、葵館での協働の依頼があった時点を「一九二四年の夏」と誤って記憶しているが（『演劇的自叙伝2』p.197）、これは9月の連続展の企画との関連でそう記憶していたのだとすれば納得がいく。

³⁴ 『演劇的自叙伝2』p.233

るので、孫引きしておく。

緞帳は幅四間（七・三メートル）、高さ三間（五・五メートル）で、それを中央から割って左右へ引くことにした。切らないままのダックという布を、丁度四間に三間の日活本社³⁵の会議室の床に敷きつめて私は仕事にかかった。これをみんな油絵具で塗りつぶすのである。コムポジションは何分にも活動写真館であるから思い切ってはでなものにした。（中略）

私はこれを一人で四日間で仕上げるつもりでかかった。ところが生のままのダックはすっかり裏へ絵具を通り抜けさせてしまう。一尺四方塗りつぶすのだって余程の力と絵具と時間とがいる。といって膠などを引こうものなら、緞帳がゴワゴワと音を立てて三角や四角になって巻き上がるということになる。それに暇もないしするから、やっぱり何も塗らないでじかに描くことにきめて（すると加藤の思い出話で下塗りしたとあるのは思い違いらしい）ベルリンから買って来たトテモ大きなパレットにテレビンで絵具をどンドン溶いて太い筆でこすって行った。街の外は東京駅である。左手は永楽町の交差点で、交通巡査が一日中手を振っている。東京駅の方から空の人力を曳いて来た馬が何に驚いたか俄かに狂奔して馬子をはねとばし、撒水車をひっくり返し、交通巡査を轢き倒して、ガードの煉瓦塀にガシャーんと衝突して止まる。人が黒山のように集まって大騒ぎをして、巡査を自動車に乗せて病院に運んで行く。隣の部屋は試写室でひっきりなしに映写機のハンドルを廻す音がする。便所へ行く途中でちょっと覗くと早川雪舟の「バタイユ」を試写している最中である。幕の上に四つん這いになって一生懸命になって

いると、ドアを開けているんな顔が入れ変わり立ち変わり覗いては、変な顔になって引っ込む。昼になるとガード下のめし屋へ鰻丼を食いに行つて精力をつける。夕方のラッシュアワーになると、永楽町のガードをくぐって東京駅の方へと生気のない人間の波が物凄く流れ始める。そこで私も筆を洗つて窓を洗つてその人並みの中へ流れ込む。

こうして三日たった。肩と腰とがずきずきと痛み出し、チューブのからが部屋の隅にうず高くなってきたが、まだ半分も出来ていない。村上さん（日活の係の人。葵館は日活が建てたのだ）が来て心配そうな顔をする。さすがの私もへこたれて四日目からはマヴォの連中二三人に手伝いを頼むと、仕事は進むが自分の思うように行かないので気がいらいらする。絵具代が予定以上の額に達する。営業部長が来て、いかにも関心しない絵だという顔をして出て行く。それでもとうとう一週間目には出来上る。そして高島屋が黄色い裏と赤い絵をつけに、車にのせて持って行く。

今度は溜池の現場に行くと、まだ僕達が手をつけられる程には工事は進んでいない。開館の日はどんどん迫ってくる。荻島君は正面の足場の上で、高さ八尺（二メートル半）長さ十四間（二十五メートル半）の面に十人ばかり³⁶の裸の踊子の浮彫りをつくっている。吉川君は手拭いで頬かむりをして工事の指揮をしている。愈々開館にもう三日間というときになって、やっと正面廊下の壁に布が張られた。そしてその上へ私は一日半で六つの小壁画を描いた。王様が獺に行く、王妃が別れを惜しむ。城の中では宴会があって、舞姫が踊っている所。

愈々開館が明日に迫ってしまった。手の空いてい

³⁵ 日活本社は震災により焼失してしまったため、一時的に牛込神楽坂の牛込館に移転した後、1923年12月8日に、日活ビルディング建設のため確保していた丸ノ内の敷地（麹町区永楽町二ノ二）に建てたバラックに移転した（『日活の假移轉』『キネ

マ旬報』1924年1月1日147号13頁）。村山が葵館の緞帳を描いたのは、この永楽町のバラックにおいてである。

³⁶ 筆者が写真で数えてみたところ11人のようであった。

るマヴォの人達皆に来て貰って、喫煙室二つ、カフェー、観覧席の後ろの壁へペンキで描き始めた。喫煙室は全部布が張ってあるから良かったが、其他は壁が塗り立てなのでペンキがのらない。しかし乾くの待ってはられないから、深更迄かかって、不成功を知りながらもひとまず塗ってしまった。骨を折った緞帳が正面につるされ、スポットライトがパッと当てられた時はさすがに嬉しかった。ずいぶん大きな仕事をしたものだと思いきや鼻を高くしたものが、この間友達の所で見た外国の雑誌にピカソが自分で描いたラッشان・バレエの『道化』の緞帳の上に坐っている所があったが、とても大きなものらしいので凹んでしまった。³⁷

葵館はこのような混乱の中で開館の日を迎え、昭和10年にその灯を落とした。

葵館後日談

神田・京橋日活館から続いた吉川との日活の縁は、(公の仕事としては) 葵館の竣工を境に切れてしまう³⁸。荻島安二も同様のものである。日活との関係が一番長く続いたのは村山知義で、葵館のプログラムである“aoi weekly”の表紙(図16)や、ポスターなどを3年余りにわたって担当していた³⁹。

ところで、本稿を書くために葵館について調べていたところ、正面の裸婦像が着色されている珍しい写真を見つけた(図17)。どうやら竣工には間に合わず、後から塗られたものらしい。荻島のデザインに依るのだろうが、ストライプ柄を用いるなど、かなり派手であり、これまでの端整なレリーフのイメージとは異なる。これは一方で、日活が求めたのは正にこのような過飾性だったという証左でもあろう。



図16 村山知義による aoi weekly の表紙

まとめ

今回は葵館について概観し、以下のことを明らかにした。

これまで村山知義の手になると考えられていた客席後背や喫煙室の一部に荻島安二によるデザインとみられる部分が存在すること。

一方で、歩道上の柱は村山の手になると思われること。

葵館の設計は、もともとは吉川に託された仕事であったものが、日活側の希望により、まず荻島が参加し、次に村山が参加したものであろうということ。

日活が芸術家の参画を求めたのは、震災後の『此際!』に代表される生活の合理化への流れに抗するためであったということ。

先に吉川が神田・京橋日活館においてセセッションを選択したのは『此際!』に代表される合理化への志向に

³⁷ 『演劇的自叙伝2』pp.233-235 所収。初出は 村山知義「私の画生活 大正十三年度の二つの仕事」『アトリエ』1925年2月号。

³⁸ ただし、日活との個人的なつながりは、戦後に至るまで続いた(次号以降で詳述)。

³⁹ 『演劇的自叙伝2』p.198

【バラック劇場の異彩
葵館】

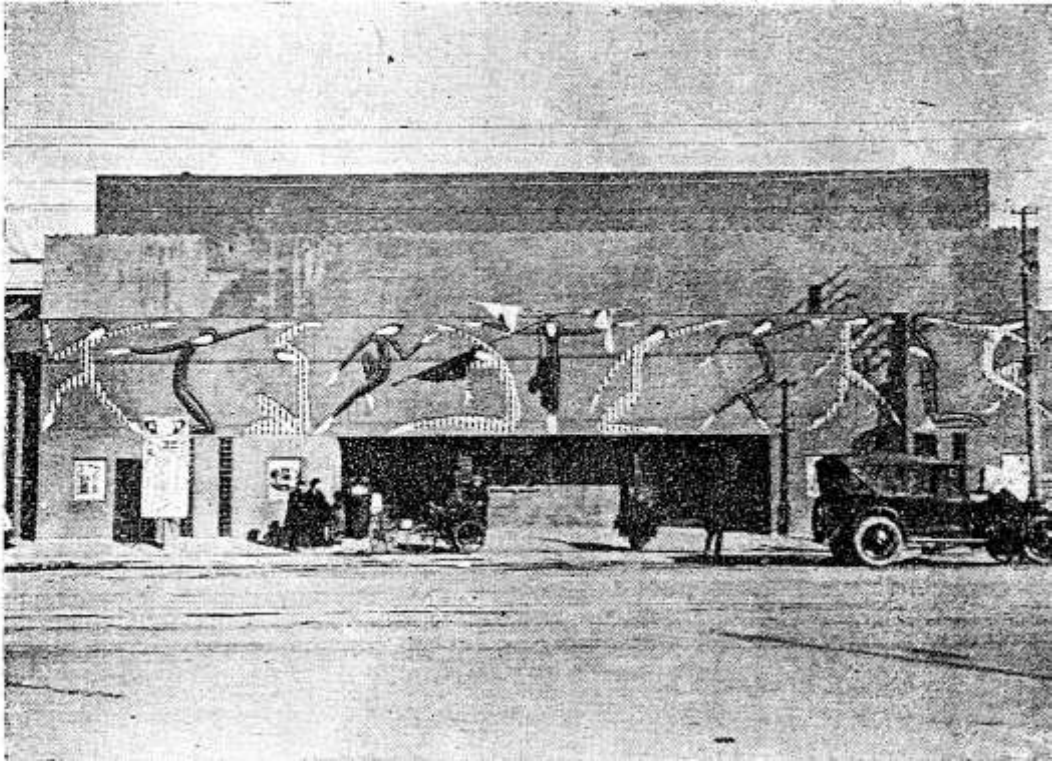


図17 塗装された荻島安二のレリーフ

共鳴していたからだと言ったが、これはその後の、生活改善の手法として建築の活用を訴えた「新婚の村」計画や、また（文字通りの）「合理派建築会」の結成へと繋がっていく重要な傾向であると思われる。

訂正

神田日活館の取壊し時期について、前号 p.4 では1928（昭和3）年2月、p.6 では1929（昭和4）年頃と矛盾し

たことを書いてしまったが、そもそも参照した史料の別の箇所⁴⁰に1928年12月に建替え工事を起工したとあるのを見落としていた。通常、建替工事の起工式は旧建物を解体した後に行われるから、吉川の設計した神田日活館の取壊し時期は、起工式に先立つ1928年の秋頃であったと思われる。筆者の史料の検討が不十分であった。ここに訂正する。

（次号へ続く）

⁴⁰ 『神田日活館』は、日活と其姉妹会社日本興行との協同で工費参拾五萬圓を以て、二九四坪の敷地に近いと中二階を有するスペイン風の瀟洒な平屋建式の下に昭和三年十二月に起工し、翌四年六月に落成した。此総建坪は六八九坪で、煉院は千

二百名を収容し得られ、尚屋上に運動場及び休憩室を設け、オーケストラピットは自動式である。」法貴顕貞『日活の社史と現勢』日活の社史と現勢刊行会、1930、pp.88-89

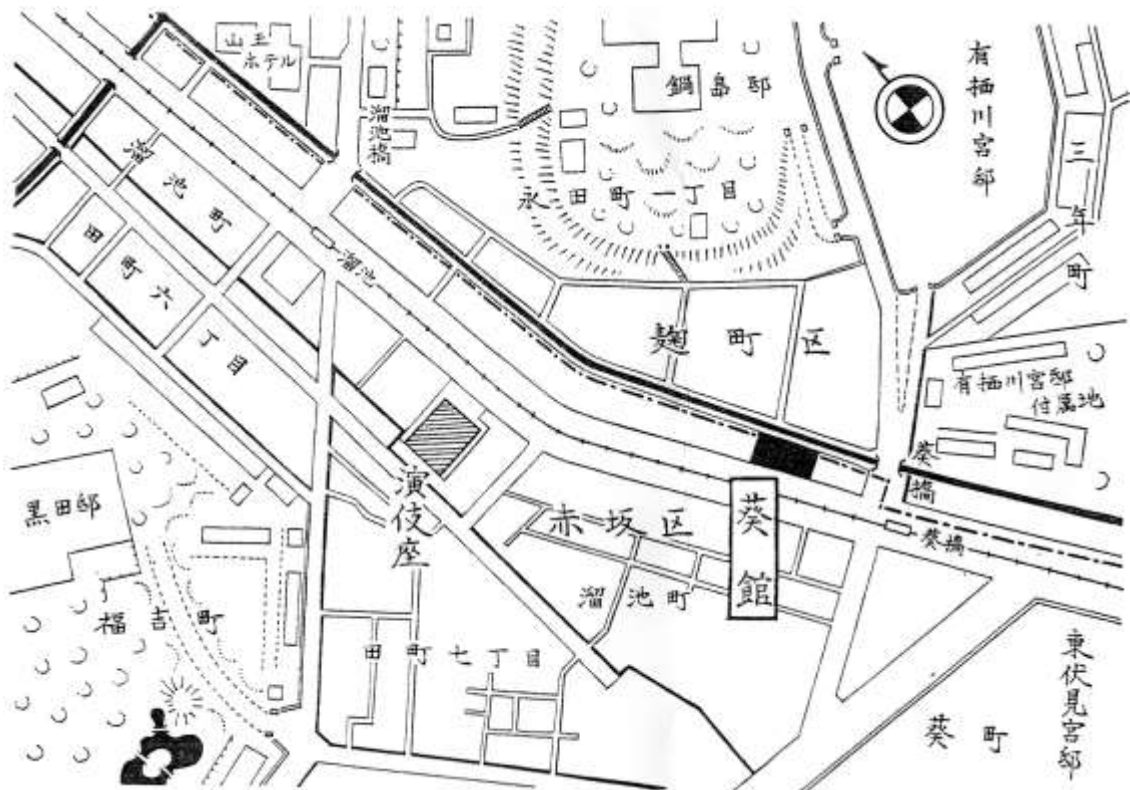


図18 葵館所在地地図

画像出典

図1: 三國一朗『徳川夢聲と世界』青蛙房, 1979, p.133

図2-7: 『建築写真類聚 5期16回 活動写真館 巻2』洪洋社, 1926, pp.63-68

図8-9: 村山知義『演劇的自叙伝2』東邦出版社, 1971, 口絵

図10: 『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレイターズ, 2005, p.67

図11-13: 村山知義研究会編『村山知義の宇宙 すべての僕が沸騰する』読売新聞社, 2012, p.123

図14-15: 『合理派建築会リーフレット』合理派建築会, 1929, p.5 (個人蔵)

図16: 『aoi weekly』No.78, 大正15年4月16日, 表紙

図17: 「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』182号 大正14年1月11日, p.84

図18: 三國1979:139

図19: 『aoi weekly』No.49, 大正14年9月25日, p.8



図19 葵館プログラム目次挿絵

<資料1> 神田日活館・京橋日活館・葵館 関連年表

| 西暦 (元号) | 神田日活館 | 京橋日活館 | 葵館 |
|-----------------------------|---|------------------------------|--------------------|
| 不明 | 佐藤三吉邸となる。明治期の大火により2回焼失するも再建される | | |
| 1910(M43)～ 1912(T1)頃 | | 合資会社福宝堂により第一福宝館として建設される | |
| 1912(T1).9.10 | M パター商会・吉澤商会・横田商会・合資会社福宝堂が合併し日本活動写真株式会社(日活)が設立される | | |
| 1913(T2).7 | | | 西洋城郭風の初代葵館が開館する |
| 1923(T12).9.1 | 震災により佐藤三吉邸焼失。佐藤は本郷曙町の一川一秀邸に避難 | 震災によりこの2館を含む日活直営16館が焼失する | |
| 1923(T12).9～ 1924(T13)頃? | 佐藤三吉から日活に土地が売却される(?) | | |
| 1924(T13).4.1 | | 吉川の設計により再建される。 京橋日活館と改称する | |
| 1924(T13).5.16 | 吉川の設計により神田日活館が竣工・開館 | | |
| 1924(T13).10.17 | | | 吉川の設計による二代目葵館開館 |
| 1928(S3).2 | 日本興行株式会社に買収される | | |
| 1928(S3).5 | | | 直営廃止 |
| 1928(S3).12 | RC造への建替え工事起工(吉川の初代神田日活館取り壊される) | | |
| 1929(S4).6 | 二代目新築開館 | | |
| 1929(S4).8 | | | 日本興行株式会社に買収される |
| 1930(S5)頃 | | 日活新社屋建設のため取壊される | 市島亀三郎に売却される(?) |
| 1931(S6).1.30 | | 新社屋ビル竣工 | |
| 1931(S6).12 | | | 日活直営化 |
| 1932(S7).12 | | | 直営廃止(日本興行株式会社に売却?) |
| 1935(S10).11 | 日活が日本興行株式会社を買収。神田日活館・葵館が日活直営館となる | | |
| 1935(S10)頃 | | | 閉館 |
| 1936(S11).12 | 直営廃止 | | |
| 1952(S27).4 | | 日活本社が日比谷に移転する | |
| 1968(S43)頃 | 閉館。タキイ種苗に売却される | | |
| 現在 | タキイ種苗ビル | 東京国立近代美術館フィルムセンター | 細川ビル |

『日活四十年史』『日活の社史と現勢』『佐藤三吉先生伝』『日本映画事業総覧』などを基に筆者作成

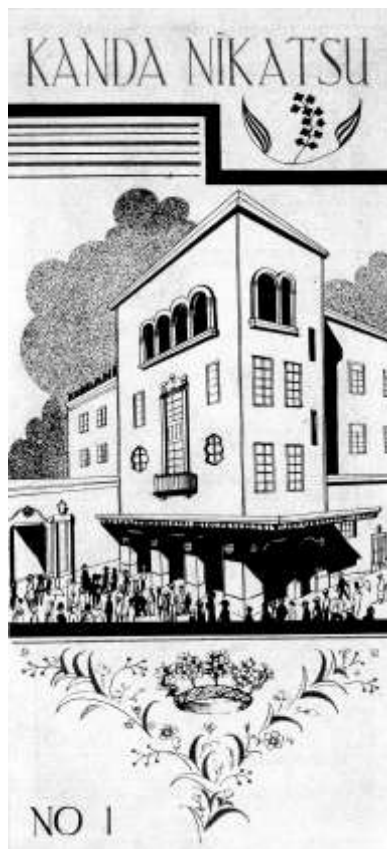
<資料2>二代目 神田日活館

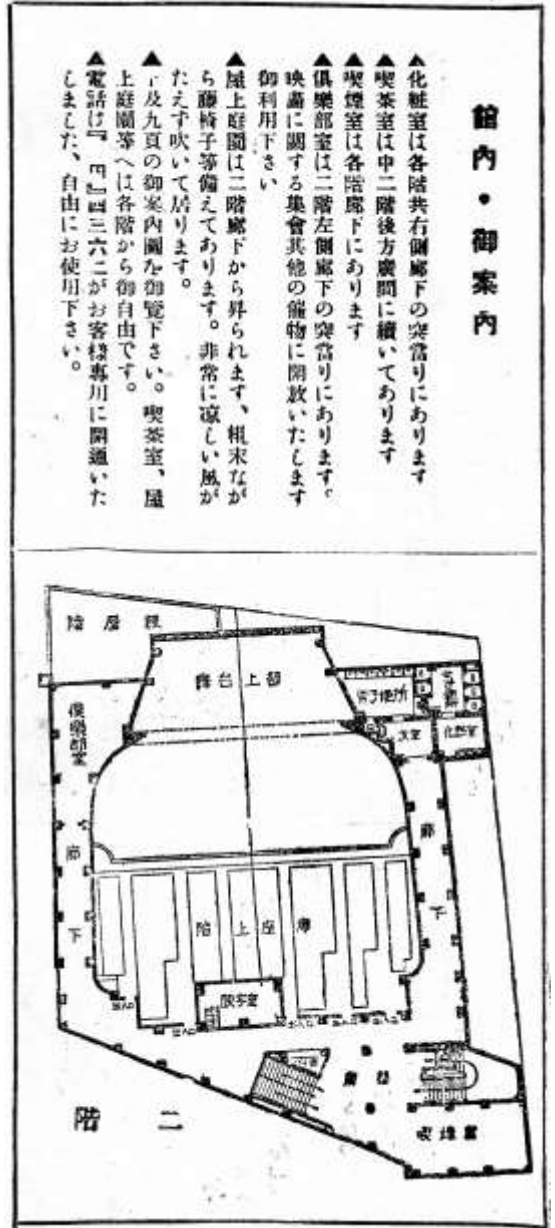
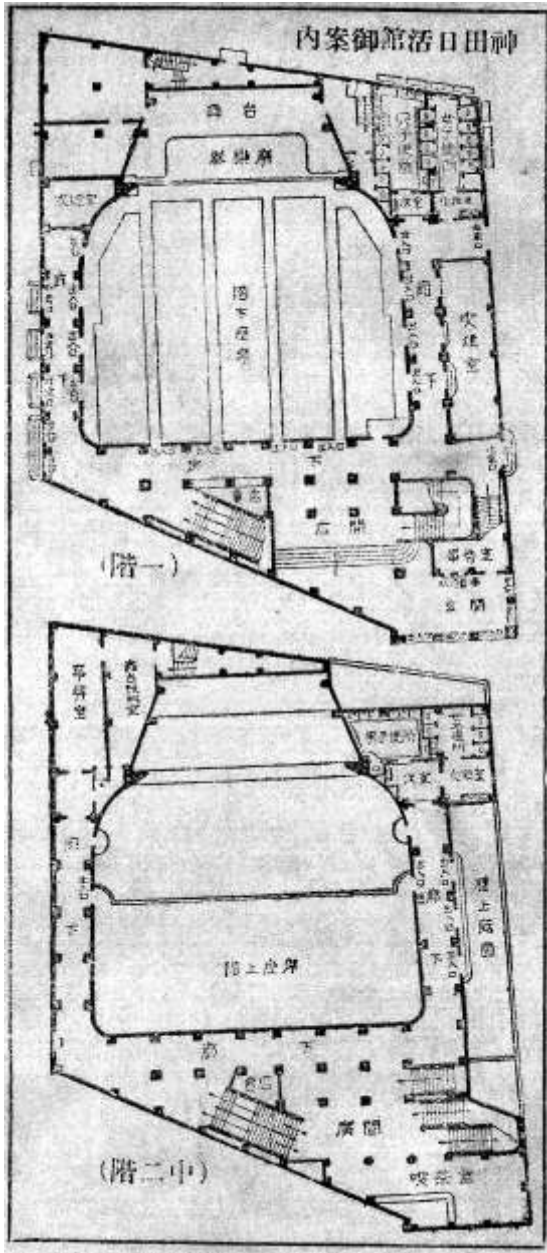
1929（昭和4）年に竣工した二代目 神田日活館は吉川的设计によるものではないが、調査中に資料を見つけたので参考までに掲載しておく。鉄筋コンクリート造、地上2階、地下1階で冷暖房設備を有し、客席数は987席であった。小さいながら屋上庭園もあった。



本頁左上：『日活の社史と現勢』日活の社史と現勢刊行会、1930、口絵
本頁左下：『日活五十年史』日活株式会社、1962、p.15

本頁右下：『KANDA NIKATSU No.1』昭和4年7月13日、表紙
次頁上：Ibid., 裏表紙



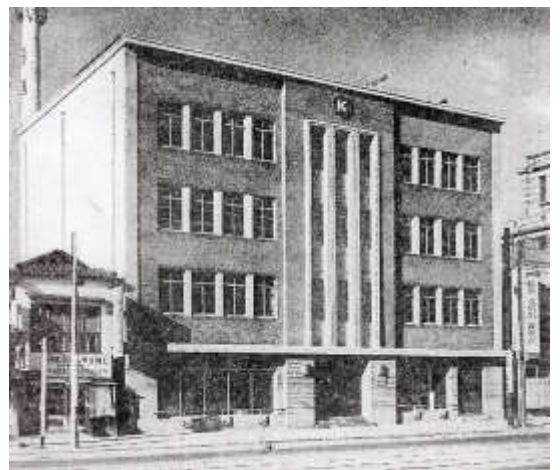


館内・御案内

- ▲化粧室は各階共有側廊下の突當りにあります
- ▲喫茶室は中二階後方廣間に續いてあります
- ▲喫煙室は各階廊下にあります
- ▲俱樂部室は二階左側廊下の突當りにあります。映画に關する集會其他の備物に開放いたします。御利用下さい。
- ▲屋上庭園は二階廊下から昇られます。粗末ながら藤椅子等備えてあります。非常に涼しい風がたえず吹いて居ります。
- ▲一及九頁の御案内圖を御覽下さい。喫茶室、屋上庭園等へは各階から御自由です。
- ▲電話は「四三六二」がお客様専用に通じました。自由にお使用下さい。

<資料3>京橋日活館のその後

「いまは懐かしい京橋三丁目の日活の前本社は、元第一福寶館(後の京橋日活館)跡の敷地百二十二坪に建てられ、昭和六年一月三十日落成したものだつた。鉄筋コンクリート六階(地階共)建の近代様式で、各階エレベーターを利用し、各重役室をはじめ、会議室、応接間、約百名を収容し得る大試写室、その他、食堂、社員俱樂部など、総建坪四百八十五坪の各室に暖房装置を施した堂々たるもの、昭和六年から二十七年四月日比谷の現本社に引越すまでの約二十年にわたり想い出の職場であった。」(『日活四十年史』日活株式会社、1952、p.118、図とも)





A HAPPY NEW YEAR



The Highest Moving Picture Palace
KANDA NIKKATSUKWAN
Tel. 6386 Ohte; Surugadai

NEW YEAR

No. 34

Special Number

＜資料4＞初代 神田日活館 新しい写真を見つけたので掲載する。壁面に「KANDA NIKKATSUKWAN/神田日活館」の文字が見える。（『神田日活館 日活通観』第34号 大正13年12月1日、表紙）

移民住宅論

Housing for immigrants by Pham Ngoc Thanh Phuc

私は1995年11月に24カ国の外国人がともに住む神奈川県大和市のいちよう団地に生まれた。不幸にも幸いにも同年の1月に阪神淡路大震災があった。つまりは、ポストモダンの終焉とともに亀裂の入ったインフラストラクチャーにインドシナ難民の子として産み落とされたのである。少なくとも、私はそう思っている。

私の父方の祖父は南ベトナム政府の高官で母親方の祖父は海軍の少佐であったから、サイゴン陥落後は3度牢屋に入れられ、土地も取り上げられ日本に逃れた。私はそこでその二人が連れていた私の父と母は難民キャンプで恋に落ち、安定した住居を手に入れたのちに産まれた。当時、地元の名門中学の入試を3位で受かった父は漢文にも精通していて、日本語の習得は苦ではなかったようだ。これもまたプライベートな話ではあるが、実は私の前に姉がいたのだが流産で死なしてしまい、見える形で私は長男として育てられた。そのような経緯があって、文字や図で敷き詰められたメモ帳のページを切り取ってまた新しく白紙になったところで育ったものだから、前のページの話を知覚するにはそれなりの努力が必要になってくる。

まず、私が暮らしてきた“家”についてこれから長々と述べるわけであるが、そこで、初めに共通認識を定める必要がある。家というのは何たるものであるか。ここで私が論じるのは可触対象の“家”ではなく、人が住まうことで様相を露呈させていく“家”である。戦後の日本と、それから工業団地の誕生、大戦のイデオロギーの

時限爆弾が引き起こした新たな異物の混入と錯乱、これからの移民の住居のあり方について順々に私の考えを述べる。

1945年第二次世界大戦終結。日本の皇帝は処刑されず、本質的に帝国主義を抱えながらアメリカのイデオロギーを取り込む。三島由紀夫の防衛論ではその戦後民主主義によって、日本の共同体意識、家父長制の伝統文化が破壊されたとしている。資本主義、利己主義が広がり、日本は高度経済成長期をむかえる。日本は、当然島国なのでアメリカ型の経済のスタイルをもらいながらも、土着的な展開体系で発展したので、ある種独特な資本主義国家になってしまった。なにか、物事を選択する上で、効率と合理だけではなく、情理不尽な精神論的な規則も加わり、独自の近代国家へと成長していった。しかしながらも、その精神論がバブル崩壊までの日本を支えたことは確かだ。

その、高度経済成長期を支えた工業の働き手の住まいとして、いちよう団地は1973年から機能した。1972年には中銀カプセルホテル、1960年代には剣持吟の規格材構成建築が発表されていた。いちよう団地がその時代の雰囲気の中で作られたことは自明であるので、少なくとも関係しそうな規格材構成理論の4大原則を追記しておく。⁴¹

同じユニットの鉛直水平方向の連続性、ユニットごとの空間独立、は彼らの信念に表層的に通づるものはあるが、剣持が懸念したつまらない生活空間に仕上がっている。規格材構成の過程で、時間的合理性のも

⁴¹ 1) 建築物、またはその一部 (Building Element) として、またはその一部の機能を備えていること。2) ある程度の大きさ (壁の場合には、床から天井までの高さで、巾90 cm程度以

上) で融通製に富んだモジュールと接合方法が適合すること。3) 性能と販売価格が明示されていること。4) 市場に常に存在すること。

と、単に空間を立ち上げるための作業になってしまったのが政府がプロデュースした工業団地だった。しかし、12階建の棟の、玄関方面のコンコースの外側の壁の造形に、工業団地の民主主義的なポリシーを感じる。どこまでも長く伸びていく面が上に連なるその姿に権利の平等を感じさせられる。それに加え、一部屋一部屋同じ間取りを左右対称にしながら重ねていて、生活音の分布を重ねる工夫もなされている。また、核家族のデザインはその最たるもので、アメリカのイデオロギーの輸入の結果、日本の土着的伝統みたいなものがごとごとく淘汰された。ここから、日本は白の時代へと歩むことになった。

神奈川県営住宅の前身にあたる日本住宅公団は、震災が原因で420万戸ともいわれる住宅不足を、設計の標準化（公団住宅51C型）や規格材構成理論に従って解決した。食寝分離、親と子の就寝空間の分離といった明確な設計コンセプトを打ち出し、標準化に成功した。60年代後半になってくると高度経済成長期による日本の工業化で、郊外に働き口を探した若者が大勢集まってきたので、神奈川県営住宅の建設の機運が高まった。住宅の標準化も、無国籍化した集団の為の住宅として、当時は功を奏した。少なからずも日本人同士のスタイルみたいなところが重なったのだろう。これが1972年当初のいちよう団地の在り方だった。しかし1979年になってその様相が急激に変化した。インドシナ戦争難民が大和市定住センターを介してやってきたのだ。いちよう団地を取り巻く様相はガラリと変わる。

ベトナム戦争はいわゆる冷戦の代理戦争で、アメリカの資本圏とロシアの共産圏のイデオロギーの対立だった。ご存知の通り、互いに原理主義で、対立は必至だった。そうして、アメリカが手に負えないと判断し、撤退した結果、サイゴンが陥落して、私の家族ら

は社会主義の社会体制と共産主義の経済姿勢に迫害され、西陣営へと亡命していった。私は難民二世なので、当然、この間に起きた出来事は体験していない。父から聞くに、戦時中は生活もままならず、1日の食事が黄ばんだ米に塩をかけて食べたり、煮たジャガイモ半分だけだったりしたそう。戦争が終わってからは、土地を取り上げられ、祖父は牢獄に入れられた。父親の兄は戦争中に北ベトナムの捕虜にされ、失踪してしまった。祖父は3度投獄されたことと、家族の生活がドイモイ政策によって行き詰まってしまったことを理由に日本に亡命した。他の方々も同様に、社会主義体制に追いやられて、海外に行き稼いだお金の一部を祖国の家族に送ったり、家族を外国に呼び寄せたりしている。

「日本がインドシナ難民を受け容れた歴史的背景について見ていきたい。そもそも、インドシナ難民の特徴とはどのようなものなのであろうか。長谷部美佳(2014)⁴²によれば『インドシナ難民とは、1975年のベトナム戦争終結以降、インドシナ半島のベトナム、カンボジア、ラオス三か国の共産政権樹立とその後の政治的混乱を逃れて、母国を脱出した人たち』のことである。長谷部が述べるように、ベトナム人の場合は『海岸沿いから小さな漁船などに乗って脱出を図った』者が多く、「ポート・ピープル」として知られていることが多い。一方カンボジア人とラオス人の場合は、長谷部によると『陸路多くが隣国のタイに向かって脱出した』こともあり、『ランド・ピープル』と呼ばれることもある。長谷部が述べるように、ベトナム人の場合は、『公海上で外国籍の船に助けられたあと、香港、フィリピンなどに設置された難民キャンプ』、カンボジア人とラオス人の場合は『タイの国境にできた難民キャンプに

⁴² 長谷部美佳「インドシナ難民家族の高校進学と支援者の役割 一つながる力を手がかりに」川村千鶴子編『多文化社会の教育

課題——学びの多様性と学習権の保障』明石書店, 2014

多くが収容』された。しかし、『難民キャンプが設置された国も、経済的に発展していない場合が多く、その負担が重かったため、国連難民高等弁務官事務所(以下、UNHCR)を通じて、先進各国に彼らの受け入れが要請された』経緯があると長谷部は述べている(長谷部美佳, 2014, pp.190-191)。

インドシナ難民が日本へ初めて来たのは1975年5月である。そのきっかけは、日本へ向かう外国船がボート・ピープルを救出したことにある。その後も、ボート・ピープルの流入は継続することになる。しかし小泉によると、当時『法律的にも行政上も、日本に難民受け入れ体制はなく』、『通過か一時的な受け入れだけであった』。定住という受け入れ体制は、未だ確立されていなかったのである。したがって、ボート・ピープルは小泉が述べるように

『1977年までは「水難上陸」という立場だった』。小泉が指摘するように、『彼らの一時庇護は、カリタス・ジャパン、天理教、立正佼成会、救世軍などの宗教施設か、アジア福祉教育財団、日本赤十字などの「民間団体に全面的に依存していた』』のである。そして小泉は『日本に到着したボート・ピープルはUNHCRの保護下に置かれ』、先述の『民間団体との間で業務委託契約を結んで、実際の仕事を委ねた』と述べる。また小泉は『施設収容の難民には、食事等の生活費、医療費、移動費、通訳代はUNHCRが支払った』と述べている(小泉康一, 2013, pp.389-390)⁴³。

このような一時的な受け入れに対しては、人々から疑問の声が挙がった。小泉が述べるように『インドシナ難民問題が深刻化するにつれ』、『「定住のための受け入れ」を認めるべきではないかという意見が強くなってきた』のである。そこで、『政府は、1977年9月、最初の閣議了解「ベトナム難民対策

について』を出し』、『1978年4月、政府は次の閣議了解「ベトナム難民の定住許可について」で、日本に一時滞在しているベトナムからのボート・ピープルの定住受け入れを決定』したと小泉は述べる。そうした流れがあり、小泉が述べるように1978年9月『初めて定住許可を与えた』のである(小泉康一, 2013, p.391)。

そして、翌年の1979年はインドシナ難民への積極的な動きが見られる。まず小泉が述べるように、『日本はUNHCRなどへの資金協力を大幅に増やし、インドシナ難民の定住受け入れを進めることになった』。そして小泉によると、1979年4月28日には、『閣議了解「インドシナ難民の定住対策について」で、500人の定住枠が設定され、ラオス、カンボジアを含むインドシナ三国の難民に対象が拡大、すでに日本に在留していたインドシナ出身の元留学生などの定住も認められ、「日本におけるインドシナ難民政策の基本的な方針と枠組みが作られ、定住促進事業が開始された』』のである。また、『当該の枠も後に「撤廃」され、「家族再会を目的とした『合法的出国計画』(ODP)でのベトナムからの家族呼び寄せを認めるなど、定住の許可条件を緩和し、定住促進策を進めていった』』と小泉は述べる。その後、小泉が記述しているように『1979年7月、政府は内閣官房に「インドシナ難民対策連絡調整会議」を設置し、内閣官房副長官を議長に、直属の事務局を設けた』。その流れで『政府から業務を委託された「アジア福祉教育財団難民事業本部」(以下、難民事業部)が同年11月に発足、同難民事業本部は、...(略)...1980年2月には神奈川県大和市に、「定住促進センター」を設置し、受け入れの整備がなされた』と小泉は述べる。そして小泉によれば、『日本に上陸したボート・ピープルへの支援活

⁴³ 小泉康一「日本におけるインドシナ難民定住制度—強いられた難民受け入れと、その後

の意味—』『国際強制移動とグローバル・ガバナンス』御茶の水書房, 2013

動を円滑に進めるために、上陸した難民の一時庇護のため、1982年、長崎県大村市に「難民一時レセプションセンター」を開設した。続けて、小泉が述べるように『1983年には、ボート・ピープルの流入増加と、彼らの滞在長期化で、東京都品川区に「国際救援センター」を開いた』。ちなみに小泉によれば、『日本に定住するには、ニカ所ある定住促進センターを経由する場合と、民間施設から直接に地域社会に定住する場合と二通りあった』（小泉康一、2013、pp.392-394）。

以上のように、日本がインドシナ難民を受け容れた背景には様々な要因が絡み合っており、紆余曲折を経て定住化への道が用意されたのである。初めは正式な受け入れ体制が整っておらず、支援者・被支援者双方が歯がゆい思いをしていたことであろう。しかし、人々の声に始まる制度改革により、積極的な受け入れ姿勢の兆しが現れたのである。そして最終的には、上述のような定住促進センターが設置され、インドシナ難民が円滑に定住できる仕組みづくりが完成したのである。そして、本論文で取り扱ういちょう団地は、神奈川県大和市の定住促進センターから流れてきたインドシナ難民も多数居住している。当該団地は、外国人が多く居住する地域の中でも比較的平和な共存が為されている地域でもある（金高弘明『多文化共生を促進する“繋がり”の位相と意義—いちょう団地 多文化まちづくり工房による活動を通じて—』2014、pp.30-31）

そういった経緯で、難民が日本中に散らばり、大部分がいちょう団地に収束した。ベトナム共和国崩壊から、ベトナム共和国本土のみならず周辺の共和国から、オーストラリア、日本、アメリカ、フランスなどに向けて漁村のボートなどで逃亡した。もちろん脱出する際の音を聞かれてはまずいので、エンジンを切ったまま出たと聞いている。2週間ほど太平洋を漂ったのちに、沖縄の沖で大型の船に発見されて、救出さ

れる。そのあとに、沖縄に通されて、本部難民キャンプに集められて、日本語の教育をされ、全国に散らばった。

私の父と祖父の話をする、彼らは本部キャンプを去ったのちに、どうやら九州の長崎で少し過ごし、広島福山、神奈川の藤沢へと移っていった。そこで、1979年に大和市定住促進センターがかなり低い価格設定でいちょう団地への移住を斡旋した。そうしたことで、難民や帰化中国人らがこぞって集まって住むようになった。そして、気がつくと、いちょう団地は、無国籍の集団のための住宅ではなく、アジア、南米、中東の人たちが住む多国籍集団の住宅へと化していた。もちろん、もともと住んでいた容器とは全く違ったものに入れられたのでストレスは当然かかってくる。難民にも2パターンあって、日本の合理的の元に計画された核家族の枠に外国人らは果敢に越境しようとした。その結果、家族を引き連れた家庭の1日の生活は興味深いものになっているし、そうでない家庭の生活は労働者階級の日本人の生活と変わらない。

合理的で現代的なスタイルと伝統的な生活を営むものとの間には確かな乖離と言うべきものがあつた。ここで面白いのは、この乖離によって、個室1部屋のみが家であるという概念を覆しているところだ。家族を呼び寄せて暮らす難民の大世帯では機能の分布の偏在があつた。

私の例を出して話そうと思う。私の家族は、私の父と母の世帯に第2人と祖母と3Kの部屋で暮らしていた。伯父さんの家族も3Kの部屋で、妻と息子1人娘2人。私の従兄弟（48才）3Kの部屋でも妻と息子2人娘1人。おばさんらが3人とその息子1人で広めの廊下を持つ一階の3Kの部屋で暮らしていた。おばさんの一人は、幼い頃に高熱を患い、視覚を失った盲人なので1階の大きい部屋がもらえたと聞く。こうした家族の場合、朝ごはんは個々の部屋で食べ、職場や学校に行く。お昼になると、祖母が私の部屋から出て、同じ団地内のおばさんの部屋に行き、昼食をとる。そうして

夕方でもなってくると、学校から帰ってきた子供たちが広いおばさんの部屋に集まり、盲人のおばさんによく世話をしてもらったものだ。ここではみなベトナム語で会話をし、前の公園で他の日本人と遊ぶ時は日本語で話した。幼馴染の友人の一人はいつしかベトナム語が聞き取れて少し話せるようになる人もいた。小学生の時の毎日の生活は、夜9時に寝て、朝6時半ごろ起きて、テレビを見ながら朝ごはんを食べる。ここまではベトナム語で話し、学校に行くために下の公園へ降り、登校班別に整列し、自分が先頭になって登校する。学校に着くなり友達と遊び、勉強をした。特に本が好きだったので、中間休みには本を借りに行き、それから外に出て遊んだ。放課後、まっすぐに向かうのはおばさんの家である。兄弟従兄弟、別々にではあるがおばさんの家に向かう。そこで遊んだりお菓子を食べて、暑い日なんかはテレビゲームや昼寝などをして親の帰りを待った。6時頃には日替わりの交代で母親やおばさんが帰ってきて、ベトナムの中部の郷土料理を作ってくれたものだった。広いその廊下とその軸線上にある部屋（障子は取り払われ、サロンのような大空間）に皿を床に並べてみんなであぐらをかきながら夕ご飯をとった。後から自分で知ることになるが、ベトナム中南部の田舎の原風景がそこにはあった。それに、私たちの家族は、もともと共和国の政府の関係者だったので親には教養があり、おばさんの家には本棚が多く、そこにはベトナム語の書籍や辞書がずらっと並んでいた。その反面、家には必要最低限のものしかなく、私の家には勉強机3つと、棚と仏壇だけだった。この仏壇がベトナムの伝統行事のコアになって、毎月何かの式があって、みんな親戚一同は私の家に集まったものだ。ここには明らかに機能の偏在がある。

一方で、私は単身で日本に来たスリランカやラオスの友人の部屋に行ったことがあるが、何か狭さを感じたのはこういうことがなかったからであろう。事実、県営住宅で機能の偏在がなければ狭々しくなるのは仕

方のないことだ。ラオスの友人の家庭構成は母と兄の3人、母が帰ってくるまで家に誰もいないので外にコンピア、ベトナム、中国、タイの同じ境遇の友達らと8時頃まで遊ぶ、家に帰ってご飯を食べるが、手作りのご飯の場合もあれば簡単なお茶漬けやカップラーメン、スーパーの弁当を食べ、テレビを見て寝るそう。1日で親と話すのはおよそ1時間ほど、日本語混じりでしか話せない子がいる。その結果、母国語が話せない、学校の勉強もできない、自分は日本人だという割には日本人ほど正しく日本語が操れない、非行に走るなどという現状がある。部屋も狭く、生活の水準は低い。そうして、団地の影の隙間を徘徊して、薬物や恐喝、強盗、ついには暴力団構成員になるものも少なくない。それが移民社会の闇の主構造になっている。

1970年代初頭、工業団地の生活スタイルは日本の中でも最先端なものだった。というのは、都会近郊にアルミのシンク、核家族という“団地族”が時代の象徴だったからだ。規格化標準化され、都市の密集に対応した集合住宅は確かに地方から東京近辺への人口集中による住宅不足を解決した。国民をインフラストラクションの側面から助ける画期的で現実的な解決方法である反面、個と個の干渉が一切ないことを前提とした設計だったと考える。また繰り返しになるが、変化が起きたのは1978年、大量のインドシナ戦争難民の流入。当時、空き部屋がなくなる状態で、全体3383戸数の2割は外国人が占めたというから600世帯ほどの外国人が一挙に住み始めたということになる。これを皮切りに、20年かけて徐々に外国人が出稼ぎや呼び寄せを主にして増加していくとともに、彼らの若年層のみならず、薬物の売買や非行、犯罪が横行するようになり、スラム街とも言われ、近くの住民が避けて通る地域になってしまった。現在では、その層の多くのが生活が安定してきて、団地周辺のアパートに流れていっている。こうなってくると、団地全体ではなく、地域全体を家と考えると老朽化した団地を改築するべきだ。

「このような神奈川県にあるのが、調査対象地であるいちょう団地である。いちょう団地で活動する組織や団体はいくつかあるが、長谷部によると『「居場所」や「つながり」といった「関係性」を念頭に置きながら活動している団体は、数が多いとは言えない』(p.200)。そして、長谷部は『その数少ない団体の一つ』として『多文化まちづくり工房』を挙げており、当該団体が行う活動が『困難を解消する場であると同時に、自分の話を聞いてもらえるコミュニケーションの場』になっていることを述べている(pp.200-201)。長谷部は当該団体での活動やヒアリングを通じて、団地内の子どもたちには『大人とコミュニケーションをとる機会』がなく、『聞いてもらうことへの欲求』が高いと実感している(p.207)。日本人が一方的に支援を施すことだけではなく、時には話を聞く『受け手』になる必要がある。そうした双方向性の充実が繋がりを生み、共生への糸口をもたらしてくれるのである。」(金高弘明『多文化共生を促進する“繋がり”の位相と意義—いちょう団地 多文化まちづくり工房による活動を通じて—』2014, p.44)

とあるように、私の経験と外部からの客観的分析に相違はない。核家族の子供たちの親との会話時間が短すぎるがゆえにこういうことが起こってくる。しかし、私がここで建築的視点から問題に思うのが、「いちょう団地の国際的問題に対してのアプローチ」が全てソフトに偏重していることだ。あまりにもソフトのみの活動で根本的に、いちょう団地の良さを生かしきれていない。当然、県営団地ともあって、勝手に増改築、ひいてはスクラップアンドビルドもできないし、資金もないのが現状だ。

しかし、2015年7月25日現在の新国立競技場の問題を見ると、日本人は建築に対して建設費とその結果のベネフィットにのみ関心が向いているように思った。ならば、国際性豊かでポテンシャルの高いいちょう団

地に資金をかけて活性化させることで、日本の国内外に多大なるベネフィットをもたらすことは可能だと私は断言する。その訳は、いちょう団地には「アジアのみならず南米や中東の発展途上国を母国語にした人」が多く住んでいて、その多くは「母国にコネクション」があり、「働いたお金を母国の家族に融資する熱意」があって、最近ではハーフタレントの台頭からか、特に女性において外国人であることへの意識が以前とは異なり「英語を得意にするもの」が非常に多くなってきているからだ。

ここで、私からの提案がある。アジア各地での事業を拡大するための人材育成を含めた教育システムを内包した新しい集合住宅のプロトタイプをいちょう団地に作りたい。具体的には、神奈川県が県営住宅をHondaや味の素など、途上国に展開している企業に売却し、複数の法人経営にする。そうして、いちょう団地を管理する株式会社を設立し、そこへの株式投資の資金を頼りに少しずついちょう団地の改築を始める。もちろん、神奈川県が売却で手に入れた資金は、移民手当に回し、新しい住宅の低価格を一定期間実施する。その基本コンセプトは「学習言語の習得を促すコモンスペースを内包」、「高座渋谷、瀬谷周辺を家とみなした団地全体の配置計画」と「隣接する渋谷中学との塀を取り払い、そこを新たないちょう小の役割をもたせたメインピースにすること」である。

非行に走る青少年らの大きな原因が「学力不足」である。それもそのはず、移民らの家に日本文化的資産は全くと言っていいほどない。彼ら移民の子供らは、日本にきて2年ほどで、生活に支障のない程度に日本語が話せるが、学業成績は振るわない。その根本的な原因が日本文化的資産の欠落であるしその結果、母国語のみならず、日本語での論理構築に支障をきたしている。その結果、非行に走り、自ら日本人を名乗るが、日本人との生活水準や雇用状態の乖離に内心がにつき、その仲間うちでコロニーを作っていく。これがいちょう団地の悪の温床の大きな根源である。その解

決案として、いちよう団地の内部に部屋と部屋をまたいだ機能の偏在を作ること。設計においての構造物の標準化は図る一方で、その配置は戦後民主主義のイデオロギーを脱することで機能や人種の偏在を図る。日本語学校と英語学校、中国語学校を敷地内に配置し、この学校への入学を含めた入居者をアジア南米各地で募る。もちろん、学校の名前やいちよう団地の名前の命名権は企業にあって、企業のPRに使ってもらって構わない。いちよう団地の注目度は非常に高いので、グローバル化の援助をしているとなれば、イメージアップにつながる企業は多いだろう。母国に帰って、この経営会社の支局幹部になることを夢見て海を渡る若者を歓迎しながら、既存の移民家族らとの住居を交わらせる。こうすることによって、出稼ぎの若者のコロニーを少し分解する。

実は東京の中野区の沼袋や豊島区、群馬の高崎には多くの日本語学校生がいて、その中で、ベトナム人留学生のファストファッション店の集団窃盗が絶えない。私も、父の仕事の手伝いで、この手の事件に関して裁判所との中間に立って文章の通訳をしたことがあったが、彼らの多くは大部屋の事務所跡のような場所に10人から20人ほどで集団で生活していて、それがコロニーを形成して、犯罪に至る場合が多い。こうした理由から、若者同士に一定の距離を作ること、世話を見てもらうこと、また新しい人との関わりから得られる何かを期待して、既存の移民家族と留学生の受け入れ体制を備えた住宅を提案する。

この計画は明らかに、移民受け入れからその先を見た提案になるが、少し時期が遅すぎたとも感じている。いちよう団地は、団地という形式で、コロニーを分断している面があるが、一方で、海外の移民都市は違って、コロニーを形成し大勢同じ地域で暮らす。その結果、上記のベトナム人留学生みたいな問題がより大きなスケールで同時多発している。いちよう団地より深刻な問題を抱えた地域は、アメリカ、フランス、

オーストラリアに点在しているが、どこもこれといった解決案を提示できていない。

それに加えて、中東からの難民の先進国各国への流入は深刻で、日本の現状を知らず、平和で素晴らしい国というイメージというだけで難民として飛行機で渡ってきて、成田空港で立ち往生するケースは年間で100を超えると難民支援協会から話を伺ったことがある。当然のように、日本で難民認定をもらうためには、膨大な資料と時間、自分が難民であることを立証する証拠を提示する必要があるが、当然のように、母国から内密に逃亡してきたので、母国に証拠の資料の要求もできないまま、難民ホームレスとして東京都心を徘徊して、お金もないので数十駅も歩いて難民支援協会の待受ブースで寝泊まりしたりするものも少なくないと伺った。このような状況が日本にはあって、グローバルイゼーションを謳い、世界の先進国と自負する日本には、この問題に対して正面から対応する責任がある。

私は冒頭にも述べたように“家”とは有形的なそれを目指すのではなく、その中に住まう者によって形成される概念だとして論じてきた。戦後の戦災によって420万戸の住宅不足に対して、政府は持家政策を掲げ、住宅金融公庫を作った。それから20年ほど経った日本は高度経済成長の中において、働き口をもとめた都心への若者の流入に伴い、住宅不足が再発する。日本住宅公団の後を継いだ神奈川県営住宅はそこで、工業地域周辺（横浜、瀬谷、大和、海老名、厚木）に工業団地を建設する。そうして、その一つであるいちよう団地竣工以来1980年の定住促進センター設立までの間は、有形的な家と家の輪郭が合わさっていた。しかし、先に述べたように、この団地の主軸の戦後民主主義の本質の原理主義をベースにした社会主義と自由主義の二項対立の時限爆弾によって、いちよう団地の家の輪郭が何重にもなる。そして、これからは、そのいくつにもぶれた輪郭に合わせた有形的な建築が必要になってきている。その建築を設計するのは、やはり、その場の出身者であって、住民が一丸となって住居の更新をする

ときは速くはないと思う。これは決して、標準化したものを一列に並べてはダメだし、集合住宅であるから住む人に合わせすぎてもいけない。時代や状況に合わせた標準・個人の間をとるような家の創造が必要だ。

これまで私は、再三にわたって住まう人によって変化していく様相こそが家であると主張してきた。つまり、そこに住まう人を取り巻く生活が家であり、私が20年間住んできた家の歴史を語ることは“私”の生活を時間軸に乗せて語る事に他ならない。しかし、他の人はそうではない人が多いかもしれない。私の場合、無国籍の建築が多国籍の様相をレイヤーの奥で見せ始めたときに産み落とされたものだから、どうしてもそれが起因した私や難民の出自が重要になってくる。だから、“私”が住んだ有形的な家、に加えて、私の20年間の生活みたいなものも述べざるにはおれなかった。

そうして、私の未来の家、すなわち未来の生活について述べる。繰り返しになるが、私はポストモダンの終焉とともに亀裂の入ったインフラストラクチャーにインドシナ難民の子として生まれた。無国籍なグローバリゼーションの始まりにいる無国籍なひと。私の中で、私は日本人である、いやベトナム人である、というような考えはない。幼い頃から自分を、周りにいる、この憎らしい日本人ではない、という風に規定した。規則、体裁、暗黙の了解、足並みをそろえる、などなどと、自分の家で育った頃には考えもつかないものに出くわしたのは小学生である。親が自由翻弄で、私が小学一年生の冬に、お金がたまったからといい、1月1日から2月の末まで、ベトナムの正月を過ごし多々ことがあったが、日本に帰ってくると担任は大パニック。こちらでも何にそんなに騒いでいるのか理解し難かった。家族に会いに行き、正月を過ごすことは悪いことなのか。そうして、日本にはくだらない協調性がある。小学校で階段掃除をしていた時である。渡り廊下を挟んだ階段があって、それを二つに分けて掃除していた。そこで私は真面目にせつせと自分らの階段を終わらせて、用具を片付けていると、もう

片方を掃除をしていた奴らにいちやもんをつけられた。終始グラグラと笑ってろくに掃除をしていなかったのにも関わらず、終わったのならばつたえよ、それが助け合いだろ、と言われた時にはさすがに腹が立って、持っていた雑巾を絞るバケツを上から被せてやったものだ。こんなにも規則規則と騒ぐから日本人が心底嫌いになってしまった。私も何か間違えば非行に走っていたし、犯罪をしていたのかもしれない。今もかもしれないが、こういう経緯があって、自分を規定するのに余事象を良く用いた。無の有形である。

これからは大学院まで大学にいて、その後には有名組織設計事務所に入って、30歳まで仕事をして、退職後にベトナムに帰って、サイゴンを拠点にして住宅設計をする。この期間では自分の造形理論、空間理論の実施実験のようなものをしたい。南ベトナムにはかつての大阪みたいな気質があり、言葉が話せる私は歓迎されるだろうと思う。そこを拠点としながら40歳半ばになったら、ドイツやフランスに渡り、移民都市の移民のための無国籍集合住宅のプロトタイプを打ち立てる。遅すぎたかもしれない。しかし、これは私にしかできない。

これが私の家だ。

(2015.7.30)

参照：

金高弘明『多文化共生を促進する“繋がり”の位相と意義—いちょう団地 多文化まちづくり工房による活動を通じて—』2014年度社会構築論系地域・都市論ゼミ2 ゼミ論文

www.waseda.jp/sem-muranolt01/SR/S2014/S2014-kindaka.pdf

清水睦美『いちょう団地発！外国人の子どもたちの挑戦』岩波書店、2009



空間権力装置としての建築

尾上篤

An architecture as space apparatus by Atsushi Onoe



Introduction

パブリック（公的）とプライベート（私的）という言葉が建築言語として汎用されるようになった。しかしそれは単に内と外のような“もの”によって分けられるような概念なのだろうか。公と私の関係は目に見えない次元で語られる。公と私の関係は権力に強く依存している、というよりも空間やシステムの権力闘争そのものである。ゆえに、公と私の関係を扱うことは極めて政治的な活動なのである。

現在日本という官僚国家は中高生に対して政治活動の届け出を求めるような国家である（一部都道府県において）。それが意味しているのは、言うまでもなく政治的な自由を奪われたということである。しかし、その自由は保障されたきり保持が永遠に認められているわけではない。常に権力がどこに位置するのかを把握し国家権力との均衡を保つ努力が政治的な自由には要求されている。こうした抽象的な概念は目に見えないがそれをよく表しているのが都市、あるいは都市を構成する建築たちなのである。

モダニズムという建築運動を展開してきた3大巨匠らの功罪を明かしつつ、山本理顕氏の著作の解釈を中心に建築を取り巻くイデオロギーについて考えたいと思う。

Ideology

-歴史を排すること、人をヒトにすること

我々が“近代建築”と言うとき、それは19世紀までの様式主義を否定したデザインにおいて議論する。近代建築の三大巨匠と呼ばれるル・コルビジエ、ミース・ファンデルローエ、F・L・ライトは様式と言うものを排することを突き詰めた結果数々の作品を生み出してきた。しかし、これらは近代というよりもむしろ現代建築の先駆けであって、それはまさに今もその巨匠らの提唱してきたことが元になっている。

その彼らがしてきたことは、人間をヒトにしたということである。近代建築は様式を合理性の名の下に排し、合理的なデザインを目指してきた。パウハウスなどに見られるように建築に限らずデザイン全般においても教育がなされてきた。

彼らが様式を排し始めたことの何が驚くべきことなのか。それは建築様式に対するヨーロッパの人々の歴史観から見ることができる。ヨーロッパに限らず建築史をみていくと様式に着目せざるを得ない。ヨーロッパの建築様式の変遷をみていくと、古代ギリシアから始まり様式の盛衰が如実に表れている。いわゆる「流行り」のように様式が順々に変わっていく。日本の建築の様式は使われるようになってからその後、おおよそ西洋建築の様式を取り入れ始めるまでは並行して使われていく。こうして時間軸と合わせて様式をみていくとヨーロッパの様式をみていくことで過去を通時的にみていくことができる。

1550年にジョルジョ・ヴァザーリ(G. Vasari 1511~1574)が『美術家列伝』という文書を書く。彼

の師であるミケランジェロについて文章をもって考察した上で、ミケランジェロやヴァザーリが生きた時代すなわち近代が、古代の建築様式を参考にしているという点で評価すべき時代であると説いた。無論過去について考察してきた人はいたであろうが、文書として過去を考える、つまり過去を歴史に変える仕事を行った初めての試みであり、この時点から歴史という意識を人々が持ちだしたと言われる。のちに新古典主義などに見られるように人々は強く歴史を意識し、現代では彼らヨーロッパの建築史家らは様式そのもの(モノとして)よりも様式を通して各々の様式が見られる時代を考察している。

ヨーロッパの人々にとって歴史を意識することは一種の自我同一性であった。それを転覆させたのが近代建築の三大巨匠である。ル・コルビジエが設計したサヴォア邸という住宅があるがここで彼は、“Les 5 points d'une architecture nouvelle”「新しい建築の5つの要点」としてマニフェストを掲げた。ピロティ、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓、自由な立面。建設技術が発達していく中で、それまでには考えられなかったような自由な造形が生み出された。その自由は様式からの自由であり、キリスト教などの上からの自由であったとも考えられるだろう。

そうした精神的にも造形的にも自由になった建築は近代性の象徴とも言えるのではないだろうか。古代ギリシャの神殿が人の生活に関わる機能を持たなかったのはその建築は神の住処であったためであり、それを強い造形によって示していたような主張は近代建築からは失われていってしまう。

その主張の消滅の最終形態がインターナショナルスタイルの建築、つまり現代の建築なのだ。主張が消滅するというのはどういうことか。それは、政治的な中立を保つという名の思考停止装置の作動を意味している。すなわちその空間は人が互いの摩擦をさけ、できるだけスムーズな関係を築かせるような均質な空間なのである。

ハンナ・アレント (Hannah Arendt 1906~1975) は『人間の条件』のなかで人間の基本的な活動力として「仕事・労働・活動」の3つを挙げた。とりわけ「活動」について、「物、あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力であり、多数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、多数の人間 men であるという事実に対応している。(中略)しかし、この多数性こそ、全政治生活の条件であり、その必要条件であるばかりか、最大の条件である」と言う。均質な空間が人同士の摩擦をキャンセルした結果、人は最大の条件を失い、ヒトと化した、あるいはヒトになりかけていると言えるだろう。

Standardization and Consumption

現代建築が行き着いた先は“標準”である。2011年、東京都都市整備局東部住宅建設事務所の都営南蒲田二丁目団地基本設計料が1円で落札された。現在都営住宅の設計は一番安い設計料を提示した設計者によって設計される。ただただ標準的な設計モデルのプロトタイプによって設計され、それをいかに効率良く安く抑えられるかを求められている。そしてこれは都内に限らず日本の公共

建築の7割で設計入札が行われている。設計に創意は不要であるということだ。1951年に東京大学吉武研究室などによる「51C型」と呼ばれる現代の公営住宅の原型となるプランは戦後の人々の暮らしをいかに豊かにできるかを考え抜いた結果であり、当時としては画期的であった。無論これによって人々の生活水準を上げていこうという建築技術者としての使命感がそこにはあったしそれは正しいと思う。しかしこうした動きに内在するのは社会のオーダーに専門家としての設計者がひたすら盲目に従い続けたという事実がある。彼ら設計者は問わなかった、あるいは問う余地を奪われていた。

近代主義は危険な主義である。その合理性の追求は究極的に自同律的な生産を必然的に引き出した。その原初は、建設系の畑について言えば、産業革命であろう。その産業革命は労働(labor)という概念を提示した。ここで労働(labor)と仕事(work)という現代では同じものとして扱われる二つの概念をはっきりと分けておかなければならない。アレントは自身の著書のなかで労働(labor)は「労働によって生命過程のなかで生みだされ消費される生活の必要物に拘束され」ることであるとしている。他方、仕事(work)は「すべての環境と際立って異なるものの“人工的”世界を作り出す」こととしている(そしてこの“世界”そのものはそれら個々の生命をこえて永続するようにできている)。このようにはっきりと労働と仕事の本質的な違いを認めた上で、労働が“消費される生活の必要物に拘束される”というアレントの主張は決して不自然には思えないだろう。なぜなら筆者を含め現代に生

きる多くの人々がそれを経験しているからである。この観点から言えば、“労働”によって作られたものは常に消費される運命をたどらざるを得ないのである。そして何がこうした近代主義の側面の一番危険なところかと言うとそこに疑問が持てないことにある。アレントの著書のなかでアドルフ・アイヒマン(※1)について取り上げているが、まさにアイヒマンに代表されるような“思考欠如(thoughtlessness)”は決して過去の話ではなくまさに現代の話である。そして政治に限った話ではなく、建築界あるいは建設関係の業界においても同じである。

こうして産業革命以降、建築は不幸にも建設技術の向上と引き換えに消費の渦に取り込まれてしまった。その渦は建築行為を労働として作用することによってできたものであり、労働は労働によってできる消費財の消費を確実に要求する。であるからして、建築が消費されていくのは必然的だったわけである。そのように思考の駒を進めたときに、空間と権力の関係性を見出せるのではないだろうか。

Space Apparatus

しばしば権力という言葉に政治的な、政府的なイメージを浮かべる人が多いが、広義の意味で捉えれば決して実生活からかけ離れた存在ではない。多彩な表現方法を持つ言語のひとつを使う日本語の言葉の綾に我々は踊らされているだけで、その本質を見抜いた時“権力”という言葉は決して特別なものにはなら無いだろう。むしろ広義の意味として捉えることなく“権力”を認識するだろう。

産業革命以降、人間は労働に比重を傾けてきたがそれが意味するのは管理するものの増加である。あるいは権力というものがより普遍的に存在するようになったということである。それに伴って労働者も普遍的な存在となってきた。その労働者のための住宅が出来始め、抽象的な意味での管理体制は建物の名を借りて物化し始めた。アレントは彼女の著書の中で「闕(no man's land)」の喪失にそれが象徴的に示されていると言う。闕とは家の中にある私的空間と公的空間が混在する外的な働きを緩衝する空間であることである。つまり家というものをひとつのものとして見た時にその家の全体空間に対してヒエラルキーが存在していた。その闕にあたる多くが仕事場、つまりお店であった。そしてそれらは、同じような店を営む家によるギルドのようなものが形成されていて、それはひとつの地域権力になりえていた。しかしこの場合の権力は管理体制を意味しているのではなく、むしろ共同体的な意味作用があり住人らの意思を示していた。意思を物化した結果が家だったのである。

権力は不可視でいて脅威である。それはまるで放射線のような忍び寄り方といっても過言ではない。しかし権力は、見えるものになるという意味で、物化し得る。それが建築である。特にそれが顕著に見られる例として、ナチスの党大会場をはじめとしたファシズム政権によって建設されてきた建物たちが挙げられる。それらのスケールは破格でありそのスケールによって人々を圧倒してきた。こうした公的な建物に関してはその象徴性などについて批評が飛び交うが、住宅に関しては長らく

議論されてこなかったのではないだろうか。自ら持っていた仕事が労働に切り替わり家から闘を失い、人は完全に孤立してしまったという事実は産業革命のまばゆさが故に忘れ去られてきたのかもしれない。そのまばゆさは、必然的に、行き過ぎた資本主義とある意味で等価となって家は消費活動のための場となってしまう。住宅は目に見えながらもこっそりと物化したのである。

空間権力装置とは結局のところ人々の意思を要するのである。それはどの立場でも関係ない、国

家でも市民でも関係がない。意思を要する物化作用であるからが故に建築はイデオロギーを内包する。意思を失った瞬間空間は望まない統制下に置かれる。その意味で建築の絶対条件は先攻する意思なのだろう。

参考文献

- ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994
山本理顕『権力の空間/空間の権力 国家と個人の〈あいだ〉を設計せよ』講談社選書メチエ、2015
西田雅嗣『ヨーロッパ建築史』昭和堂、1998

アフリカ近代都市民と軽業師

赤野一人

Residents of modern African cities and their “soft resistance”

by Kazuto Akano

前号に Pham Ngoc Thanh Phuc 君が「モダニズムの虚・実存主義」という文章を寄せてくれたが、あれは、実は某講義の期末レポート課題の為に書かれたものであった。その講義には、ちょうど私も出席していて、同じ課題でレポートを書いていたので、彼が寄稿してくれたことへの御礼というか、応答のつもりで、小文も本誌上に発表しておく。

本稿内で紹介する松田素二氏の『都市を飼い慣らす』

は、暴力的なまでに巨大・複雑化し、制御不可能とさえ思ってしまうような近代都市であっても、その内部から解体してゆく方法が存在すると説く目から鱗の本である。今まで建築限界ではあまり取り上げられることなかった文献なので、ご興味のある方はぜひご一読されたい。(編)

はじめに

本レポートは、直接的にはアフリカ大陸における都市民のあり方についてを考察の対象としている。しかしながら、筆者自身は、南アフリカを一度訪れたことがあるのみで、考究に値する一次資料を持っているわけではない。そのような困難はあるけれども、ここではアフリカ都市

に関するいくつかの文献と自身の実感を引き合わせ、「軽業師(的)」というワードを提示してみたい。

アフリカ的なもの

この作業の前に、一口に「アフリカ」と言っても、その広大な大陸における文化は多様に過ぎ、共通項を取り出すことは非常に困難であることを断っておかなければならない。

アフリカは多様である。サハラ以南の、いわゆるブラックアフリカだけに限っても、気候や風土、人、文化には多様性がある。アフリカ都市も同様に、長い時間をかけて人的・物的交流によって成長してきた都市や、植民地化によって短期間に建設された都市など、さまざまである。そのためアフリカ都市とひとくくりにすることは難しいが、その生活には共通性も見える。⁴⁴

例えば、『アフリカ都市の民族誌』と題した書物のはしがきで野元美佐氏はこのように述べている。

また、アフリカにおいては、「都市(city)」はヨーロッパ諸国の植民により持ち込まれる以前から、伝統集落から発展した形として存在していた⁴⁵。その様な伝統的都市の一つとして、日野舜也氏がウジジという小村のことを取り上げている。

ここで取り上げるウジジは、タンザニア西部、タンガニカ湖東岸に位置する、人口二万人足らずの、小さな集落である。周辺の公共建築物を除いて、二階建ての家はない。バラザとよばれる表口を道路に面して、ウアと呼ばれる草堀に囲まれた裏庭を持つ民家が道の

⁴⁴ 野元美佐『アフリカ都市の民族誌』明石書店, 2005, p.3

⁴⁵ 一般には、このような工業化以前の大規模な都市は、北・西

アフリカにおいてのみ見られ、南アフリカにおいてはダイヤモンドや金の採掘を目的としたヨーロッパ人の植民者を待たねばならないとされている(Ree:174-175)。

両側に並ぶ。裏庭や道ばたには、マンゴー、オレンジ、ココナツヤシ、アブラヤシなどの樹木が、草葺きの屋根より高くしげり、遠くの高地から眺望すれば、街並みと言うよりは、緑なす疎林のように見える。……これがいったい都市なのか、と多くの人々は見るとであろう。近代的な街並み、高層建築物の建ち並ぶ都市からすれば、これは都市とは言えないだろう。アフリカの伝統的都市の多くは、のちに近代化の波をこうむった諸都市をのぞけば、規模の大小こそあれ、おおむねウジジと似た景観を持っている。……いずれにしても、景観的に見ればこれは大きな村とは言えても、都市とは言えないという人が大半であろう。しかし、わたしは、これは都市であると言い切ることができると考えている。もっと言えば都市形成の、あるいは都市社会成立の、もっとも基本的なことが、ウジジの歴史、社会、文化の中に読み取ることができる⁴⁶。

しかし、このような、伝統的都市のあり方については本稿では触れない。それは人類発祥の地としての、その肥沃な文化的素地を差し置いて、アフリカ人の心性に想像を巡らせるのは、経験の乏しい筆者にはなかなか難しいからである。ここでは、アフリカ都市の中でも、植民によってもたらされた、近代的な都市について見ることにしたい。そこには、外来の文化によって翻弄されたという点で、なんとなくヒノモトに住む筆者にも相通じるものがあるからである。それも、本稿では南アフリカ共和国に話を限る。なぜならそこは、支配—被支配という関

係が、アパートヘイトという形で極めて露骨に、ごく最近—1990年代まで続いた地だからである⁴⁷。

家が燃えて、ぼくはせいせいした。

さて、南アフリカにおける、それもアパートヘイト下における都市に暮らした人々の記録として、ここではナディン・ゴードイマの「My son's story」(邦訳：赤石隆、スリーエーネットワーク、2007)を挙げる。これは小説ではあるけれども、植民地時代に起因する人種間の軋轢の中で、それに抗おうとする人々を活写している。

物語はヨハネスブルク郊外に住むカラード(入植者である白人と現地人の混血)のある4人家族(父、母、娘、息子)をめぐるものである。父：サニーはカラード居住区の真面目な田舎教師であったが、生徒たちのデモ行進に付いていったことがあらぬ風評を呼び解雇される。いくつかの職を転々としながらも、生来の真面目さゆえに理不尽なことへ目をつむれない彼は、反アパートヘイト運動へと足を踏み入れる。娘：ベイビーはやや遊び癖のある子であったが、父の影響もあって南ア解放運動に身を投じ、運動の本拠地があったザンビアへと移ってしまふ。母：アイラは良識ある女性であり、この間も良妻であり続けたが、父：サニーが家に残していた荷物の中に武器弾薬があったことから拘束され、投獄されてしまふ。そうして、家には息子：ウィルだけが残される。総じて悲壮な物語である。

これは歴史的には「八〇年代の政治の季節のなかで、『カラード』は『黒人』としてのアイデンティティを獲得し、解放運動のなかに積極的に取り込まれていった⁴⁸」結果なのであるが、筆者には、それが彼らの自発的な意志の

⁴⁶ 日野舜也「都市人のこころ」『〈都市的なるもの〉の現在』東京大学出版会、2004、pp.349-351

⁴⁷ このようなテーマを扱うのであれば、本来なら植民地支配の歴史やその実態についても、多頁を割いて論じるべきであろうが、残念ながらこの点はまったく不勉強で、扱うことが出来な

かった。「植民地」については、唯一、西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008を読んだことがあるのみで、私の理解は全く表層的で漠然としている。お詫びする。でも、この本は名著だと思う。

⁴⁸ 福島富士男「終わりのはじめとしての『マイ・サンズ・スト

ようでありながら、しかし大局的な流れの中でもたらされたものであるところに、そのやりきれなさがあるように感じる。

例えば、母：アイラが父の罪を被ってまさに拘束されようとしているときの息子：ウィルの叫び。

あんちくしょうめ、こんどはなにをやりやがったんだ。あいつがなにをやらかしたって、母さんが刑務所に行く必要なんかない。ぶっ殺してやる、約束するよ、母さん、こんどあいつがキッチンのドアからはいつきたら、かならずあいつを殺してやる。⁴⁹

ここにあるのは、理不尽な警察組織（警察は実際には発見されなかった武器の所持を容疑として母を拘束した）や社会に対する怒りではなく、反アパルトヘイト闘争においてヘマを犯した父親への怒りである。

同様の倒錯は、母が逮捕された後、ウィルだけになった家が、白人の暴徒に取り囲まれたときも現れる。

父さんとぼくの眠る家にはあまり客はこなかった。…
…でも、その日は違っていた。フェンスとペランダのあいだの狭い空間が人でいっぱいになっていた。通りも人でいっぱいだった。……みんな白人だった。……ブラカードがかたむきゆすぶられる。ここは白人の街だ、居住地に帰れ、共産主義者+黒人=文明の終わり、でていけ、南アフリカは白人のものだ。……こんなところでなにをしてやがる、こんなところでなにをしてやがる。みんなで怒鳴り声を浴びせてくる。歌の文句みたいにくりかえす。
……ようやく警察が到着する（ヴァンのアンテナがし

っぽみたいにゆれるのがむこうに見える)。ぼくはひっぱりだされた。家宅捜索にきた連中の仲間にあたすけされたわけだ。父さんを逮捕し、母さんを連れさった連中の仲間。……群衆をたちさらせる。でも、だれも逮捕しなかったし、ブラカードも押収しなかった。その土曜日の夜のことだ。いまつきあっているあたらしい女の子のベッドで寝ているあいだに、群衆のなかにいただれかがもどってきて、火炎ビンを家に投げつけ灰にしまった。

家が燃えて、ぼくはせいせいした。⁵⁰

ここにあるもの、それは、群衆を取り締まらない警察への怒りでも、家に火をつけたものへの憎しみでもなく、父によってもたらされた（とウィルが考える）武力を伴う闘争が清算されたことへの安堵なのである。

余談ながら、ここで、南アフリカ共和国の人種別の構成をみたとき、圧倒的 majority が黒人（ズルー・コーサなど）であり、次いで白人（オランダ系アフリカーナー、イギリス系など）が多いのに対して、カラードはそれに次ぐ位置でしかなく（より少数者としてはインド人などのアジア人がいる）、また、著者のゴードイマ氏はヨハネスブルク出身ではあるものの白人であると聞くと、この物語に織り込まれている複雑さが垣間見えるようだ。

「おじいさんのランプ」

「My son's story」のまともに入る前に、新実南吉の作品から一篇引用しておきたい。それは「おじいさんのランプ」という、巳之助少年がランプ（洋灯）売りを初めてから引退するまでの話である。ここで引用するのは、長い間売り歩いて来たランプよりも電気の方が「文明開化が進んだ」ものであることに気付いた巳之助が、すっぱ

ーリー」(邦訳版(下掲)解説) p.351

⁴⁹ ナディン・ゴードイマ『マイ・サンズ・ストーリー』赤岩隆

訳、スリーエーネットワーク、2007、p.254（強調は原文ママ）

⁵⁰ 前掲書 pp.333-335（強調は原文ママ）

りランプ売りを辞めるシーンである。

巳之助は、今になって、自分のまちがっていたことがはっきりとわかった。――ランプはもはや古い道具になったのである。電燈という新しいいっそう便利な道具の世の中になったのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばいが失われるからとて、世の中の進むのにじゃましようとしたり、何の怨みもない人を怨んで火をつけようとしたのは、男として何という見苦しいぎまであったことか。世の中が進んで、古いしょうばいがいなくなれば、男らしく、すっぱりそのしょうばいは棄てて、世の中のためになる新しいしょうばいにかわろうじゃないか。――

そして巳之助は自身の持っていたランプをすべて持ち出すと、近くの池のたもと立つ木に吊るし、灯を付けた。彼はしばしそれを眺めていたが、やがて意を決した。

……やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ拾った。そして、いちばん大きくともっているランプに狙いをさだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世はすぎた。世の中は進んだ」と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころを拾った。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった」

三番目のランプを割ったとき、巳之助はなぜか涙がうかんで来て、もうランプに狙いを定めることができなかった。

こうして巳之助は今までのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。⁵¹

ここで、巳之助は、ランプが時代遅れのものであると理解した時点で、鮮やかに（あまりにロマンチックな方法で）断ち切り、時代に即した新しい商売（本屋）に転向している。そして、明治から大正にかけて、大きく生活が変わりゆく中で、うまく時代の変遷に乗ったことを誇ってこう述べるのである。

「わしのやり方は少し馬鹿だったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしの言いたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがはやっていた昔の方がよかったといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことは決してしないということだ」⁵²

ここには、この物語が書かれた昭和10年代に独特の、足元に暗闇を感じつつも、明治維新から第一次世界大戦までの成功体験に基づく日本の自己肯定感があり、これはこの時代を生きた新美南吉自身の思いであると捉えても

⁵¹ 新美南吉「おじいさんのランプ」
http://www.aozora.gr.jp/cards/000121/files/635_14853.html より。
2016.1.14 閲覧。底本は『新美南吉童話集』岩波文庫、1996。初

出は『おぢいさんのランプ』有光社、1942。

⁵² 同前

差し支えないだろう。

強者の論理

やや冗長になったが、ここまで二つの物語を見てきた。一方は悲劇であり、一方は出世譚であり、また一方は南アフリカの話であり、一方は日本の話である。内容的にも地理的にもかなりかけ離れているが、両者の共通項として、強者の論理という概念を仮定してみたい。強者の論理とは、もしかしたらマルクスの上部構造に近いものかもしれないが⁵³、無意識のうちに存在を前提としてしまう論理のことである。「My son's story」における、南アのアパルトヘイト政策、「おじいさんのランプ」における文明開化により移入された西洋文物の成功が、それにあたる。誰か特定の権力者がいるわけではないが、その論理が通底することによって、ウィルは警察の不義を不義と感じないし、生活の変遷に上手く乗った巳之助少年を読者は偉いと感じ、ランプを割り捨てる姿を潔いと感じられる（あるいはそう感じるよう新実南吉が読者に要求できる）のである。

弱者の反抗（松田素二）一都市を飼い慣らす

前節で「強者」という語を持ち出したのは、その対照的な姿として「弱者による、強者の内部からの破壊の試み」が存在し、また存在しうるからである。松田素二は当初、これを「日常性の反抗/日常性からの反逆」と名付けたが⁵⁴、後に「ソフトレジスタンス」というよりスマートな名前を付けて理論化した⁵⁵。

その具体的な例はケニア・ナイロビにおけるマラゴリ人都市出稼ぎ民である。松田は彼らと行動を共にしたうえで（即ちフィールドワークをしたうえで）、『都市を飼い慣らす』という著書でそれを報告した。ネコを相手にす

るかのように、「都市」を「飼い慣らす」ことができる—それは「住居に都市を埋蔵する」云々の言説に辟易していた⁵⁶—建築学生にとって、ひどく衝撃的であった。あまりに衝撃的過ぎて上手くまとめられないが、可能な範囲で要点を述べる。

本書に登場するマラゴリ人は、ナイロビの西方 300 キロほどのところに住む農耕民であり、ナイロビとは夜行バスおよび乗り合いバスによって連絡している。彼らは成年になるとほとんどがナイロビへ出稼ぎにゆく。彼らは職があれば自身で長屋の一室を借りるが、収入の無い時には、同郷の友人へ押しかけ、居候を繰り返す。

彼らが住まう長屋は、いわゆるスラム街の一角にある。その前庭にはトウモロコシが住民の手によって勝手に植えられている。長屋には一般に同郷の者が集まって住まう。彼らは出稼ぎ民である以上、最終的には故郷へ帰るつもりであるが、中には都市で死亡する者もいる。その為には彼らは互助講を結成し、村まで遺体を送る費用に充てているが、これはもともと村に存在していた葬祭の互助組織が都市の要求に応じた形で結成された例である。

このような講は法規制の強化により、行政への届け出が必要となったが、規模を減じたり代理の組織を建てることによって、法をかいくぐった形での運営が続けられている。また、本来アフリカは部族性社会であり、他部族に対しては閉鎖的な態度をとるが、出稼ぎ民たちは、他部族民に対して、「兄弟（アムワボ）」や「叔父」といった親族呼称を使うことによって身内の範囲を拡張している（これは文化人類学では「都市的兄弟意識」とよばれる）。このように、マラゴリ人都市出稼ぎ民は、都市にありながら、伝統的な村での習慣を再解釈することで、自

⁵³ この部分は吉本隆明『改訂新版 共同幻想論』（角川ソフィア文庫, 1982）に示唆を受けたが、筆者の不勉強につき仔細に検討できない。

⁵⁴ 松田素二『都市を飼い慣らす』河出書房新社, 1996, pp.273-276

⁵⁵ 松田素二『抵抗する都市』岩波書店, 1999, pp.194-218

⁵⁶ 原広司が悪いわけではない。

らの定位を可能にしているのである。

このような創造的な生活実践、それこそが都市に服従せず、さりとして否定もしない、第三の生き方であると松田はいう。「それはヨーロッパ近代が強制した枠にいったん飲み込まれながら、受容し屈服するなかで、内部からその仕組みを組み換え、ついには喰い破っていく力を秘めた抵抗の形態でもあった。ジュンバ（出稼ぎ民のひとり一註）たち都市出稼ぎ民が、自らの生活の便宜に基づいて行方無数の融通無碍で微細な実践は、そうした日常からの反逆としてとらえることもできる。そのとき無力な屈服者、やられっぱなしのアフリカ人の生の営みは、能動的に想像し創造する抵抗のプロセスとして、私たちの前に姿を現すことになる。この一見すると奇妙な、日常から反逆する力こそが、じつは同時代の日常を生きる私が、彼らと生活をともにしながら感じた共鳴と共感の共通回路だったのかもしれないのである。」⁵⁷

松田はこうも述べている。

「客観的に見たら絶望的としか形容できない都市生活の状況に対して、ジュンバたちの口からあきらめや居直りの言葉を私は聞いたことがない。絶望の都市世界に跳び込んで、彼らは自らの能動性によって、最後はその世界を彼らの側に奪い返してきたからである。圧倒的な絶望世界を内部から突き崩し、自身の生活に合わせて、再構築していく。それはまるで『都市の飼育慣らし（ドメスティケーション）』の過程といってもよいものだった。」⁵⁸

軽業師的

このような、受容と屈服、支配—被支配の関係性を超えて、あるいは飲み込んでいくような生き方がヒノモトの国にも存在するかもしれないと考えたとき、軽業師的

な、というタームを思いついた。それは、最近刊行された小山騰氏の『ロンドン日本人村を作った男』（藤原書店、2015）を読んでいて、開国直後の日本から多数の見世物師が海を渡り、海外で興行したという事実を知ったからである。しかしながら、この考えを更に発展させるためには、既存の都市がどうしてここまで強権的で、克服不可能なものにみえるのかということ制度の面（特に、郵便・鉄道・言語）から考えていく必要があると思われる。これは長くなるので、別稿として発表したい。

参考文献

吉原直樹『都市とモダニティの理論』東京大学出版会、2002

田中純『都市の詩学』東京大学出版会、2007

ルイス・マンフォード『都市の文化』鹿島出版会、1974

芦原義信『街並みの美学』岩波現代文庫、2001

広田康生『エスニシティと都市』有信堂、1997

アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』岩波書店、2000

ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体』白石隆・白井さや訳、書籍工房早山、2007

Little, Kenneth. 1973. African women in towns. Cambridge: Cambridge University Press.

Ree, Rose Hum. 1955. The city. Chicago: J. B. Lippincott Company



⁵⁷ 松田 1996:275

⁵⁸ 松田 1996:16

あすけんのあす

明後日のはなし 赤野一人

Let's talk about the day after tomorrow

by Kazuto Akano

第4回あすけん展は、2015年11月7日から8日にかけて、早稲田大学西早稲田キャンパスにて開催された。主な出展物は第4期同人諸氏による小屋、中山拓也・遠田明音氏による軽トラ、黒沼舜氏らによる屋台である。小屋については次頁以降で紹介されるので、ここでは軽トラと屋台について見ておこう。

軽トラは「日本人的キャンプ感覚」と題し、彼の卒業論文ともリンクして、3.11以後の生活の在り方に切り込もうとする意図を持ったものである（……らしい）。荷台部分はスタイロフォームで作り、中には机兼寝台が造りつけられている。内壁は全周アルミ箔張りである。そのほか、ソーラーパネルをつける計画もあったが、これは間に合わずに、恰好だけになった。この組み立ては私も手伝ったが、中々に面倒で、特にアルミ箔を両面テープで貼り付けていくのは苦勞した。当人らは展示後、この車で寝泊まりしながら全国を漂泊しておられるようである。相変わらずえらい実行力である。

屋台の方は、某所より入手してきたもので、その内部は丹念に磨かれ、照明が造りつけられ、椅子が備え付けられた。製作期間中は57号館地下スタジオ脇のドライエリアに置かれ、展示終了後はどこかに移動されて行った。聞き伝えるところではまだ健在であるらしい。

（以上簡単に二作品を描写したが、これは機会があれば、次号以降のどこかで、当人たちにレポートを書いていただくことにしたい。）

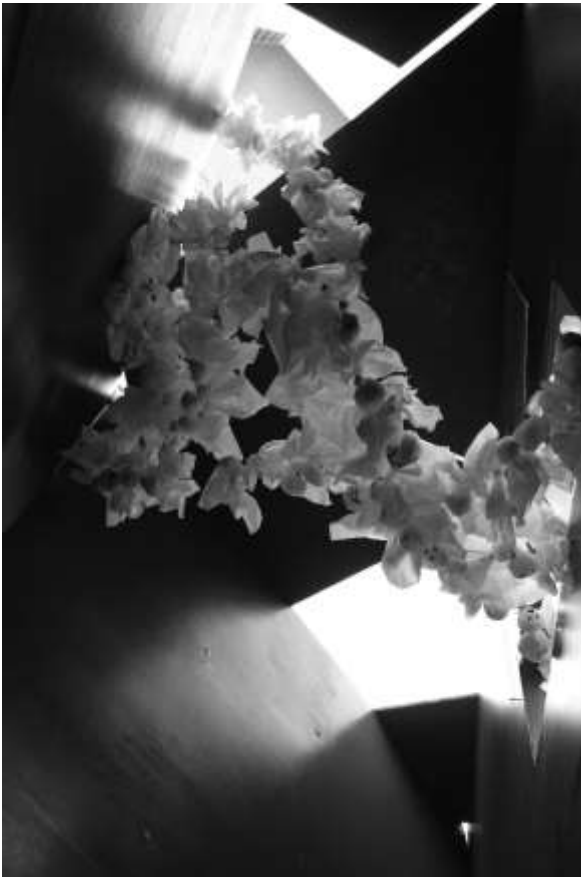
本展を通じて、色々と反省すべき点はあると思うが、第一には思想的な主義主張が今一つはっきりしなかったことがあると思う（これはN谷先生に指摘された）。

それは「だれのための建築？」という企画名自体が、実に茫洋とした意味のないものであったことに一番表れている（この題を推したのは他ならぬ私なのだけれど）。

あすけんが理工展への出展を続けているのは、まず製作に補助金がもらえるからであり、また、実際にモノを制作できる貴重な機会だからだが、少なからぬ人の前にその作品を晒すからには、単なる展示以上の何か大きな意思表示であるべきであろう。今年もまた同人諸氏による出展が企画されているようだが、その点にはくれぐれも留意して頂きたい。

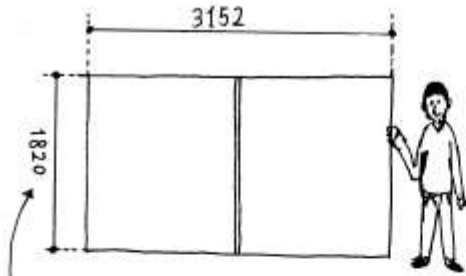


（上）軽トラックと中山氏 （下）屋台を牽くH氏

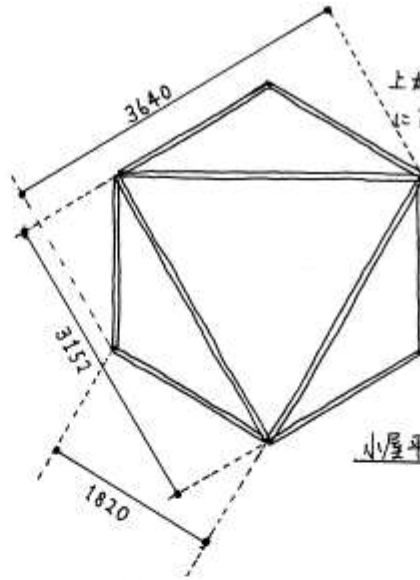


小屋
COOK BOOK

あすけん 1年の小屋

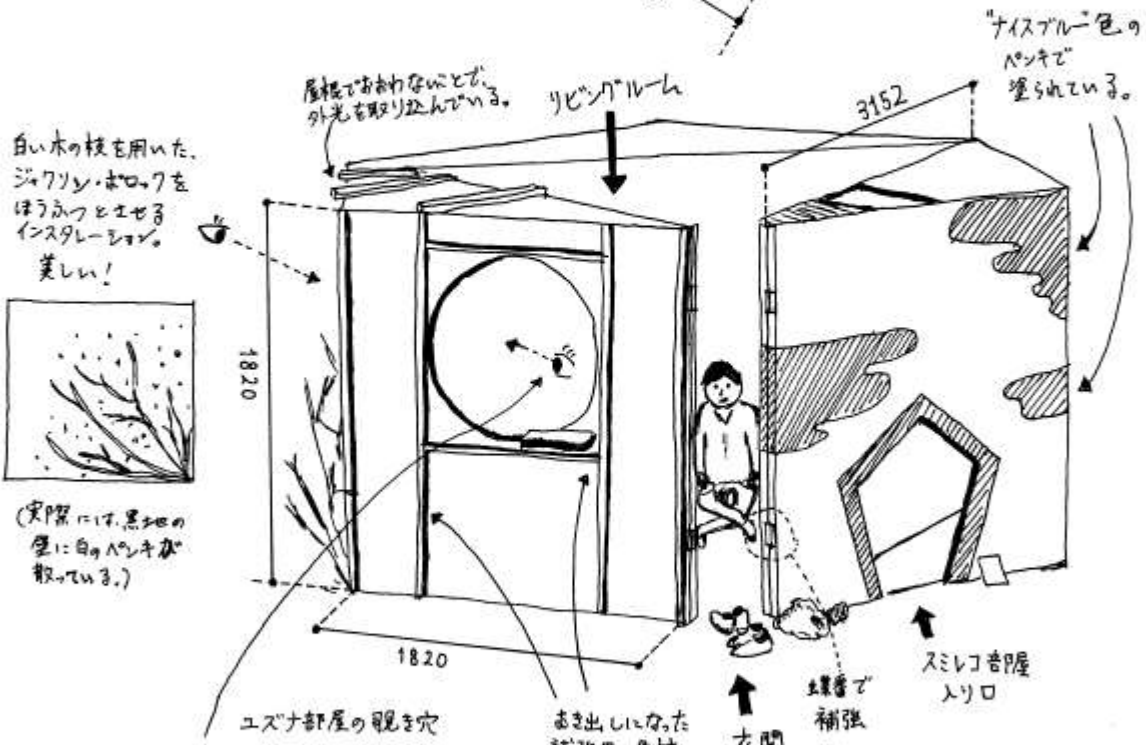


成人男性が背伸びしても
ギリギリ壁の内側が見えない高さ。
小屋立面図



上から見ると、正六角形の中
に正三角形が入っている形
になっている。

小屋平面図



屋根でおかたなほど、
外光を取り込んでいる。

"ナイスブルー"色の
ペンキで
塗られている。

白い木の枝を用いた、
ジワソソ、ホコフを
ほうふつとさせる
インスタレーション。
美しい!



(実際には、黒地の
壁に白のペンキが
散っている。)

ユズナ部屋の覗き穴

あき出しになった
補強用の角材
(しかもデザイン!?)

赤、黄、青の3つの色の
花と糸からなる。
はかなくも美しい空間。



合板を丸く切るのほ
ろろな大変な
作業であった。

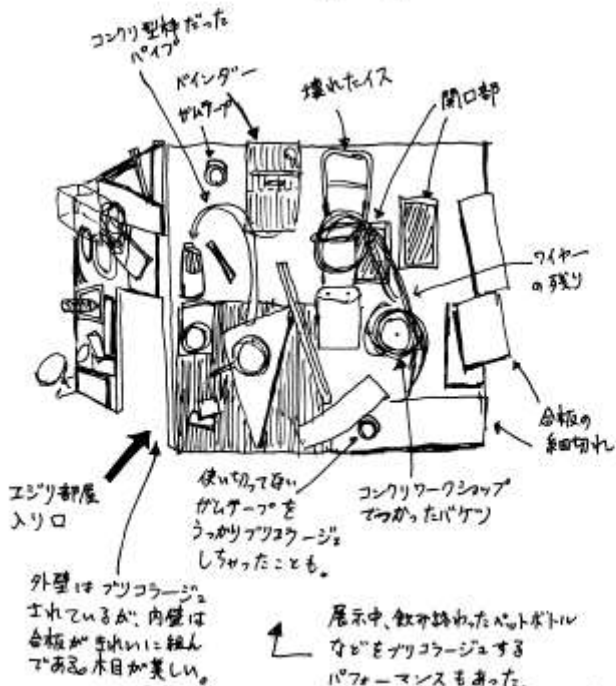
↑ スミレコ音屋
入り口
↑ 玄関
↑ 土間で
補強

スミレコ部屋の低い入り口から
中を見くと、大量のでるでるおまかせが、
圧巻である。

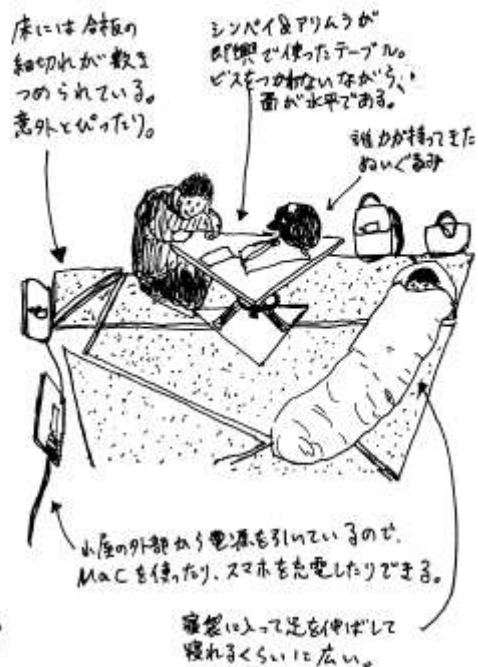


みんな表情が違!

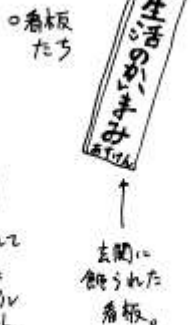
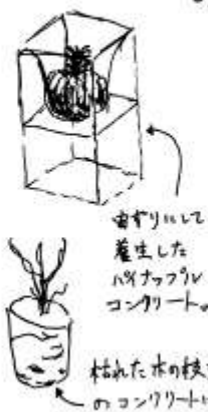
●材料・道具



○リビングルーム(真ん中の部屋)



○コンクリートの彫刻



ブリコラージュ





題字・文：江尻 悠介 写真：明日建1年 挿画：本間 董子



ブリコラージュをしている、と言ったら、鱈をコラージュしているのか、と聞かれたことがあるが、ブリコラージュとは言ってみれば、「ありあわせの道具や手段でやりくりすること」、「ある目的のためにつくられた既存の材料や道具を別の目的に役立てること」である。ブリコラージュという言葉の定義についてあれこれと書いていくとそれだけで終わってしまうと思うので、これくらいにしておくが、とにもかくにも、このブリコラージュという考え方に僕は強く惹かれ（取り憑かれ）、自分の手を動かすに至ったというわけである。

今回の展示では、壊れてしまったイスや某研究室からもらってきた合板の細切れなど、本来の機能を失ってしまったものに、「装飾」としての新たな機能を持たせる、という意味で「ブリコラージュ」をしたと言えるが、それを建築（あるいは生活をする場所）という土俵の上でやろうとした、と考えると、表現方法として不十分であったのではないか、と思う。本稿では、今回の作品を振り返るとともに、ブリコラージュについて考えたことを述べたいと思う。

* * *

最初に「ブリコラージュ」という言葉を目にしたのは、たしか石山修武氏の本であったと思う。そこでは、ブリコラージュとは「手仕事をする」という意味であり、フランスの文化人類学者のレヴィ・ストロースが『野生の思考』において提出した概念である、と紹介されていた。その後も抽象的な説明が続き、難しくてよくわからなかったが、これが現代のブリコラージュですよ、と具体例としてあげられていた、《伴野一六郎》の写真を見て驚

き、言葉に表しようのない不思議な魅力を感じた。一見ただのゴミの山かと思うほど、家の外壁が廃材で覆われているのである。どうやらこれらの廃材は主に海岸に流れ着いた漂流物だという。後に『バラック浄土』（石山修武著）を読み、この伴野一六郎では、電信柱が家の柱として使われていたり、自動車のフロントガラスが壁に埋め込まれて水槽として使われていたり、というディテールの数々を目にした。これがブリコラージュなのか、なんて魅力的なのだろう、とただただ圧倒された。

前述したように、この伴野一六郎は、現代のブリコラージュとして紹介されていたわけであるが、それにしても、おかれた状況や制作者（ここではあえてブリコロールと呼びたい）があまりにも特殊であった。三河湾の近くであるために漂流物が身近なものであったこと、8年もかけて少しずつコンクリートを打ち込んだ壁があることなどをとってみてもそれはよく分かる。では、もっと僕たちの身近なところで、たとえば現代の都市においてもブリコラージュされたものはあるのだろうか、また、それはどんなものであろうか。今回のブリコラージュを用いた展示のきっかけは、「現代の都市におけるブリコラージュとは何か」という素朴な疑問あるいは思いつきである。

* * *

僕は建築を志した当初より、セルフビルドに対する憧れが強かった。それは、先ほどあげたように石山修武氏の本で紹介されているような非建築家が自らの手でつくりあげた（修繕した）家（伴野一六郎や川合健二、シュヴァルの理想宮など）や、今和次郎の『住居論』で描かれているようなバラックなどである。このような家について知れば知るほど、家を全体としてではなく、生活するために必要なパーツの総体として考えるようになった。そして、このことを最も強く感じたのは、坂口恭平氏の本の中で描かれているような、路上生活者の「家」に着想を得た「モバイルハウス」である。氏は、ホームセンターで売っている材料・道具だけで、3万円以内で家をつくることできる、と提唱している。このモバイルハウス

はいろいろな種類があり、標準的なものだと大人が数人入れるほどの大きさしかないが、ガラス板をはめ込んだ窓や透明なトタン板でできた屋根から外光が差し込み、テーブルやベッドがあり、さらには、ソーラーパネルとバッテリーのおかげで電気を使うことができる。あくまで、これは極端な話で、このような家に住み続けることができるのか、と言われたら素直には頷けないが、たとえインフラが通ってなくても、外のトイレを使って、銭湯に行き、と生活していく上で必要な生活行為を家の外に求めていけば、都市という屋根の下で「生活」することができるのである。

ホームセンターで売っているものだけを使い（時には別の用途でつくられたありあわせの材料で代用することによって）、なんとか人間のスケールに近い「家」をつくる、という考え方はとても刺激的であった。そして、この「家」は、新しい材料が手に入ったり、気温・気候が変わったりするたびに、修繕を繰り返して、形を変えていくであろう。これこそ、ブリコラージュと言えらると思う。

* * *

今回の展示では、全体としては一つの小屋をつくった。そして、僕は、その真ん中の部屋に2日間居続けた。ご飯を食べたり、談笑したり、本を読んだり、という必要最低限の日常行為を行うことができたので、そこは生活をする空間だと言えらると思う。このような立場になって考えると、極端に言えば、ご飯を食べるためのレストランも、談笑するためのカフェも、本を読むための図書館も、すべて生活をする空間と捉えることができる。また、僕が居続けた小屋についても、全体が完成していない段階から、真ん中の部屋でご飯を食べたり、課題をやったりしたのも、「生活」に含まれるであらう。そして、この小屋は、実際に真ん中の部屋に入って使い出しから、玄関や荷物置き場を決めたり、天気予報を見て屋根をつけたり、と自分たちの生活しやすいように修繕を加えていった。雨が降った展示2日目には、雨漏りを

防ぐために余った材料でどうにかやりくりした。このような小屋のつくり方はブリコラージュと言えなからうか。

今回は、三方に壁を立てて外と隔て内部の空間をつくる、という初歩的なことから始めて小屋をつくっていったので、中で生活してみないとわからないことだらけであった。しかし、このようなつくり方ができたのも、小屋が人のスケールに近い大きさであったために、身近な材料・道具と人の手でどうにかやりくりできたからである。一つ不十分だったところをあげるとすれば、装飾としてのブリコラージュと生活する空間（あるいは生活する行為）としてのブリコラージュを完全には一体化できなかったのだが、これも技術的にしかたがなかった。もし、壁や床などの小屋の基本的なパーツも、本来は別の用途で用いられたありあわせの材料でつくることができたら、本当の意味で、生活行為としてのブリコラージュを表現できたと思う。

* * *

今回の展示は、「生活をする空間」の極限に近づくことによって、建築にまつわる難解な理論を通してではなく、目の前にあるものとして、そのような空間に身を置くということ、肌をもって感じたいという衝動のようなものに依るところが大きかった。最後まで、小屋の中で一晩寝ることを譲らなからたのはそのためである。このように所与のものではなく、自分たちの手でつくりあげた空間に身を置き一連の生活行為を行うという体験を通して、人間の身体の延長である“道具”として“建築”を捉える、という考え方を持つに至った。プリミティブな建築の考え方である。これらは、自分の身体をもって空間に肉薄したからこそ得られたものであり、それこそが僕自身の小屋をつくった意義である。展示の2日間しか建っていない、まるで幻のような、つぎはぎだらけの小屋だったが、それはたしかに僕たちの「家」であった。

光の箱

(ユズナ部屋)

文：豊岡 哲生



私は、本会の製作物でユズナ部屋と名付けられた部屋がどのような試行錯誤の上で作られていったのか、私の視点で述べていきたい。私が本会に興味を持ったのは何かを建てるというのを自らで計画し、施工してみたいと思ったからだ。晴れて建築学生となった私は、建築学生らしいことがしてみたかったのだ。

入学して間もない私はエジリと仲良くなり、彼の紹介で明日の建築会に入ることとなった。そして、(今もだが)何も知らない一年生の私は、明日の建築会の議論の中で手探りに自分たちの中にある建築への熱意をぶつけ合った。話し合いの中で、私はカメラオブスキュラの装置を作ってみるという企画に興味を持った。

カメラオブスキュラとは、暗室を作り小さな穴をあけると、そこから入ってくる光を反対側の壁に映画のように映すことができるという原理である。(ラテン語で暗い部屋の意味。) 撮影機の事をカメラと呼ぶが、この原理を使っているからこの名前が付いている。

私は当時、この装置によって早稲田大学理工展に訪れた人々の像を映したらさぞ面白かろうと、カメラオブスキ

ュラ案に心酔していた。しかし会の方針として、「作りたいたい人」が集まっているのだから今年は皆の意見や特技を生かした作品にしよう、ということになったので、私はすっかりやる気をなくしてしまっていた。

三つの二等辺三角形の部屋をつなぎ真ん中に正三角形の居住空間を含んだ、全体として六角形の家を作ろうということになったのはこの頃だ。やる気をなくしつつも、建てる、ということに興味があった私は結局参加してみたいと思い、私はそのうちの一つ、ユズナ部屋に配属されることになった。ユズナ部屋のメンバーは、ユズナ、ワカメ、テツナマ(筆者)の三人だ。ユズナは障子を使った柔らかい光を用いたデザインをしたい。ワカメは華道をやっていたことを生かし、生花を使ったデザインをしたい。この二人のデザイン思想と私自分の作りたかったものをどうやって合体させ形にするか、この三人で議論した。

幾日かの議論の末、デザインは決まった。光の三原色をモチーフに赤、黄、青の三つの色の糸を用い、部屋の天井から入ってきた三色の光が壁に反射してくる様をデザインした。光の当たったところからは色に対応した花をワカメが生ける。それを真ん中の正三角形の部屋から見られるように障子を立て、真ん中の部屋の庭のようになる。そして、外側からも見るができるよう、壁を取り外し大きな開口を作る。そして残った一枚の壁には白い布を貼る。外観は真っ黒のペンキで塗る。このようなデザインとなった。

そして、実際に作っていかうとしたところ、設計と施工の差異という壁にぶつかったのである。

デザイン決定段階では、このまま作って立つわけがないということを指摘する人間がいなかった。施工中に不安定さに気付いたナイルの指摘によって、壁を取り外して作った開口と障子を取りやめた。その結果、途中で壁を立てるための柱の木が足りなくなってしまった。その不足は実際の施工中でも解消されず、壁の補強が遅れていたユズナ部屋は突風に煽られ、一時は倒壊の危機に陥る

こととなった。これは大きな反省点だった。

そして、白い布を貼ることになっていた部分も、布を止めるための釘が、短いと布を突き破らずうまく止められない、長いと薄い壁を突き破ってしまう、とうまくいかなかった。その部分は白ペンキでうまく塗ることになりここでも施工を知らなかったことの報いを受けることになった。



糸を壁で反射させるというのも、買い出しに行った時に買って来た糸の長さが足りず、案の変更を余儀なくされた。

だが、施工の中で変更されたものが不満の残るものばかりだったわけではない。

部屋を覗き込む部分が施工段階でどんどんなくなってしまい、新しい開口を考えねばならなくなった。そこで、壁の一面に大きく丸い穴を開け、そこを開口にしようということになった。思いつきだったが、黒い壁にぽっかりと白い壁と糸と花が見え、関心を引く。結果的にはとても面白いものになった。これの施工には他の部屋の担当だったメンバーや本会の会員でない人が多く参加してくれて、スムーズに進めることができた。

また小屋を建てていくうちに、外に向いている壁の内開口がない方が少し寂しいと感じ、何かデザインをしようということになった。そこで、黒い壁に白ペンキで水の飛沫を描き、戸山公園に落ちていた木の枝を白ペンキで塗った物を釘止めて、モノトーンのデザインをした。

これもとても無駄なく綺麗になった。

このようにして、ユズナ部屋は出来上がったのである。後付けながら語るとすれば、ここを訪れた人はこんな経験をしたのではないだろうか。訪れた人はブリコラージュのエジリ部屋やなんでもアリのスマレコ部屋に対して、質素でモノトーンな外観に注目する。その時、丸い開口から部屋の中がチラと見える。白い壁と、赤い花。強く視線を引っ張るオブジェクトに開口の前まで足を運んでみると、張り巡らされた糸に生き生きとした花が色鮮やかに楽しませる。部屋の一番奥からは、意味深な蓮の花がたくさんの穴を開けてこちらを見つめている。

私が小屋を作っていて感じたのは、設計段階で施工のしやすさについても考慮するべきだということだ。今回私は何度も施工の難しさを感じたが、それらはすべて設計段階でよく調べたり模型実験をしたりしておけば回避できていた問題だったように思う。デザインと施工の実現性を同時に解決する設計をするために、これから学ぶべきことはたくさんある。小屋が出来上がった時、達成感と同時に学ぶべきことの多さを感じた。このような試行錯誤の上、ユズナ部屋は出来上がったのである。



スタート

六角形の小屋を作ることができ、3つの小部屋にそれぞれリーダーをおくことになった。リーダーの方がやりたいことやれるだろうと



あじあ私やります。

すめれ

と手を挙げた私。



(図1)



さっそく部屋のテーマを考える。とある漫画の一コマを見つける。(図1参照)

よし! 次のページに

しかし、先輩は微妙な反応。



ホームセンターへ向かう途中、助手席で先輩にすめれこ部屋はどんな部屋にするのか話す。

10月22日 初めての買い出し 中山先輩が軽トラをだしてくれる。



結局、いろいろと物を貼り付けるのはブリコラージュと被るのでやめて下のような案に落ち着く。

天井はこう書く



突然の横重力に壁のみならず床のコンクリートタイルも剥がれ壁に"落ちている"。

突然の横重力によって崩壊した内壁

横重力によって様々な物が壁をすり抜け落ちてくる。

剥がれた内壁や壊れた骨組み壁に"落ちている"。



最初に考えた横重力部屋がこれである。

突然重力が横になったにも関わらずすぐそれに順応して生えてくる建築物やキノコたち

殺人事件が起きたが遺体はもう壁をすり抜けていってしまった。



二人の意見もききつつ案を練る。

なるほど横重力!

これはそれだけで想像が膨らむ設定だ...

さらに巨大なハンバーガーが壁にある画像を見つけた。いろいろとアイデアが浮かんだのでとりあえず「横重力」をテーマに決定。

横重力部屋では物が重力の方向へと壁も通り抜けて"落ちていく"

その様子を壁にものが張り込まれるようにみせて表現しようとした。



すめれこ部屋のメンバーすな、みなに案を見せる。



つづきはこれから

「それがやりたいならいいけど、一発で終わらそうだね。」

中山先輩



構成力は本当にやる意欲がある種族なのだろうか？ それにすでに誰かがやっている表現かもしれないと、腹心をえぐられる。

「せーかくだから今までやってきたこととかこれからに繋げた方がいいじゃない？ 薄芸系に出すもの。じゃなくてすみれこの作品として考えてネーツイッターのペットプロジェクトとかだじれとか使えばいいじゃん」

説明しよう！

ペットプロジェクトとは私の身の回りにあるものに目を惹き付けペットにするプロジェクトである。そこからツイッターをはじめしたが、もてあましていた私は、やりがいのあるこのプロジェクトを思いいつき、写真を持っては、毎日ツイッターにアップしていた。

「ペットプロジェクトとは...」



もともとは小林賢太郎氏の著作『ボクサン氏の奇想で平凡な日々』でボクサン氏が「熊教ちゃん」をペットにしていたのを見て、私もペット作ろうと思い始めたのだった。



それに言われた通りに計画を遂げるものなんだが機軸し、だいたいペットプロジェクトだって最近始めたことだから、「これまでの活動」なんて言えない。だからといってこのまま機軸がいつかいいの？

高専に言われた通り今の機軸をやるにやらないのと聞かれるとそういうわけではない。でもリーダーとないん小遣の機軸は私だけの作品じゃない。すなわち自分と関係も持たせてやるべきの機軸なんだ。

悩みに悩み悩み悩み悩む。



理工製本書もせまり、他の部屋の準備が進む中、テーマから考え直す。

しかしながらなにがあらうと日々は進んでいく。私は自分が中学校のころ通っていた塾で講師のアルバイトをしている。



「とりあらず！ ハイク！ いくか。」



そして、

そこであった非常口のサインが突破口となる。塾では古くなった非常灯をはずし、新しい物をつけたいばかりだった。古い方のプレートが捨てられずに置いてあったのだがその理由には私にあった。

私は塾生だった中学生のころから、ことあるごとにてるてる熊造をつくり非常灯の下に貼り付けていた。そのため勝手に捨てずに非常灯のプレートごと預けておいてくれたのだ。



誰もが一度は作ったことがあるのではなかろうか。

私の中でも自分でもよくわからないが機軸のあるものだ。無意識に作り続けていたのだから。



てるてる坊主！

ここまで来た時点で自分だけの作品ではないからみんなの意見を取り入れる...ということ考えるのに慣れていた。なにが自分にとって題材にして機軸があるもの、と、同時に他人のすざないものを探していた。そこで受つけたのが



「これ、もっていいよ！？」

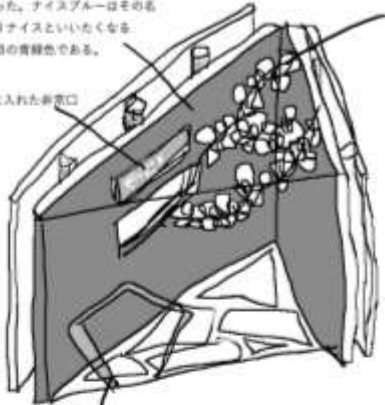
次のページにつづく！

かくして、てるてる部屋と決まったわけである。

それで、はやい話がこうなったのです。

内壁はすべての壁に取り付け、
ナイスブルーという色のペンキ
で塗った。ナイスブルーはその名の
通りナイスといったくなる
濃い目の青緑色である。

塾で卒に入れた非常口



屋根と壁の隙間から
非常口に向かって
うねった針金が正
木たざされて、
そこにでてる坊主が
いくつも置かる。

塾で非常口のプレートを手に入れてから
私の頭にはてるてる坊主が非常口に稼動
している状況が浮かんだ。
イメージしたのはティントレットの
受胎告知という絵画である。



←こんな絵

天使が気持ち悪いくらい
たくさん連なっている絵である。

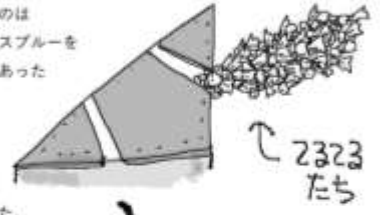
天使

入口をわざわざ五角形に切ったのは、
小屋が六角形ならそれぞれの部屋で入口の形を
三角形、四角形、五角形にすれば全体の繋がり
が生まれるというアツナマの言葉を取り入れた
ためであったが、結局三角形の開口部を実現で
きなかったで、そんな繋がりには生まれなかった。



壁の絵はナイスブルーで塗をぬいたあと、
木目が赤紫のシマのように綺麗だった
ためそれにそって色々ないまものたちを
描いていった。小塚全体の出来に関
わるのでどこに何を描くかは「下書き
はしなかつたがかなり考えた。

屋根に隙間をあけるたのは
さしこむ日の光でナイスブルーを
よく発色させる狙いもあった
が、てるてる連が
空からティントレット
の天使のように
押し寄せてくるように
見せたかったのもあった。



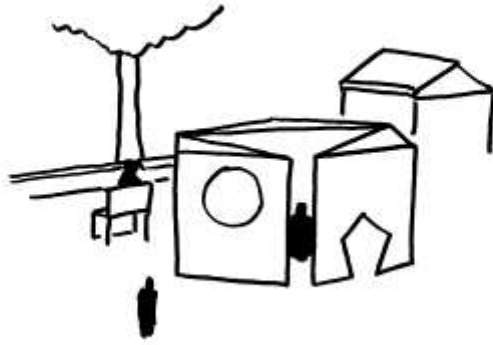
随分強引なまとめ方ではあるが、こうして“てるてる部屋”
は生まれた。コンセプトはなんなのかと問われても特に無
いと答えるしかあるまい。こじつけ、あとづけならいくら
でもできるが、私はそれをしたくない。何かを作っている
際に、だんだんと自分が何を作っていたのかわかってくる
ことはあるが、それは後から都合のよいように意味を決め
るのと同じではない。私はてるてる部屋についても嘘をつ
きたくない。なぜこれが作られたのか、その答えは出来る
までの過程すべてである。今回はそれを部分的ではあるが
ほとんど記録したといえる。

ありがとう
ございました。



小屋ができるまで

文・挿画：江尻 悠介 写真：明日建1年



はじめに

「明日の建築会」という名前をはじめて耳にしたとき、言葉に表しようのない不思議な魅力を感じた。アカデミックなようでどこか前衛的である。(これは後々先輩たちから自嘲気味に言われることでもあるのだが) 宗教っぽくてちょっぴり怖い、怪しい。それでもなぜか、自分はこの人たちに会わなければいけないという気がした。僕が早稲田建築に通い始めた4月初頭の頃のことである。

僕が本会に興味を持つに至った背景として、実は、僕が高校2年生の秋、早稲田大学・理工展に足を運んだ際に、本会の方に出会っていたのである。中庭に集められた大量のモニュメントとそれを覆うような不思議な装飾。どうやら早稲田の建築には、おもしろいすごい人たちがいるらしい、とワクワクした。

このような経緯があって僕は本会に連絡を取り、仲間に入れてもらったのである。一介のファンをメンバーとして迎えてくださったのだ。

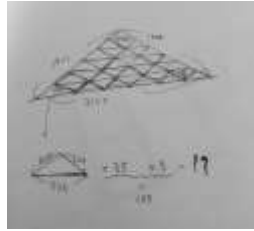
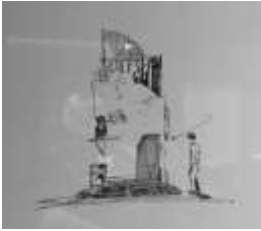
そして「今年(2015年)も何か理工展でやりましょ

うか」という話になった際に、先輩たちは忙しいという報告を受け、(書類上では)僕が代表を務めることになった。

さすがに1年2人では何もできないので、とにかく人を集めなければと焦っており、(まだまだ学科にどんな人がいるのかわかっていない状況であったので)とりあえず親しい人や面白そうな人に声をかけて、10人くらい集まった。声をかけていくときに、口々に「明日の建築会って何?」と聞かれ、自分自身もまだ全体をつかめていたわけではなかったためうまく答えられなくてもどかしく思ったことはよく覚えている。今思えば、このメンバーが集まったのは奇跡的だなど感じるほどの、強烈な個性の光る人たちが集まった。僕としては、自分も一人のメンバーであると同時に、「このメンバーで何かつくるとしたらどんなやばいものができるのだろうか!?’という傍観者の視点からの楽しみもあった。僕はすごくワクワクした。

小屋のカタチが決まるまで

(6月から夏休みまで)



本会1年のメンバーの最初の顔合わせは6月の初頭であった。当初、興味を持って集まってくれたメンバーに対しては、前年度に先輩たちが展示した小屋の写真と、理工展に作品を展示するとその制作費として経費が下りる、ということしか伝えていなかったのもので、本当に手探りの状態からのスタートとなった。

はじめのうちは皆の価値観や考え方を伝えあったり、たわいもない話をして親睦を深めたりしていたが、あるときから具体的なカタチや材料の話になってきた。そして、オチアイさんが提案した土壁を用いた廃墟のような作品案への支持が多く、「壊れながら建ち上がる」建築をつくらう、という話になった。この作品は、前年度までの本会の作品の影響をヒシヒシと感じられるものであった。しかし、テーマが抽象的であることや、施工することを考えると現実的に厳しいことから残念ながら取りやめることになった。

廃墟案は取りやめになったが、土壁やコンクリート、木材、鉄など、いろんな素材を使った作品をつくりたいという方針は残ることとなった。そこで小屋のいくつかの壁面をすべて異なる材料でつくる、などという意見が出た。これについても、現実性の低さやメッセージ性を見出せなかったことなどから取りやめることになった。

このように話し合いを進めていく中で、だんだんと、壁

を扱った作品をつくらう、という方針が定まってきた。そして、そのまますぎるかもしれないが、いくつもの壁を用いた作品にすることで、皆の表現したい様々なテーマや材料を扱えるのではないか、ということになった。

夏休みに入ったばかりの頃の話し合いで、模型のようなものをつくることでカタチのスタディをしようということになった。メンバー1人あたり1枚、計10枚の可動式の壁をつくり、あるときにはそれらをつなげることで閉じた空間をつくり、またあるときには、一部を開放することで人の出入りを可能にしよう、というものである。このとき僕(たち)が考えていたのは、建築を“身体の延長としての道具”と捉えて、そのときの気分とか気候とかに合わせてカタチを変えられたらおもしろいのではないか、ということである。なかなか非現実的だが、今となっては良くも悪くも1年生らしい発想だったと思う。この段階から、ただ建築の作品を展示するだけでなく、自分たちのつくった空間の中で生活してみる、という構想が浮かんでいた(僕個人だけかもしれない)。

切り離した状態の可動式の壁で空間をつくる、というアイデア自体はおもしろかったが、またもや、安定しない構造であることやケガにつながる可能性が高いことなどから、壁同士は接続するべきだ、ということになった。そこで、構造的にも、感覚的にも安定している正六角形

の小屋をつくらうということになった。ここに来てもまだどこかで完全に閉じられた空間にしたいと考えていたようで、外からは正六角形の1つの小屋に見えるが、実は二等辺三角形の小屋3つが並んでいる、というプランに決まった。そして、これは僕が言い出したことだったと思うが、3つの小屋を配置した時、小屋同士の隙間から中央のスペースが見えるので、そこにずっと居続け、「生活」する様子も展示の一部にしよう、ということになった。この正六角形の小屋案には目立った異論もなく、ちょうど夏休みも終わりに近づいており夏休み明けから実際の施工に取りかかるという計画であったので、この

方向で進めていくことになった。

いざ、材料や寸法、工程を決めようと思ったが、そもそも小屋などつくったこともなく、木材であれば比較的容易に扱えそうだったと思ったが（実際のところ木材の扱いも難しかったのは言うまでもない）、そのときの計画で、床に敷く予定であったコンクリートの扱い方など見当もつかなかった。そこで、本会の先輩たちにいろいろとアドバイスをもらうことになった（ありがとうございます）。そして、高山建築学校に何度か参加しているマツキさんがコンクリートの扱い方がわかるワークショップを開いてくださることになった。

コンクリート・ワークショップ

(10/4)



技術総務課から許可が下り、ドライエリアでの作業が可能になったので、10月4日、コンクリート・ワークショップが開催された。ワークショップとは言ってもコンクリートを扱うということ以外は特に決めていなかった。まずはコンクリートを流し込むための型枠をつくる（探す）ところからはじまった。大学近くのドンキホーテやオリンピックなど何軒かをまわり、ビニール傘やビニール材、パイプ、ワイヤーなどを買った。また、マツキさんが持ってきた（電化製品か何かの）発泡スチロールも型枠として使うことになった。学校近くの青果店か

らもらってきたパイナップルも何かに使おうということになった。

一回目の練ったコンクリートは発泡スチロールに流し込まれた。普段あまり意識することはないが、発泡スチロールには隙間がいくつもあり、後日、型枠を取り外してみると、無骨な彫刻ができあがっていた。

二回目に練ったコンクリートは、鉄筋に張ったビニールに流し込むことで空中打設された。この回では、コンクリートの表面にポコポコとした金属板で凹凸をつけたことや、その造形が丸かったことから、パイナップルのようなコンクリートの造形物ができた。

これらの作品は、理工展当日には展示されることはなかったが、高山建築学校を彷彿とさせる、有意義なワークショップとなった。水を混ぜるだけで使うことができるインスタントセメントではなく、セメント：砂：砂利＝1：2：3で混ぜてつくる強度のあるコンクリートのつくり方を知ることができたので、僕たちにとって収穫は大きかった。

放課後のドライエリア

(展示1ヶ月前)

ドライエリアでの作業がはじまったとき、すでに理工展の当日まで1ヶ月を切っていた。まずはホームセンター（中野にある島忠ホームズ）で材料を買うことからはじまった。この際、ナカヤマさんとエンダさんが軽トラを出して下さることになった（ありがとうございました）。この最初の買い出しで砂、砂利、セメント、角材、合板、その他金物類を購入した。設計図などを描いて準備してみたものの、そもそも規格サイズに合わせてつくるのがベストであった、ということに、このときになってようやく気づいた。ここで合板の厚さをそれほど真剣に考えていなかったため薄いものを買ってしまい、後々施工する際に危ないと気づくのだが、何事もはじめてのときには失敗がつきものである。閉店ギリギリの島忠で材料を軽トラに積み終わると、先輩たちが学校まで運んでくれた。その際、3分弱軽トラの荷台に乗っていくことになった。少し気持ち悪くなったが、ワクワクする体験であった。



まずは小屋の外壁を立ち上げることから作業は始まった。構造面の知識も乏しい僕たちには、感覚的に部材を組み合わせていくしかなかった（後々、構造面に明るいメンバーのナイルに、もっと早くからアドバイスしておけばよかった、と言われることになる）。施工の工程としては、ドライエリア（地下1階）で壁のパーツだけをつくっておき、展示場所での作業が可能になったらすぐそちらに壁

運び、壁同士を接合していくという順序で考えていたので、壁のパーツが完成すると装飾の作業に取りかかることになった。

ユズナ部屋、スマレコ部屋は、展示場所に運んでからの作業がメインということもあり、エジリ部屋の装飾からはじまった。エジリ部屋は、「ブリコラージュ」という言葉掲げ、ありあわせの材料を使って、装飾をほどこしていく、という計画であった。そこで、メンバーやその友だち伝いに集めたいろいろなものを壁にビスで打ち込む、という作業をおよそ2週間ほぼ毎日継続することになった。僕たちがどうやらブリコラージュをしているらしいといううわさはたちまち広がり、意外な人から意外なものをもたらすこともあった。こういう種類の楽しさは何ごとにも変えられないと思う。ドライエリアの上を通り過ぎる人たちから怪しいものを見るような眼差しを受けることもあったが、それも今となってはいい思い出である。

展示の約1週間前に差し掛かり、展示場所での作業が可能になったので、地下1階のドライエリアから地上に壁のパーツを運び出すことになった。装飾とは言っても塗装程度であったユズナ部屋、スマレコ部屋はスムーズに運び出すことができたが、エジリ部屋は当然のごとくいろいろなものが壁に貼ってあるので、「重い・汚い・危ない」の三拍子で大変苦戦することとなった。僕が怒られたのは言うまでもない。



ほんとに建つのか！？

(展示1週間前)



前年度の小屋をつくった先輩たち曰く「本番の1週間前
にある程度立ち上がってきていないと完成しないよ」と
のことであったので、展示前最後の日曜日に壁を立ち上
げるつもりであった。しかし、この日はわずか3人しか
来ることができなかった。ただただ焦りが募るばかりで
あった。

翌日月曜日、技術総務課の方から次のようなメールをい
ただいた。壁のパーツを置いてある状態が危険であるた
め、翌日の午前までに何もアクションがない場合は校地
借用を取りやめる、と。急な勧告に大変戸惑った。この
日のうちに壁を立ち上げなければ完成しないかもしれな
いが、かといって中途半端な状態であれば、危険である、
と見なされてしまうであろう。つまり、小屋を立ち上げ
て、かつ、安全な状態まで持っていくことが求められた
のである。

メンバーの総力を挙げて、いざ壁を立ち上げて、蝶番で
留めようとしたところ、壁自体が構造的に安定していな
いことが判明し、また二等辺三角形の小屋自体も倒れる
危険性が高く安定しないことがわかった。よって、計画

を変更し、3つの二等辺三角形の小屋同士も接合し、一
箇所だけ隙間が空いていて中央のスペースに出入りでき
る構造にした。ここまで計画を変更したので角材などの
材料が圧倒的に足らず、やはりその日のうちに安定した
状態まで持っていくのは難しいということになった。そ
こで、ブルーシートで小屋を覆いビニール紐で何度も巻
くことによって一時的に安定した状態にしてその日の作
業は終わることにした。

火曜日の朝、技術総務課の方が点検をしに来た。前日の
作業のかがあって、校地借用の取りやめは免れること
ができた。しかし安心したのも束の間で、その日は風が
とても強かったため、1つの部屋の壁が歪んでしまい、
他のメンバーが授業を終えるまで、ユウタワイが（物理
的に）支えてくれた（ありがとう）。その後、無事、
補強を済ませ、借りたロープで小屋を巻いて安定させる
ことでその日の作業は終わることになった。

水曜日は、課題の提出を控えていたため、1日空いてし
まうことに対する焦りもあったが、作業は行わなかった。

みなで建てる方法

(展示直前2日間)

木曜日は、課題提出を控えていたので、遅いスタートとなった。みんな口々に遅くなってゴメンという中、テツナマがお詫びにベルトをブリコラに供養して、とってくれるのをよく覚えている。水曜日までの段階で、小屋だけで独立して立つ状態にはなっていたが、まだまだ補強が必要であった。まず、各部屋の内側に補強用の角材を取り付けて丈夫な構造にする、という作業に取りかかった。

これと並行して、各部屋の装飾の続きの作業も行った。



スマレコ部屋は、すでにナイスブルー色に壁を塗っていたが、その上に油性マジックでドローイングが描かれた。スマレコ、スナ、ミキナが主にこの部屋の塗りの作業を担当した。そして、空いた時間には、スマレコ部屋の中に展示するためのてるてる坊主が大量につくられた。



ユズナ部屋は、すでに壁が黒く塗られた状態であったが、外壁には白のペンキで描画がほどこされるとともに白い木の枝が配置された。また、部屋の内部にはワカメの手

によって花たちが活けられ、テツナマ、ユズナの手によって糸が張られた。狭い空間での繊細な作業は見えてとても大変そうであった。

この日は昼過ぎに課題の提出があったので、買い出し担当が帰ってくると、青空の下マックを食べながら、それぞれの課題に取り組んだ。この日はこれまであまり来られなかったメンバーも集まり、大人数での作業となった。午後も作業は続いた。学科の友人が某研究室で処分する予定であったという、たくさんの細切れの合板を持ってきてくれた。これらは、小屋の中央の部屋において、少し隙間を空けながらタイルのように床一面に貼っていった。後にこの隙間にユウタワイがシュレッダーで細かくした紙切れを詰め込んでくれて、まるで浮遊しているかのような不思議なスペースができた。この日は、課題をやりに来たり、提出しに来たり、と学科の友人たちがたくさん作業場の横を通りかかったのも、中には少し作業を手伝ってくれる人もいた。小屋の横ではクロスマさんたちのグループが屋台の改修をやっており、そこに手伝いに来ていた人も多く、本会の作業場はとても賑やかであった。

夕方になると、ナカヤマさんが軽トラを出してくれるということで、数人が買い出しに行くことになった。理工展連絡会の方に提出する書類の都合上、これが最後の買い出しになる、ということであった。不足していた木材や金物類を買ってきてもらった。また、本番1日目の夜、僕が小屋に寝泊まりする予定であったので、風邪を引かないように、-15℃まで耐えられるという、1万円もする性能のよい寝袋を買ってきてもらった(もちろん自費である)。大人数で楽しく作業をしていたが、まだまだやらなければいけない作業はたくさんあった。少しばかり焦りを感じながら、この日の作業は終わるこ

とになった。

ついに本番の前日となる金曜日を迎えた。この日は朝早くからの作業の予定であったが、ここに来て、風邪を引いてしまった人が多く、大事を見て、昼前あたりから本格的に作業が始まった。この日、メンバーのシンペイの親友のアリムラがお手伝いさんとしてやって来た。彼は建築学科ではないにもかかわらず建築に対する熱いものを持っている人であり、シンペイとアリムラが中心となって看板やテーブル、イスなどがつくられた。理工展において看板は平面が普通だが、本会は木の枝などを「プリコラージュ」したインパクトの強いエネルギーギッシュな看板になった。



この日になると、エジリ部屋とユズナ部屋の床にコンクリートを流し込んでつくったタイルも固まってきて、無骨ながらよい仕上がりになっていた。プリコラージュもその他の作業の合間を縫って細々と続けられた。エジリ部屋の天井には透明のトタン板やビニール材がプリコラージュされた。またこの部屋の内部は塗装などをせず、合板の模様を見せることになった。スナとナイルが中心となって、魅せる内壁をつくってくれた。各部屋も完成に近づくと、中央の部屋の使い方などを検討して、その日の作業は終わることになった。いよいよ明日本番である。



↑ みんなでコンクリートを練る。



↑ 木の枝をプリコラージュした看板

生活のかいまみ

(展示当日2日間)



展示当日。あらかじめ理工展当日の2日間は、常時3人くらいが小屋の中のようにシフトを組んでいたが、シフトなど関係なく、ひまなはずっと中央の部屋で話したりご飯を食べたりして過ごしている、といった感じであった。また、通りかかった学科の友人を部屋の中に招くこともあった。以前から、小屋を展示している2日間は、小屋の中で過ごしている様子も展示の一部として、訪れてくれた人に見てもらおうという目論見であったので、玄関口になっている隙間から部屋の中を覗いてくれたお客さんには、外に出て行って、小屋の中で生活している様子や小屋全体についていろいろと説明をした。中には早稲田の建築を志しているという高校生も見に来てくれた。興味を持ってくれたのはうれしいが、「これが早稲田の建築なのか!？」とってしまったら、と考えると少し申し訳ない。そして、稲門建築会の方も話しかけてくださった。この小屋の中で生活している、という話をすると、「本当ですか!？」と驚かれたが、それでも少しでも気に留めてくださっただけでもうれしい限りである。また、某教授がおもしろいねと褒めてくださったこともあった。

夕方17時になると一旦公開は終わり作業の時間になった。前年度小屋をつくった本会の先輩たちも合流し、中央の部屋に集まって、エンダさんが持ってきてくださったお弁当をいただいた。中央の部屋には最大で10人ま

で入れるということがわかった。皆で円卓(手づくりの三角形のテーブル)を囲むのはとても楽しいひとときであった。

先輩たちが帰る頃にはもう21時くらいになっていた。それから残りのメンバーで近くのコンビニに買い出しに行き、またもや中央の部屋でご飯を食べた。実はこの部屋には電源が引いてあるので、夜でも電灯をつければ明るい。まるで、みんなのリビングである。その日は、僕とアリムラが小屋で寝泊まりすることになった。深夜12時頃に、3年の先輩が小屋を訪ねてきて、「本当にいるんだ!？」と驚かれた。

翌日、冷たい風のせいで目が覚めた。性能のいい寝袋を買ったので僕は暖かく寝ていることができたが、コートで耐えしのいでいたアリムラは凍えそうだったという。この日、どうやら天気が悪くなるということがわかり、僕とアリムラと夜勤から戻ってきたシンペイで、中央の部屋にかぶさっていたブルーシートを補強することになった。作業している途中から雨が降り出してきて、ギリギリ間に合った、という感じであった。それでも防ぎきれず、2カ所ほど雨漏りが見られたが壁に伝わって緩和した。

この日は朝からずっと天気が悪く、雨降る中での展示となった。それでもみんな小屋の中にいたのでは、お客さんに説明できないので、軽トラに1人つくことで、小屋と連携を図ることにした。この日も熱心に質問してくださるお客さんがおり、各部屋に興味を持ってくださった。屋過ぎになると、雨も強くなり、小屋の床が浸水しかける、という事態が生じた。ここにきて、ユウタワイが床下に詰めてくれた紙切れに助けられた。そんなこんなで展示は無事終わった。当日2日間はあっという間であった。

解体、とその後

(展示が終わって)



展示が終わると、すぐ片付けに取りかかった。その日のうちに小屋を展示場所から完全に撤去しなければならなかったのだ。あれほどつくるのに時間がかかったのに、壊すのはすぐであった。あっけなくバラバラになってしまったが小屋のパーツを目の前にして、残しておきたいという思いが募るばかりであった。次の年は持って帰れるようなものをつくろうと決まった。本会のように大きい展示物をつくる団体は自分たちでゴミ処理費を出さなければならない。特にブリコラージュとしていろんなものを集めてきたこともあってかなりの量のゴミが出たので、僕が怒られたのは言うまでもない。とりあえず、展示場所にあったものは片付き、翌日に課題の提出もあるのですぐに帰らねば、という中、皆がサプライズで僕に色紙を渡してくれた(とてもうれしかったです、宝物です)。

展示が終わってからも細々とした作業は続いた。ドライ

エリアのペンキを取らなければならず、購買前にお湯を汲みにいって変な目で見られたり、残った資材の処分に困っていたところ、イスをつくる課題のために使ってくれた人がいたり、などである。また、スマイレコ部屋の壁に描かれたドローイングを残しておきたいという意見が多かったため、壁を小さいサイズに切り出したりもした。展示から1ヶ月ほど経って、串カツ屋で打ち上げを行った。次の年も何かつくりたいと言ってくれる人が多く、代表としてとてもうれしかった。

この小屋は本当にいろんな人がいたからこそ完成することができたと思う。僕たちから、本会の先輩たち、顧問になってくださった先生、技術総務課の方たち、教学支援課の方たちなどに感謝の言葉を述べてこの文章を締めたいと思う。本当にありがとうございました。

○明日建1年(第4期)メンバー

青山ないる、有村賢人、伊藤弥季南、江尻悠介、金子柚那、砂川良太、豊岡哲生、中村陽介、藤本泰平、本間董

子、増淵加奈子、山本悠太(計12人)

Special Thanks for 遠田明音さん、落合悠斗さん、中山拓也さん、松木直人さん

住むということ

文・写真：金子 柚那



明日の建築会としての活動が具体化していく中で、リーダーである江尻が理工展の会期中、モニュメントの中で「住みたい。」と言い出した。その時は突拍子もないその発言にただただ驚くだけであったが、時間が経つにつれ彼が言う「住む。」という言葉に私の中で根拠のない違和感が芽生え始めた。今思えば、夏休み中盤に Wahabitat (NPO 団体を利用して、ボランティアの一員となり海外の貧困地帯に家を建てに行く早稲田のサークル) を利用し、インドネシアのメダンで行った建築ボランティアが私の「住む」ことに対する考え方を変えたからだと思う。

明日の建築会の活動と同時進行で私はこのメダンへのボランティアに合計20人の大学生と共に参加した。私は一建築学生としてこれから建築を考えていくうえで、最も身近な「家」を自らの手で作ることは有益だろうと思ひ、この活動に臨んだ。現地では技術者3名と落ち合い、家づくりを始めた。だが、なんの資格も技術もない大学生20人が造る家が、大層な出来栄になるはずがなく、ここで支援をした家族が満足に暮らしていけるのか不安になる代物が出来上がった。それはまず、300mm程度の溝を敷地の周りにスコップで掘り、そこに石や岩を詰

め、四隅に鉄筋を建て、コンクリートを流し込み固定した。家の枠組みができれば、その周りにどンドンレンガを互い違いに積んでいった。その過程でドアや窓の開口部分は木枠を建て、その型に合うようにレンガをうまく割り(レンガは素焼きだったため、地面にたたきつけるだけで簡単に割ることができた)、サイズ調整をしながら家の壁を作っていた。家の壁ができると、屋根を作っていく、最後に漆喰で外壁を塗った。そして、それと同時に並行で家の横に3mほどの穴を掘り、そこにレンガを敷き詰め、汲み取り式のトイレを作った。娘と、孫を持つ老夫婦のために9畳ほどの一間にトイレが付属された簡易な家が出来上がった。日本で生きる私はこの家に家族で住むのかと衝撃を受けた。それぐらいメダンで作った家は雨風を防げればよいという考えのもとに出来上がった代物であった。

家の形が出来上がってくるにつれ、ここに住む家族はここで暮らすことで幸せになれるのだろうか、私たちのやっつてはただ貧しい人のために“家を作ってやった”という自己満足を得るためだけの行動ではないのだろうか悩んだ。だが、その考えを否定してくれたのが、2年前この団体を通して同じような家を作った二人の

娘を持つ4人家族との現地での出会いだった。その家族はその空間を手にしたことにより、はるかにより良い生活ができるようになりさらには様々なことを可能にすることができたという。

昔はちゃんとした家を持っていなかったことが原因で、村の人から下に見られていたが、新しいちゃんとした「家」を持ったことにより、他人から見下されず対等な立場として、自分の存在を認められ尊重されるようになったという。これはとても心情的に楽になり、自分に自信を持つことのきっかけにもなったそうだ。



また小学校に通う娘は家に友達を連れてこれるようになった。前の古く、狭い家では恥ずかしくて友達も呼べなかったが、今では家に友達を呼んで一緒に勉強し、より学校が楽しくなったと私に話してくれた。そのおかげか、娘は学校で1番の成績を収めていると、ご両親も誇らしげに話していた。

そのほかにも、雨風におびえなくてすむようになったし、以前よりもずっと衛生的かつ安全な暮らしができていう。さらには家族で集まれる場ができたことにより、前より会話も増え、毎日が楽しいと言っていた。彼らの話から本当に「住む」行為を行う場所がその人たちの自信にもつながり、そして未来を気づくための糧になっているということを実感した。同時に、自分たちが作ったものでも人の役に立っているという工程の安心感と、もっとこの人たちに適切な家を作ってあげられたのではないかと少しの後悔が生まれた。あのような

ワンルーム、トイレ付きの家ではなく、家族個人個人が部屋をもてるような家のほうが、よりその家族のためになったのではないかと思った。だが、私たちが建てた家の形態は NPO 団体の運営費用によるところが大きく、限られた資金の中で家を建てなければいけなかった。その NPO 団体は私たちボランティアが払った日本円で約3万円のボランティア参加料を元手に建材を用意し、現地に家を建て、その後数年かけて、その家主から建てた家の建材費をローンとして返済してもらう。そしてそのローンを元手に次の家を建て、より多くの貧しい人のために家を建てられるようなサイクルを作っている。広い範囲に家をいきわたらせるためには一軒にかかる費用は限られており、その費用は決して高くはないだろう。質より、量を優先した結果、今回私たちが建てたような家が出来上がったわけだが、その過程で大量生産を目標とし、出来上がったものの貧しさを実感した。



また、今までの私の考える「住む」という行為は東京で生きてきただけの私の価値観で構成されていたことに気づかされた。東京の一般的な家には、家族を地震や雨風、寒さから守ってくれる機能が当たり前のようにしており、衛生的で健康的な生活を送れるようになっている。またその場は時に親しい人たちとコミュニケーションをとる場を与えてくれたり、自分の趣味の場をもて、その場で娯楽を楽しむことも可能にしてくれる。何不自由なく、生まれた時から「住む」行為を行っていた私が今回、住むこともままならない環境に身を置くことで、

その尊さと「住む」という行為の価値観の多様さ、その行為から生み出される人の人生の可能性について気づかされた。



そしてこの活動に建築家になるための経験として軽い気持ちで参加した最初の私を恥じた。「住む」ことを直接的に支える「家」の重要性に気づいたからこそ、作り手が持つべき責任の重さと、住人のこれからを支えていくという覚悟の必要性を実感した。これはメダンに限ったことではなく、日本の住宅を作るうえでも必要となってくることだと思うし、もっと言えばビル、工場、美術館など街をつくるすべての場面で必要となる建築家としての持つべきモラルの一つだとも思った。

そのような体験を踏まえ、江尻のやりたい「住む」と私の考える「住む」を比較すると明らかに私の考える「住む」のほうが泥臭く、人間の生きる根底となるような鬼気迫るものがあつたと思う。だから私は、この活動に対し違和感を持たずにはいられなかったが、その違和感が

どこからくるものなのかを言葉に表せなかったため紋々と悩んでいたのだと思う。

この雑誌を作るにありに、江尻とこの活動について懐古する機会が得られ、やっと私の違和感を言語化したものを伝えられた。その時江尻は「僕のやりたかったことは柚那（私）の言葉で言えば生活パフォーマンスであり、極端な言い方をしてしまえば、“芸術的道楽”だと思われてもしかたなかったかもしれないね」と言っていた。その言葉が私の中で妙にじっくりと来た。私たちは生まれた時から社会の中に住まう場所が与えられ、住まうという行為を、息をするより簡単に行っていた。だから、江尻がその行為を与えられた環境を抜け出し、自らの手で作り上げた空間の中で、一から行ってみたいと思うのも彼にとっては自然のことだったのかもしれない。それに彼がその活動をしようと思わなければ、私はこんなにも深く住まうことについて考えることはなかったと思う。その点は江尻に感謝しなければいけない。



群論からみた Galois 理論, 楕円曲線論へと導く環論と体論

松井颯治

The Galois theory viewed from the group theory
And 2-dimensional field leads to elliptic curves by Soya Matsui

本誌では今号より「私の研究」と題して、各分野を専攻する諸兄に、その分野のあらましや、興味深い点、最新のトピックなどを紹介してもらい連載を始めることにしました。これは、私たちと同じ時に生きる同世代の人々が、それぞれのフィールドにおいて、いったい何を考え、何をしようとしているのかを知ることで、現代における俯瞰的視座を獲得しようという企図に基づくものです。

第1回目である今回は数学(代数学)から、ガウス理論について御寄稿いただきました。編集子が期待していた以上の質量を持った、初回を飾るに相応しい原稿をお寄せいただいた松井君に感謝します。(編)

私は主に数学の代数系の中の Galois の純問題, 逆問題を解決させたい者です。もし, 工学や物理学などの人が数学を専攻しに来るなら, 解析学か解析寄りの幾何学をお勧めします。解析学や解析よりの幾何学がより君たちが学ぶ分野とつながりがあるからです。代数系は簡単に言うと「理論で成り立つ学問」と言っておきましょう。Galois 理論というのがあるんですが(聞いたり知っている人はいるかもしれませんが), 簡単に言うと, (主に有理数体上の) 代数方程式の解と対称群(や対称群の部分群)を対応させる学問である。(これには, Galois 対応と呼べる Galois 理論では必要不可欠な定理が存在する。「代数拡大の部分体と Galois 群の部分群は 1 対 1 対応する。」) 以下, よりわかりやすくするために群を定義する。

Definition (群)

G : 集合, \circ : 演算 G が群 \Leftrightarrow

- (i) (結合律) $\forall c, k, q \in G \quad (c \circ k) \circ q = c \circ (k \circ q)$
- (ii) (単位元の存在) $\exists e \in G \forall k \quad e \circ k = k \circ e = k$
- (iii) (逆元の存在) $\forall k \in G \exists k^* \in G \quad k \circ k^* = k^* \circ k = e$

この Galois 理論からある代数方程式から代数方程式の解における対称群(や対称群の部分群)を見つける問題を Galois の順問題であり, 対称群(や対称群の部分群)から代数方程式を見つける問題が Galois の逆問題である。以下, 有理数体上の代数方程式とする。正確にはある対称群 (や対称群の部分群) から代数方程式の存在を見つける問題を Galois の逆問題という。対称群の中で Galois 群というのがあり, この理論の心臓部分となる定理があり(Galois の定理)「Galois 群が可解であることと, 代数方程式が可解であることが同値である。」である。Galois 群が可解であるとは, 正規部分群列が存在すること, 正規部分群(定義: G : 群, H : G の部分群 H が G の正規部分群 $\Leftrightarrow \forall g \in G \quad gHg^{-1} = H$)の商群が Abel 群であることである。正確には以下のことである。

注) $\forall A$: 「任意の A に対して」, $\exists B$: 「ある B が存在する」を表す.

Definition (可解群)

群 G が可解 \Leftrightarrow

- (i) $G = G_0 \supseteq G_1 \supseteq \dots \supseteq G_{n-1} \supseteq G_n = \{id_G\}$ (n は有限)
- (ii) $\forall i = 1, 2, \dots, n \quad G_{i-1}/G_i := \{gG_i \mid g \in G_{i-1}\}$ はAbel群

Abel 群とは可換な群であることをいう. つまり, 上で紹介した群の定義より $\forall k, q \in G \quad k \circ q = q \circ k$ である. Abel 群は例えば, 巡回群(生成元が単位元でないある 1 つの元からなる群) や V_4 (Klein の四元群)である. ここで, 可解群の定義で G_{n-1} は単純群(正規部分群が自身と単位元の群のみ)となる. 群が単純群になるのは, Thompson 氏と Feit 氏が 1963 年に The Pacific Journal of Mathematics に掲載した論文で書かれた定理(の内の一つ)である.

定理(有限単純群の分類)

有限単純群は以下の 4 つの型でしかない.

- (i) 素数位数の群
- (ii) 5 次以上の交代群
- (iii) Lie-型
- (iv) 26 個の散在群 (モンスター群)

(<http://math.sun.ac.za/~swagner/SimpleGroups.pdf> 参照 (ドイツ語))

また, Thompson 氏と Feit 氏の論文が掲載した Pacific Journal of Mathematics には Feit – Thompson の定理ということでも有名な定理がある. (FT 定理とも言われる. 「奇数位数の群は可解である.」という定理である.) 有限単純群の分類定理の (i) と可解群の定義より巡回群でもまたさらに部分巡回群が存在するので, 最小な巡回群は素数位数の巡回群となる. (例えば, 加法群で $\mathbb{Z}/30\mathbb{Z}$ (\mathbb{Z} は整数の集合)とし, 1 を生成元とする. この時, $\mathbb{Z}/30\mathbb{Z}$ の中に $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ ($p = 1, 2, 3, 5, 6, 10, 15, 30$) の部分群が存在する. これら 8 個の部分群もまた巡回群であるが, $p = 6, 10, 15$ のとき, これらはさらに巡回部分群を持つので, (例えば, $p = 15$ のとき, $\mathbb{Z}/3\mathbb{Z}, \mathbb{Z}/5\mathbb{Z}$ の巡回部分群を持つ.) 結局, $\mathbb{Z}/30\mathbb{Z}$ の最小な巡回群は, $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ ($p = 2, 3, 5$) である. また(6 つのうちの 1 つの例だが) $\mathbb{Z}/30\mathbb{Z} \supseteq \mathbb{Z}/15\mathbb{Z} \supseteq \mathbb{Z}/5\mathbb{Z} \supseteq \{id\}$ となる.) なので, 商群の Abel 群は素数位数の群である.

しかし, 生成元が 2 つ以上の群(どんな生成元をとっても必ず 2 つ以上のことを言う)は Abel 群でないことがある. (例えば, 3 次対称群 S_3 の場合, 生成元を(好きに選べるが例えば,) $\langle (1\ 2), (1\ 2\ 3) \rangle$ とする. この時, $(1\ 2)(1\ 2\ 3) = (2\ 3)$ であるが, $(1\ 2\ 3)(1\ 2) = (1\ 3)$ なので, $(1\ 2)(1\ 2\ 3) \neq (1\ 2\ 3)(1\ 2)$ なので, S_3 は可換ではない. — ☆) なので商群の Abel 群を素数位数の巡回群と見なすことができる. また, Galois 理論の目玉とも言える定理(Abel-Ruffini の定理)「一般の代数方程式で 5 次以上は可解ではない.」がある. — (◇) これは今まで言ったことから言い換えると, ある Galois 群は可解ではないということである. 例えば有限単純群の分類定理の(ii)より ($n \geq 5$) n 次対称群 S_n と n 次交代群 A_n である. (他にも有限単純群の分類定理の(iii)より(例えば) $PSL(2, n)$ (n は 4 以上の自然数 ($n = 5$ の場合, $PSL(2, 5)$ の位数が $\frac{(5^2-1)(5^2-5)}{4 \times 2} = 60$ なので, (証明は省略するが) $PSL(2, 5)$ は A_5 と同型である.)) や $GL(n, 2)$ (n は 5 以上の素数 ($n = 3$ の場合, $GL(3, 2)$ は $PSL(2, 7)$ と同型である. (証明は省略する)),

$\text{PSL}(3, 3)$ ($|\text{PSL}(3, 3)| = \frac{(3^3-1)(3^3-3)(3^3-3^2)}{2} = 5616$) (生成元不明($\text{PSL}(3,3)$)の生成群が載っているテキストや pdf, arxiv などがありましたら教えてください)などもある. さらに有限単純群の分類定理(iv)より,

$M_{11} = \langle (1\ 2\ 3)(4\ 5\ 6)(7\ 8\ 9), (2\ 4\ 3\ 7)(5\ 6\ 9\ 8), (2\ 9\ 3\ 5)(4\ 6\ 7\ 8), (1\ 10)(4\ 7)(5\ 6)(8\ 9), (4\ 8)(5\ 9)(6\ 7)(10\ 11) \rangle \cong \langle (1\ 2\ 3\ 4\ 5\ 6\ 7\ 8\ 9\ 10\ 11), (3\ 7\ 11\ 8)(4\ 10\ 5\ 6) \rangle$ (11 次 Mathieu 群(位数が 7920)) もある.

ちなみに 11 次対称群では, $\text{PSL}(2,11)$ (位数が 660 の単純群) は

$\text{PSL}(2, 11) = \langle (1\ 2\ 3\ 4\ 5\ 6\ 7\ 8\ 9\ 10\ 11), (3\ 11)(4\ 5)(6\ 10)(7\ 8) \rangle$ である.

これらは n 次対称群を除けば(他にもあるがここでは割愛 (例えば, 代数 8 次方程式において $\text{PSL}(2, 7)$ を 8 次対称群に投影した群 (位数が 1344) があるがここでは詳しいことは言わない.)), 全て単純群である. ある群が単純群であることの証明は幾つか紹介するが詳しいことはここでは言わない. 例えば, 5 次交代群 A_5 では類等式と使ったり (部分的な類等式の和 (これは, A_5 の正規部分群に対応) で 60 の約数が 1 しかないことを示す), Sylow 群や Sylow の定理を使ったり ($60=2 \times 2 \times 3 \times 5$ より, 5-Sylow 群と 3-Sylow 群と 2-Sylow 群が出てくると仮定するが, 矛盾が生じてどれも成り立たないことを示す), 巡回群の位数における矛盾 (A_5 は偶置換の元しか持たないので全ての元が位数が 3 の直積で表せるが位数が 5 の元もあるので矛盾であることを示す) が主な証明の仕方である. 対称群は (☆より) 3 次以上では可換ではないので, 可解でない Galois 群であることがわかる. また, ちなみに S_n で $n = 1, 2, 3, 4$ は可解である. 可解群でない例として $n = 5, 6, 7, 11, 13$ の時も以下の画像で示す. ($n = 6, 7$ は少し複雑なので以下の URL より引用した.)

$$\begin{aligned}
 S_1 &= \{e \text{ (単位元)}\} \\
 S_2 &= \{id_{S_2}, (12)\} \cong \{id_{S_2}\} \\
 S_3 &= \{id_{S_3}, (12), (13), (23), (123), (132)\} = \langle (12), (123) \rangle \cong A_3 = C_3 \\
 &= \{id_{A_3} (= id_{S_3}), (123), (132)\} = \langle (123) \rangle \cong \{id_{S_3}\} \\
 S_4 \cong A_4 \cong V_4 &= \{id_{V_4} (= id_{S_4}), (12)(34), (13)(24), (14)(23)\} = \langle (12)(34), (13)(24) \rangle \\
 &\cong H_4 = \{id_{H_4} (= id_{S_4}), (12)(34)\} \cong \{id_{S_4}\} \\
 D_4 &= \{id_{D_4} (= id_{S_4}), (1234), (13)(24), (1432), (24), (12)(34), (13), (14)(23)\} = \\
 &\langle (1234), (24) \rangle \cong C_4 = \langle (1234) \rangle \cong H_4 \cong \{id_{S_4}\}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 S_5 &= \langle (12345), (12) \rangle \cong A_5 = \langle (12345), (123) \rangle \cong \{id_{S_5}\} \\
 F_{20} &= \langle (12345), (2354) \rangle \cong S_3 = \langle (12345), (25)(34) \rangle \cong C_5 = \langle (12345) \rangle
 \end{aligned}$$

Definition (代数方程式の可解性)

(有理数体上の) 代数方程式が可解であるとは, 以下の 2 つの条件が成り立つことをいう.

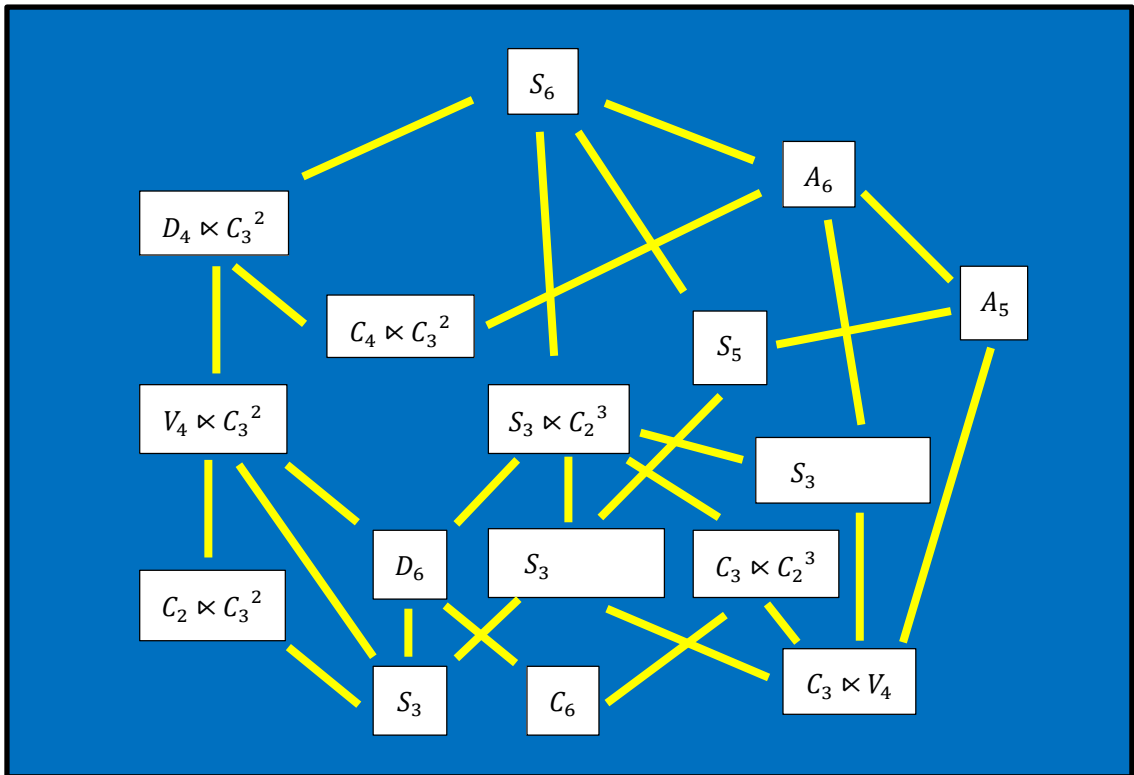
(i) : 代数拡大の列 $\mathbb{Q} = L_0 \subset L_1 = \mathbb{Q}(\sqrt[m_1]{a_1}) \subset \dots \subset L_m = \mathbb{Q}(\sqrt[m_1]{a_1}, \dots, \sqrt[m_n]{a_n}) = E$ ($a_i \in L_{i-1}, m_i \in \mathbb{N}$ ($\forall i = 1, \dots, n$)) が存在する.

(ii) : $\forall i = 1, \dots, n \quad x^{m_i} - a_i \in L_{i-1}[x]$ すなわち単純拡大である.

n = 6 のとき

<http://mathweb.e-one.uec.ac.jp/~kida/tokushima2008/hashimoto-tsunogai.pdf>

の 13 ページ~15 ページを参照



| | |
|---|--|
| $S_6 \supseteq A_6 \supseteq \{id_{S_6}\}$ | $S_5 \supseteq A_5 \supseteq \{id_{S_6}\}$ |
| $D_4 \times C_3^2 \supseteq V_4 \times C_3^2 \supseteq C_2 \times C_3^2 \supseteq S_3, C_6 (\supseteq C_3 \supseteq \{id_{S_6}\})$ $D_4 \times C_3^2 \supseteq C_4 \times C_3^2 (\subset A_6) (\supseteq (S_3^2) \cap A_6 \supseteq C_3^2 \supseteq C_3 \supseteq \{id_{S_6}\})$ | |
| $S_3 \times C_2^3 \supseteq C_3 \times C_2^3 (\supseteq C_2^3 \supseteq C_2^2 \supseteq C_2 \supseteq \{id_{S_6}\})$ $S_3 \times C_2^3 \supseteq S_3 \times V_4 (2) \supseteq C_3 \times V_4 (\supseteq V_4 \supseteq H_4 \supseteq \{id_{S_6}\})$ | |
| $S_3 \times V_4 (1) \supseteq C_3 \times V_4 (\supseteq V_4 \supseteq H_4 \supseteq \{id_{S_6}\})$ | $D_6 \supseteq C_6 (\supseteq C_3 \supseteq \{id_{S_6}\})$ |

$S_3 \times V_4$ について(\times は群の積)

(1): $\langle (12)(34), (135)(246), (16)(25)(34) \rangle$

(2): $\langle (12)(34), (135)(246), (13)(24) \rangle$

また, $(S_3^2) \cap A_6 = \langle (123), (456), (12)(45) \rangle$

<http://www.isc.meiji.ac.jp/~kurano/soturon/ronbun/14kurano.pdf>

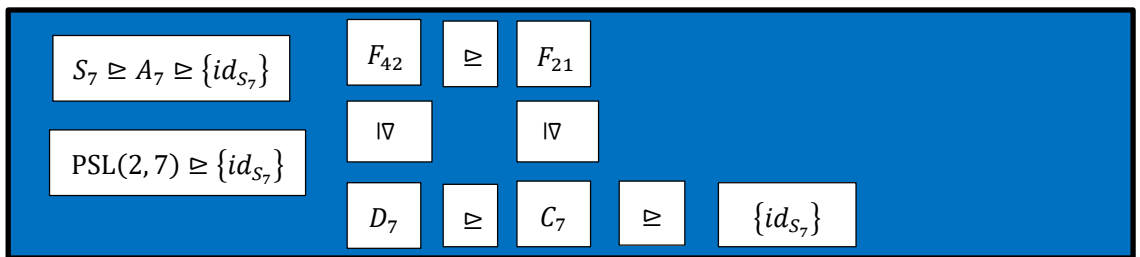
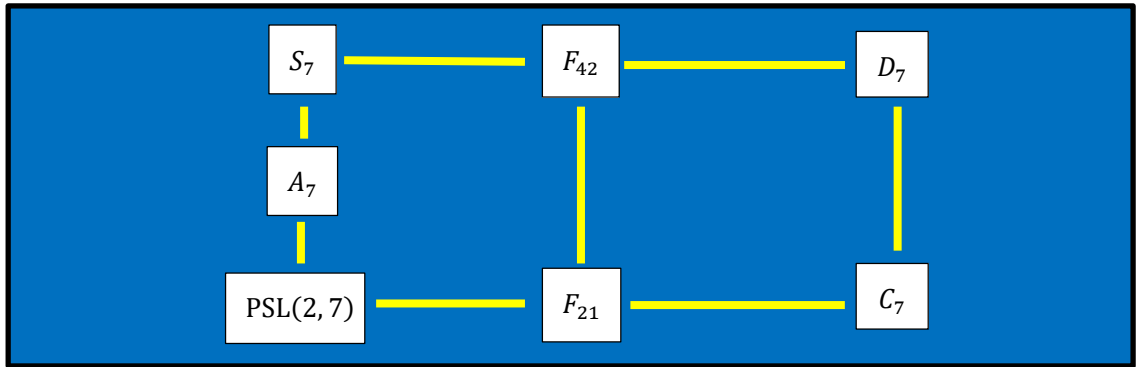
https://oeis.org/A000637/a000637_1.pdf

より引用.

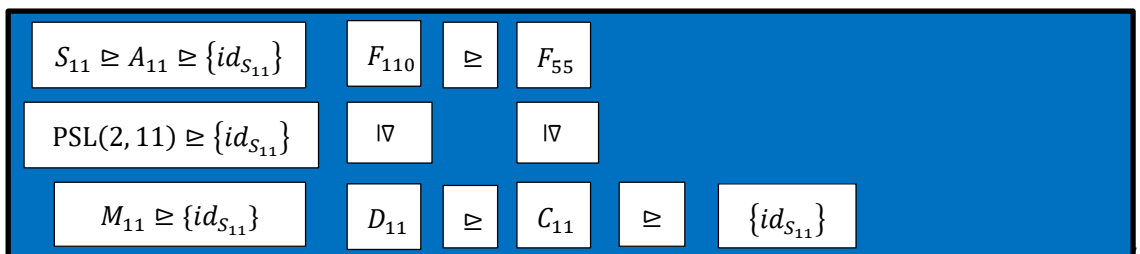
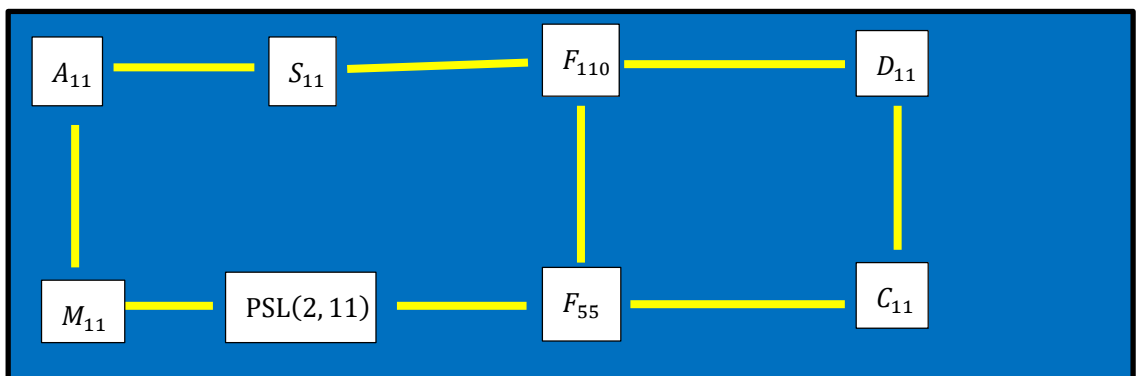
$n = 7$ のとき

<http://www.math.uni-sb.de/ag/gekeler/PERSONEN/Bachelorarbeiten/Erdorf.pdf>

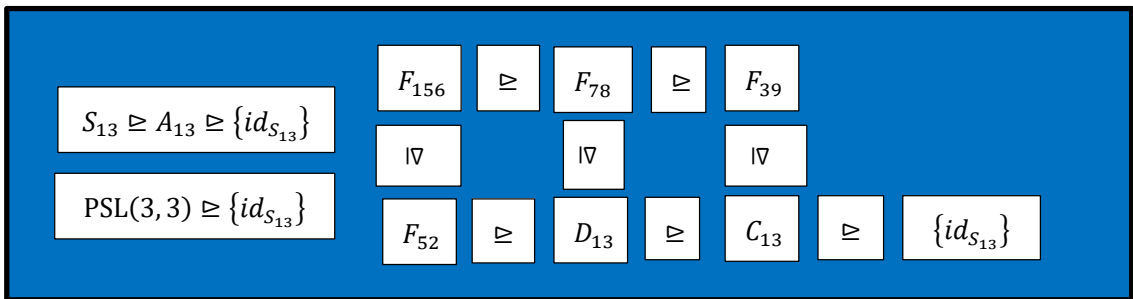
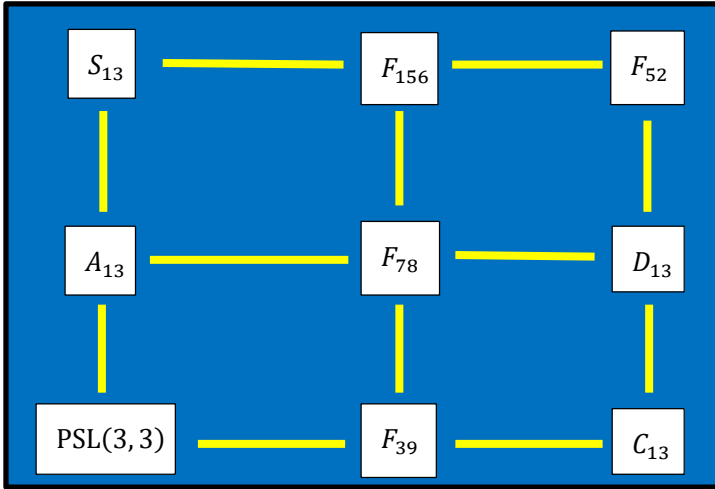
の(下で数字で数えて)47 ページを参照(ドイツ語)



$n = 11$ のとき



n = 13 のとき



可移的で部分、拡大の関係を持つ群同士を白線で示した。いままで n 次対称群における n 次可移部分群でのお話をした。 n 次対称群 S_n における n 次可移部分群とは S_n の部分群 W ($|W| \geq n$) においてどの $w \in W$ に対しても、 $(1, \dots, n)$ が互いに移り合うことである。つまり、どの $i = 1, \dots, n$ に対しても、移動してこない数字がないことである。私の言い方がわるいようなので、例を上げる。例えば、 n 次巡回群 $C_n \subset S_n$ は n 次可移部分群である。この可移(部分)群が Galois 群であるかどうか Galois の順/逆問題の主要なテーマである。ここで

$$PSL(2, 7) = \left\{ \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \mid a, b, c, d \in \mathbb{Z}/7\mathbb{Z}, ad - bc = 1 \right\}$$

である。また $PSL(2, 7) \cong \langle (1234567), (23)(47) \rangle$ で位数 168 の単純群である。-(#)

https://oeis.org/A000637/a000637_1.pdf 参照。例えば、有理数体上の 7 次代数方程式で Galois 群が $PSL(2, 7)$ と同型になる(うちの一つ)のは、 $x^7 - 7x + 3 = 0$ である。

(詳しいことは言えないが、<http://www.math.harvard.edu/~elkies/trinomial.html> 参照 (しかし

$Gal_{\mathbb{Q}}(x^7 - 7x + 3) \cong PSL(2, 7)$ であることの証明はこの URL にも書かれていない)。上の $PSL(2, 7)$ と同様に $PSL(3, 3) \cong \langle (1\ 2\ 3\ 4\ 5\ 6\ 7\ 8\ 9\ 10\ 11\ 12\ 13), (2\ 10)(3\ 7)(5\ 11)(8\ 12) \rangle$ も定義する。

$$PSL(3, 3) := \left\{ \begin{bmatrix} w_{11} & w_{12} & w_{13} \\ w_{21} & w_{22} & w_{23} \\ w_{31} & w_{32} & w_{33} \end{bmatrix} \mid w_{ij} \in \mathbb{F}_3 \quad \forall i, j = 1, 2, 3 \quad \det \begin{pmatrix} w_{11} & w_{12} & w_{13} \\ w_{21} & w_{22} & w_{23} \\ w_{31} & w_{32} & w_{33} \end{pmatrix} = 1 \right\}$$

有理数体上の13次代数方程式でGalois群が $PSL(3, 3)$ と同型になる(うちの一つ)のは、 $x^{13} - 3x^{12} + 3x^{11} + 13x^{10} - 24x^9 + 36x^8 - 99x^7 + 63x^6 - 18x^5 + 66x^4 + 9x^3 - 9x^2 - 21x - 9 = 0$ である。(しかし $Gal_{\mathbb{Q}}(x^{13} - 3x^{12} + 3x^{11} + 13x^{10} - 24x^9 + 36x^8 - 99x^7 + 63x^6 - 18x^5 + 66x^4 + 9x^3 - 9x^2 - 21x - 9) \cong PSL(3, 3)$ であることの証明は以下の参照すべきURLにも書かれていない)

<https://www2.math.uni-paderborn.de/fileadmin/Mathematik/AG-Klueners/publications/gal15.pdf>

https://www.researchgate.net/publication/2638918_Explicit_Galois_Realization_of_Transitive_Groups_of_Degree_up_to_15

前は「一般の5次以上の(有理数体上の)代数方程式は可解でない。」つまり、「一般の5次以上の(有理数体上の)代数方程式は解の公式が存在しない。」ということで例を挙げながら書いてきたが、これは「代数方程式であるが代数的な操作、すなわち有限個の和、差、積、商と冪根という演算で表すことができない解が存在する。」ことを意味するが、さらに言い換えると、「代数方程式なので、一般の5次以上の代数方程式でも代数的数の解を持つが、その代数的数が代数的に表すことができない。」という一見矛盾している結果を得る。しかし、これは次のことを表す。「一般の5次以上の代数方程式の解は有限回の冪根で表すことができない。すなわち無限回の冪根で表すことができる。」つまり、「一般の5次以上の代数方程式の解は超越数的数を用いて表すことができる。」となる。超越数とは自然対数の底の定数 e や円周率 π 、Liouville数 $\sum_{k=1}^{\infty} 10^{-k!}$ などがある。では「超越数的数を用いて表す」とはどういうことなのだろうか？読者の中には知らないものがあるかもしれないが、ここでは「『(超)楕円関数』や『 Θ -関数』などを用いて表せる」が答えである。詳しいことは梅村浩著の「楕円関数論—楕円曲線の解析学」を参照して欲しい。ここで楕円曲線は、 $y^2 = (x \text{の} 3 \text{次式})$ がいくつかある定義の仕方の一つ((超)楕円曲線とは右辺が x (の奇数次で)5次以上の式)と定義される。しかし、楕円曲線は解析的には複素数の範囲では二重周期関数であると定義される。すなわち $a + b\sqrt{-1}$ と $c + d\sqrt{-1}$ 、 $a, b, c, d \in \mathbb{R}$ 、 $\frac{a+b\sqrt{-1}}{c+d\sqrt{-1}} \notin \mathbb{R}$ であることを意味する。さらに幾何学的には複素数の範囲では種数1のTorusになること((超)楕円曲線とは複素数の範囲では種数 n のTorusになる)と定義される。これにより5次方程式の(代数的でない)解法としてはいかのようになる。 $0 = x^5 + a_4x^4 + a_3x^3 + a_2x^2 + a_1x + a_0$ $a_0, a_1, a_2, a_3, a_4 \in \mathbb{C}$ とする。ここで、 $y = b_4x^4 + b_3x^3 + b_2x^2 + b_1x + b_0$ $b_0, b_1, b_2, b_3, b_4 \in \mathbb{C}$ とおき、Tschirnhausen変換を行えば、 $y^5 + y + b = 0$ ($b \in \mathbb{C}$) に変形できる。(Bring—Jerrardの標準型)ここで、 b_0, b_1, b_2, b_3, b_4 は2次、3次、4次方程式を解けば求まる。これより先は楕円関数を使ったやり方で、私が言える範囲をこえているので先に紹介した本を参照すべきである。これにより(代数的に)可解でない5次方程式を解くことができた。しかし、次数が大きい方程式(7次以上)は超楕円関数を用いらないと解けないと言われている。

また、楕円曲線で(主に)有理数上の点を探し出す研究も行われている。私のゼミでは楕円曲線と関係することを行った(数論幾何学を講究した。山崎隆雄著「初等整数論—数論幾何への誘い」参照)。これが私のやりたい研究と何の関係があるのか私自身も考えさせられるが、数学の理論は「全ての道はローマへ通ず」のようにどこかで関係してくるだろうと考えています。正確には私が大学4年生でやったゼミでは、「楕円曲線の代数的な理論の入口」をやったにしか過ぎない。その入口は2次体というのがあって、2次体の中の整数環は結構美しい性質を持つ。詳しくはあとで述べるが、2次体の内、虚2次体に議論の焦点を当てて虚2次体が「超楕円関数体」($\sqrt{\quad}$ の中に奇数次の多項式を入れた関数体)と対応し、虚2次体の整数環が「超楕円関数体」の多項式環に対応する。この多項式環が、奇数次の多項式での楕円曲線のある体(ここでは有理数体とする)における解の集合と密接に関係している。

まず、2次体の整数環についての基本的な性質を紹介して、虚2次体の整数環と「超楕円関数体」の多項式環との類似

点を説明する。2 次体の整数環 $\mathbb{Z}[\sqrt{d}]$ ($d \in \mathbb{Z}$, 特に $d \equiv 2, 3 \pmod{4}$) の基本的な性質として Norm と Trace は整数。任意の $\mathbb{Z}[\sqrt{d}]$ 元に対して, monic な整数係数 2 次方程式が存在する。さらに d を $-d$ に置き換えて正の数に制限する。このとき $d \equiv 1, 2 \pmod{4}$ とする。つまり虚 2 次体の整数環 $\mathbb{Z}[\sqrt{-d}]$ に制限すると, 虚 2 次体の整数環の単数は Gauss 整数環 $\mathbb{Z}[\sqrt{-1}]$ を除き, $\{1, -1\}$ となる。これは整数環の単数と同じである。つまり, 「基盤となる集合」(ここでは整数環) に「基盤となる集合」に属さない元(ここでは $\sqrt{-d} \notin \mathbb{Z}$) を添加しても単数と同じである(すなわち $\mathbb{Z}[\sqrt{-d}]^* = \mathbb{Z}^* = \{-1, 1\}$)。今度は K を(標数が 2 でない)体として変数 t での体 K 上の多項式環 $K[t]$ とする。多項式環を整数環に対応するものと仮定すると, 虚 2 次体の整数環 $\mathbb{Z}[\sqrt{-d}]$ に対応する多項式環は先に書いたように「超楕円関数体」の多項式環 $K[t, \sqrt{E}]$ に対応する。ここで K 上の多項式 E を以下のように定める。

- (i) E は K 上 3 次以上の奇数次の monic (最高次数の係数が 1) な多項式
- (ii) $A \in K[t], A^2 | E \Rightarrow A \in K$

このとき Norm と Trace は多項式環 $K[t]$ であり, 単数の集合が K^* になる。(なぜなら, $a, b \in K[t, \sqrt{E}], ab = 1$ とする。このとき $a = u + v\sqrt{E}$, $u, v \in K[t]$ とすると, $b = u' + v'\sqrt{E}$ である。よって $1 = ab = (u + v\sqrt{E})(u' + v'\sqrt{E}) = uu' + vv'E + (uv' + u'v)\sqrt{E}$ 。ここで $uv' + u'v = 0$ より $uv' = -u'v$ となる。また $uu'v + v^2v'E = (-u^2 + v^2E)v' = v$ より $v' = -v$ とおけば, $u' = u$ である。よって, $b = u - v\sqrt{E}$ となる。よって, $u^2 - v^2E = 1$ より u^2 の次数が偶数で E の次数が奇数なので v^2E の次数が奇数なので $v = 0$ となる。よって $u^2 = 1$ つまり $u = \pm 1$ である。また, $u^* = k$ ($k \in K \setminus \{0\}$) とおけば, $(u^*)' = \frac{1}{k}$ となる。つまり, 単数の集合が K^* になる。) よって $\mathbb{Z}[\sqrt{-d}]$ が $K[t, \sqrt{E}]$ に対応する。以後, $K[t, \sqrt{E}]$ と以下に説明する「楕円曲線の群法則」に繋がる $K[t, \sqrt{E}]$ の性質を紹介するが, いくつかの概念を説明してからでないとお話が繋がらない。いま, $K[t, \sqrt{E}]$ は多項式環なので, イデアル (ideal) という概念が存在する。イデアルとは簡単に言うと, 「単位元がない環」である。詳しくは下で定義する。イデアルの次に, 対等という概念がある。対等とは定義は以下で説明するが, 簡単に言うと「似たようなイデアルは同じものとする」である。その対等という概念で分けられたイデアルを元とみなすのがイデアル類群である。これもくわしくは以下で説明する。また, これらの概念と体 K で閉じた (X, Y) の組の集合を定義し, それらが掛け合わさると「楕円曲線の群法則」に繋がる。以下が楕円曲線の群法則の定義である。

定義 (楕円曲線の群法則 (the group law of elliptic curves))

等式 $\dot{E}: Y^2 = X^3 + aX + b, a, b \in \mathbb{R}, -(4a^3 + 27b^2) \neq 0$ (特に以下 $a, b \in \mathbb{Q}$ とする) 上の 2 点 $K = (x_1, y_1), Q = (x_2, y_2)$ ($x_1, x_2, y_1, y_2 \in \mathbb{Q}$) を定める。

- (i) $x_1 \neq x_2$ の場合, 2 点を通る直線は

$$L: Y = \frac{y_2 - y_1}{x_2 - x_1}(X - x_1) + y_1$$

であり, この直線と楕円曲線 \dot{E} から第 3 の交点を求めることが出来る。その第 3 の点は

$$P * Q = (x_3, y_3) \quad x_3 = \left(\frac{y_2 - y_1}{x_2 - x_1}\right)^2 - x_2 - x_1, y_3 = \frac{y_2 - y_1}{x_2 - x_1}(x_3 - x_1) + y_1 \in \mathbb{Q}.$$

- (ii) $x_1 = x_2, y_1 = y_2 \neq 0$ のとき

$$L: Y = \frac{3x_1^2 + a}{2y_1}(X - x_1) + y_1$$

であり, 第3の点は $x_3 = \left(\frac{3x_1^2 + a}{2y_1}\right)^2 - 2x_1, y_3 = \frac{3x_1^2 + a}{2y_1}(x_3 - x_1) + y_1 \in \mathbb{Q}$ である. $y_1 = y_2 = 0$ のときは第3の点が「有限な場所」で存在しないので, 第3の点を無限遠点 \mathcal{O} とする. 尚, その点は以下で定める(Abel-)群では単位元とみなせる.

$P \oplus Q (= Q \oplus P) = (x_3, -y_3)$ とすると,

- (i) $P \oplus Q \oplus (P * Q) = \mathcal{O}$;
- (ii) $P \oplus \mathcal{O} = P$;
- (iii) $P \oplus Q = \mathcal{O} \Leftrightarrow Q = -P = (x_1, -y_1)$.

このとき上の群での楕円曲線 \tilde{E} 上の有理点の集合を $E(\mathbb{Q}) := \{(x, y) \in \mathbb{Q}^2 \mid y^2 = x^3 + ax + b\} \cup \{\mathcal{O}\}$ と定義する.

<http://www.mathematik.uni-wuerzburg.de/~steuding/ELLIPTICCURVES.pdf> を参照(ドイツ語)

今からこの定義を導くための概念を紹介する. 私が卒論として提出したものを引用することがある.

定義(イデアル(ideal))

\check{R} を可換環とする. \check{R} の部分集合 I がイデアルとは以下の2条件が成立するときである.

- (i) $a, b \in I \Rightarrow a - b \in I$
- (ii) $a \in I, s \in \check{R} \Rightarrow as \in I$

定義(イデアルの集合)

可換環 \check{R} のイデアルの集合を以下のように定義する.

$$\text{Id}(\check{R}) := \{I_{\check{R}} \mid (0) \neq I_{\check{R}} \text{ は } \check{R} \text{ のイデアル}\}$$

定義(対等)

2つのイデアル $I_{\check{R}}, I'_{\check{R}} \in \text{Id}(\check{R})$ が対等であるとは, 元 $0 \neq a, a' \in \check{R}$ があって $aI_{\check{R}} = a'I'_{\check{R}}$ となることである. このとき $I_{\check{R}} \sim I'_{\check{R}}$ と表す.

定義(イデアル類群(ideal class group))

$I_{\check{R}} \in \text{Id}(\check{R})$ に対し

$$[I_{\check{R}}] := \{J_{\check{R}} \in \check{R} \mid J_{\check{R}} \sim I_{\check{R}}\} \subset \check{R}$$

と定義する. さらに

$$\text{Cl}(\check{R}) := \{[I_{\check{R}}] \mid I_{\check{R}} \in \text{Id}(\check{R})\}$$

これは $\text{Id}(\check{R})$ の部分集合を要素にもつ集合である. この集合をイデアル類群という.

定義

$\chi = (a, b) \in C_E(F) := \{(a, b) \in F^2 \mid b^2 = E(a)\}, A, B \in F[t], c = A + B\sqrt{E}$ に対して $c(\chi) = c((a, b))$ を以下の

ように定義する.

$$c(\chi) = A(a) + B(a)b$$

定義(代入写像)

$\chi \in C_E(F)$ (χ : 固定) とする. 写像 ev_χ を以下のように定義する.

$$ev_\chi: \check{R} \rightarrow F, \quad c \mapsto c(\chi)$$

ここで, イdeal類群は矛盾なく定義された群である. (英語だと well-defined group)

また, 代入写像は環準同型である. これらを用いると以下の性質が成り立つ. 以下の性質で紹介されていない用語が出てきた場合, あとで定義する.

命題1

$g = 0$ のとき $Cl(\check{R}) = \{1\}$ が成り立つ. つまり可換環 \check{R} が単項イdeal整域である.

命題2 ($F = \mathbb{F}_p$ (p : 奇素数) の場合)

$Cl(\check{R})$ は位数が $p^{\frac{g(g+1)}{2}}$ 以下の有限 Abel 群である.

命題3

$\chi = (a, b) \in C_E(F)$ とする. このとき $\Omega(\chi) = \{c \in \check{R} \mid ev_\chi(c) = 0\}$ は (0) でも (1) でもない \check{R} のイdealである.

命題4

$\chi = (a, b) \in C_E(F)$ に対し以下の条件が成立する.

$$\Omega(\chi) = [t - a, -b + \sqrt{E}], \deg(N(\Omega(\chi))) = 1, \Omega(\chi) \text{ は素イdeal}$$

命題5

次の写像は全単射である.

$$C_E(F) \rightarrow \{\Omega(\chi) \in Id(\check{R}) \mid \deg(N(\Omega(\chi))) = 1\}, \quad \chi \mapsto \Omega(\chi)$$

命題6

$\chi \in C_E(F), g \geq 1$ のとき命題2での $\Omega(\chi) = [t - a, -b + \sqrt{E}]$ は単項イdealではない.

命題7

写像 $C_E(F) \rightarrow Cl(\check{R}) \setminus \{1\}, \chi \mapsto [\Omega(\chi)]$ ($g \geq 1$) は単射である.

命題8

$g \geq 1, F = \mathbb{C}, \mathbb{R}$ のとき $\text{Cl}(\check{R})$ は無限集合である.

命題 9

写像 $C_E(F) \rightarrow \text{Cl}(\check{R}) \setminus \{1\}, \chi \mapsto [\Omega(\chi)]$ ($g = 1$) は全射でもある. つまり $g = 1$ のとき写像 $C_E(F) \rightarrow \text{Cl}(\check{R}) \setminus \{1\}, \chi \mapsto [\Omega(\chi)]$ は全単射である.

命題 10

(i) 写像 $\mathfrak{C}_E : C_D(F) := C_E(F) \cup \{\infty\} \rightarrow \text{Cl}(\check{R})$ ($g \geq 1$) は単射である.

(ii) 写像 $\mathfrak{C}_E : C_D(F) := C_E(F) \cup \{\infty\} \rightarrow \text{Cl}(\check{R})$ ($g = 1$) は全単射で以下が成り立つ.

$$R \text{ は単項イデアル整域である.} \iff C_D(F) = \{\infty\}$$

尚, これらの命題は楕円曲線の群法則(または群構造)と関係している. 命題 10 での写像は楕円曲線の群法則の定義と関係し, 楕円曲線の群法則の定義では ∞ を \mathcal{O} と記してある.

知らない用語の定義

定義(単項イデアル整域)

イデアルの定義でイデアル I の生成元が一つしかないとき, イデアル I を単項イデアルである.

定義(単項イデアル整域)

可換環 \check{R} が単項イデアル整域であるとは, 可換環 \check{R} の任意のイデアルが単項イデアルのときである.

定義(素イデアル)

可換環 \check{R} のイデアル P が素イデアルとは, 以下の条件が成り立つときである.

$$a, b \in R, ab \in P \Rightarrow a \in P \vee b \in P$$

楕円曲線を幾何的に解釈し, 楕円曲線の群法則によって体 K の点を導き出す操作をするが, その群の操作や様々な楕円曲線の性質や代数的な性質などによって導かれた以下の定理は 20 世紀で証明されたものである. (上の命題は楕円曲線の群法則を作るために紹介したが, 以下の定理とも関係性が見られる.)

定理 1 (Weil)

$F = \mathbb{F}_p$, p は奇素数とする. g を(超)楕円曲線の種数とする.

以下の条件 (A), (B), (C), (D) を持つ $2g$ 個の複素数 a_1, \dots, a_{2g} が存在する.

(A) $|a_1| = |a_2| = \dots = |a_{2g}| = \sqrt{p}$

(B) $a_1 a_2 = a_3 a_4 = a_{2g-1} a_{2g} = p$

(C) $|C_E(\mathbb{F}_p)| = 1 + p - \sum_{i=1}^{2g} a_i$

(D) $|\text{Cl}(\check{R})| = 1 + p^g + \sum_{r=1}^{2g-1} (-1)^r \prod_{(i_1, \dots, i_r) \in I_r} a_{i_1} \dots a_{i_r}$

$$I_r = \{(i_1, \dots, i_r) \mid (1 \leq i_1 < \dots < i_r \leq 2g), \quad r = 1, \dots, 2g - 1\}$$

以下、 $F = \mathbb{Q}$ とする。

定理2 (Faltings, Mordell)

$g \geq 2$ ならば $C_E(\mathbb{Q})$ は有限集合である。

定理3 (Mordell, Weil)

有限集合 $T \subset Cl(\check{R})$ と有限個のイデアル $P_{\check{R}_1}, \dots, P_{\check{R}_r} \in Id(\check{R})$ に対し、 $r \in \mathbb{N}$ (この r を $Cl(\check{R})$ の階数と呼ぶ。) が存在し、以下の写像が全単射である。

$$\mathbb{Z}^r \times T \rightarrow Cl(\check{R}), \quad ((a_1, \dots, a_r), \Gamma) \mapsto [P_{\check{R}_1}^{a_1} \dots P_{\check{R}_r}^{a_r}] \Gamma$$

定理4 (Mazur)

$g = 1$ のとき、定理3における集合 T の位数は 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 16 のどれかである。

定理5 (定理4 を具体的な群で表したもの)

$g = 1$ のとき、定理3における集合 T の群は以下の 15 パターンしかない:

$$T \cong \mathbb{Z}/n\mathbb{Z} \quad (n = 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12)$$

$$T \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}/n\mathbb{Z} \quad (n = 2, 4, 6, 8)$$

前半の説明の流れの中に Galois の順問題や逆問題のことを言ったが、あまり言えなかったのが無念です。個人的に楕円関数に関することがあまり言えなかったので、楕円関数論ももっと勉強すべきと思いました。楕円曲線論で思ったことは、Galois 理論に出てくる体の代数拡大が、楕円曲線上の点とどういう関係を得るのか? Mazur の定理の T がどうなるか? 今後、私は Galois 理論を使って、楕円曲線論も研究していこうかと思っています。その他、異議すべき点があれば私に教えてください。

参考文献

<http://math.sun.ac.za/~swagner/SimpleGroups.pdf>

「Einfache Gruppen sind kompliziert — Die Klassifizierung der endlichen einfachen Gruppen」

Stephan Wagner 著 2002年09月27日(ドイツ語)

<http://mathweb.e-one.uec.ac.jp/~kida/tokushima2008/hashimoto-tsunogai.pdf>

「6次可移群に対する Noether の問題」橋本 喜一郎, 角皆 宏 著 2008年09月12日

<http://www.isc.meiji.ac.jp/~kuranosotonron/ronbun/14kurano.pdf>

「 S_6 の部分群の分類」内澤京也, 林原昌司, 望月ふみか, 海老名智治 著 2015年2月26日

https://oeis.org/A000637/a000637_1.pdf

「THE TRANSITIVE GROUPS OF DEGREE UP TO ELEVEN」Gregory Butler, John Mckay 著 1983年(英語)

<http://www.math.uni-sb.de/ag/gekeler/PERSONEN/Bachelorarbeiten/Erdorf.pdf>

「Konstruktive Galoistheorie für Polynome kleinen Grades über \mathbb{Q} 」Manuel Erdorf 著 Prof. Dr. Gekeler 監修(ドイツ語)

<http://www.math.harvard.edu/~elkies/trinomial.html>

「Trinomials $ax^n + bx + c$ with interesting Galois groups」著者不明(英語)

<https://www2.math.uni-paderborn.de/fileadmin/Mathematik/AG-Klueners/publications/gal15.pdf>

https://www.researchgate.net/publication/2638918_Explicit_Galois_Realization_of_Transitive_Groups_of_Degree_up_to_15

「Explicit Galois realization of transitive groups of degree up to 15」Jürgen Klüners, Gunter Malle 著(英語)

http://www.math.rwth-aachen.de/~Gabriele.Nebe/Vorl/SEMCA/ausarbeitung_quadratische_zahlkoerper.pdf

「Quadratische Zahlkörper」Clara Nadenau 著 2010年10月15日(ドイツ語)

ISBN 978-4-320-11179-0 山崎隆雄 著「初等整数論 数論幾何の誘い」

http://mathematics-pdf.com/pdf/number_theory_of_quadratic_fields.pdf

「2次体の整数論」MATHEMATICS.PDF 著者不明

<http://www.mathematik.uni-wuerzburg.de/~steuding/ELLIPTICCURVES.pdf>

「ELLIPTISCHE KURVEN mit Anwendung in der Kryptographie」Steffen Reith, Rasa und Jörn Steuding 著 2009/10年(ドイツ語)

ISBN 978-4-621-06453-5 J.H.シルヴァーマン 著 足立 恒雄, 木田雅成, 小松 啓一, 田谷 久雄 訳 「楕円曲線論入門」

おまけ1：(＃)で7次対称群の部分群で $PSL(2, 7) \cong \langle (1234567), (23)(47) \rangle$ が左の生成群で以下の168個の元からなることを確かめよ。(この群の元は私が手計算でもとめました。間違いがあれば教えてください。)

$$PSL(2, 7) = \langle (1234567), (23)(47) \rangle = \{$$

$$id_{PSL(2,7)},$$

$$(1234567), (1357246), (1473625), (1526374), (1642753), (1765432),$$

$$(1237645), (1365274), (1753426), (1624357), (1472563), (1546732),$$

$$(1254376), (1536247), (1465723), (1327564), (1742635), (1673452),$$

$$(1256743), (1573264), (1635427), (1724536), (1462375), (1347652),$$

$$(1264735), (1675243), (1456327), (1723654), (1342576), (1537462),$$

$$(1265347), (1637254), (1576423), (1324675), (1452736), (1743562),$$

$$(1273546), (1756234), (1367425), (1524763), (1432657), (1645372),$$

$$(1274653), (1763245), (1437526), (1625734), (1542367), (1356472),$$

$$(12)(36), (12)(57), (13)(45), (14)(67), (23)(47), (24)(56), (35)(67),$$

$$(13)(26), (15)(27), (14)(35), (16)(47), (24)(37), (25)(46), (36)(57),$$

$$(16)(23), (17)(25), (15)(34), (17)(46), (27)(34), (26)(45), (37)(56),$$

$$(1236)(45), (1354)(27), (1263)(47), (1326)(57), (1476)(25), (1647)(35), (2546)(37),$$

$$(1632)(45), (1453)(27), (1362)(47), (1632)(57), (1674)(25), (1746)(35), (2645)(37),$$

$$(13)(2465), (15)(2374), (16)(2437), (12)(3567), (17)(2456), (14)(3657), (24)(3576),$$

$$(13)(2564), (15)(2473), (16)(2734), (12)(3765), (17)(2654), (14)(3756), (24)(3675),$$

$$(1534)(26), (1257)(34), (1467)(23), (1527)(36), (1275)(46), (1345)(67), (2347)(56),$$

$$(1435)(26), (1752)(34), (1764)(23), (1725)(36), (1572)(46), (1543)(67), (2743)(56),$$

$$(124)(365), (124)(357), (124)(376), (135)(267), (124)(567), (136)(457), (235)(476),$$

$$(142)(356), (142)(375), (142)(367), (153)(276), (142)(576), (163)(475), (253)(467),$$

$$(125)(364), (123)(457), (127)(346), (137)(265), (126)(475), (137)(456), (236)(475),$$

$$(152)(346), (132)(475), (172)(364), (173)(256), (162)(457), (173)(465), (263)(457),$$

$$(146)(235), (137)(254), (134)(276), (156)(273), (145)(276), (156)(374), (257)(346),$$

$$(164)(253), (173)(245), (143)(267), (165)(237), (154)(267), (165)(347), (275)(364),$$

$$(156)(234), (147)(253), (137)(246), (167)(235), (156)(247), (157)(364), (267)(345),$$

$$(165)(243), (174)(235), (173)(264), (176)(253), (165)(274), (175)(346), (276)(354)\}$$

尚, $\{1, 2, \dots, 7\} = M$ とおき, $G =$ 写像 $G \curvearrowright M \rightarrow M$ に対し,

$$\{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7\} \xrightarrow{id} \{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7\}, \{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7\} \xrightarrow{(1234567)} \{2, 3, 4, 5, 6, 7, 1\},$$

$$\{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7\} \xrightarrow{(235)(476)} \{1, 3, 5, 7, 2, 4, 6\} \text{ と定義する.}$$

おまけ 2 : 写像 $\text{PSL}(3, 3) \rightarrow M \leq S_{13}$ (正確には群 M は A_{13} の部分群でもある.) (つまり, $\text{PSL}(3, 3)$ から S_{13} への埋め込み) に対し, 群 M の元の型と個数は以下のものであるかどうか確かめよ. また, 群 M への類等式も以下の式であるかどうか確かめよ. 尚, 以下の結果は私が導き出したことなので, その結果に異議があれば教えてください.

$$|\text{PSL}(3, 3)| = 5616 = 1 + 432 \times 4 + 624 + 104 + 117 + 702 + 702 \times 2 + 936$$

単位元 $id_{S_{13}}$: 1 個;

(a b v g d e j z i y k l m) 型 : 1728 個;

(a b v)(g d e)(j z i)(y k l) 型 : 624 個;

(a b v)(g d e)(j z i) 型 : 104 個;

(a b)(v g)(d e)(j z) 型 : 117 個;

(a b v g)(d e j z)(i y)(k l) 型 : 702 個;

(a b v g d e j z)(i y k l) 型 : 1404 個;

(a b v g d e)(j z i)(y k) 型 : 936 個.

おまけ3:◇) より以下の文章を和訳し, なぜそうなるのかを確かめよ.

http://www.inf.u-szeged.hu/projectdirs/kalmar/pdf/32_acta_sci_math_2.pdf より引用(一部改定).

Ein Beweis des Ruffini - Abelschen Satzes.

Von (人の名前のため省略) in Szeged.

Die Herleitung des Satzes von Ruffini und Abel — laut dessen die allgemeine algebraische Gleichung n -ten Graden für $n \geq 5$ nicht durch Radikale lösbar ist — aus dem Galoisschen Kriterium für die algebraische Lösbarkeit erfolgt gewöhnlich unter Berufung auf die Tatsache, dass die alternierende Gruppe A_n von n Elementen für $n \geq 5$ einfach ist. Statt dessen würde auch die weniger scharfe Tatsache genügen, dass A_n für $n \geq 5$ keinen Normalteiler vom Primzahlindex besitzt. Für diese letztere Tatsache werden wir einen einfachen Beweis geben, wodurch ein für Vorlesungszwecke besonders geeigneter Beweis des Ruffini—Abelschen Satzes entsteht.

Es genügt folgenden Satz zu beweisen:

Es sei G ein echter Normalteiler der alternierenden Gruppe A_n von n Elementen; ferner sei p eine ungerade Primzahl $\leq n$. Dann gibt es eine Untergruppe U von A_n , die G als Untergruppe vom Index p enthält.

In der Tat folgt hieraus, dass der Index von G in Bezug auf A_n durch jede ungerade Primzahl $p \leq n$ teilbar ist, also kann für $n \geq 5$ keine Primzahl sein.

Zum Beweise sei Z ein nicht zu G gehöriger p -gliedriger Zyklus; G_1, G_2, \dots, G_g seien die Elemente von G . Wir betrachten die Permutationen

$$(1) \quad Z^i G_j \quad (i = 0, 1, \dots, p-1, j = 1, 2, 3, \dots, g);$$

dieselben gehören sämtlich A_n an. Ferner sind sie verschieden. In der Tat folgt aus

$$(2) \quad Z^{i_1} G_{j_1} = Z^{i_2} G_{j_2},$$

dass $Z^{i_1 - i_2} = G_{j_2} G_{j_1}^{-1}$ zu G gehört; wäre hier $i_1 \neq i_2$, also $(i_1 - i_2, p) = 1$, so könnte man die ganzen Zahlen x und y so bestimmen, dass sie die diophantische Gleichung

$$(i_1 - i_2)x + py = 1$$

erfüllen; daher ergäbe sich, dass $Z = Z^{1-px} = Z^{(i_1 - i_2)x} = (Z^{i_1 - i_2})^x$ gegen der Voraussetzung G angehört. Daher ist $i_1 = i_2$, also, wegen (2), $G_{j_1} = G_{j_2}$, d.h. $j_1 = j_2$.

Wir zeigen nun, dass die $g \times p$ Permutationen (1) eine Gruppe U bilden. In der Tat ist

$$Z^{i_1} G_{j_1} \circ Z^{i_2} G_{j_2} = Z^{i_1 + i_2} Z^{-i_2} G_{j_1} Z^{i_2} G_{j_2} = Z^{i_1 + i_2} G_{j_3} G_{j_2} = Z^{i_3} G_{j_4},$$

wobei i_3, j_3, j_4 aus

$$i_3 \equiv i_1 + i_2 \pmod{p}, 0 \leq i_3 \leq p-1,$$

$$G_{j_3} = (Z^{i_2})^{-1} G_{j_1} Z^{i_2},$$

$$G_{j_4} = G_{j_3} G_{j_2}$$

zu bestimmen sind, was wegen der Voraussetzung, dass G ein Normalteiler von A_n sein soll, beziehungsweise wegen der Gruppeneigenschaft von G möglich ist.

Da die Gruppe G eine Untergruppe von U vom Index p ist, so ist die Behauptung bewiesen.

(Eingegangen am (日付のため省略) 1932.)

雑報

早稲田大学建築学科 設計演習 A 展 開催

早大建築学科1年生の選択科目「設計演習A」の課題作品を集めた展覧会『』展(カッコテン)が5月3日から5日にかけて、神保町のGallery Corsoで開催された。▼記者は二日目にお邪魔したが、なかなかの盛況であった。▼建物のシルエットをあしらったキャプションのデザインもよかったが、何よりパンフレットやアーカイブの作成といった、何かを残そうという姿勢が見えたことが良かった。これこそ称賛されるべきである。

▼アーカイブは<http://enshua2015.wix.com/archive>から閲覧できる。本展に出展されなかった作品の画像もあるので、是非アクセスされたい。本展の詳細は次号でお伝えする予定。

Stone Shop 中山 開店

あすけん同人で、軽トラックの荷台に小屋を積み全国を漂泊しておられる中山拓也氏がWeb商店Stone Shop 中山を開店した。取り扱っている商品は氏が訪れた先のお土産が届く「お土産ハッピー10000円/5000円/1000円セット」、石の写真とその場所印刷されたポストカード「16.06.03 17.11.43の地図」(10000円)など。▼ちなみに栄ある1人目の注文者は私赤野であったらしい(そんなことは露知らずにケチって一番安いやつにしてみました)。▼お金に余裕のある皆様は、どうぞ高額の方をお買い求め頂きたい。URL:<http://tacet133.thebase.in>(画像とも)



『独立宣言』展 開催

本誌2号に表紙写真をご提供いただいた木村巧氏は、写真家・青山裕企氏のもとで武者修行を続けていたが、この度、同期のアシスタント2名と共に独立を果たした。それを記念し「独立宣言」と題した展覧会が2016年3月29日から4月3日まで、ユカイハンズ・ギャラリー(文京区関口1-30-9)にて開催された。▼写真については全くの門外漢につき、きちんと評することはできないので、どうしても印象論になってしまうが、一般的に氏の作品はきれいなニヒルといったようなもので、まだ何か割り切れないものがあるように感じた。透明な画面は師匠譲り、ニヒ

ルは氏の退廃的な態度に由来するのだろうか、表現としての強度とは何か縁遠い地点にいるようだ。と言うよりも、むしろこういうものの方が現代的な表現なのだろうということだろうか。▼写真は建築と異なり、特定の資格が必要なわけではなく、誰でも参入し得る世界なので、その中で自分の立ち位置を確立し売っていくというのは本当に大変だと思う。御苦労は察して余りあるが、どうぞ頑張ってください。▼本当はきちんとした展評を書くことと約束していたのだが、今号では紙幅の都合上、こんなスペースしか確保できなかった。お詫びしつつ、氏の前途に幸あらんことを願う。妄評多謝。

購読予約のお願い

本誌は財政的なバックアップを持たず、皆様からの購読料のみを基盤として発行されております。安定した発行のために、購読予約にご協力ください。3号以上ご予約いただいた方には特典もご用意しております。詳細はHPを御覧ください。

| | 本体 | 送料 | 合計 | 購読特典 |
|----|-------|-------|-------|------|
| 1号 | 500円 | 180円 | 680円 | — |
| 3号 | 1500円 | 540円 | 2040円 | ○ |
| 6号 | 3000円 | 1080円 | 4080円 | ○ |

御寄稿のお願い

本誌は建築(史)とその周辺をめぐるジャーナルとして、資料性に富んだ論考を掲載し、真摯な議論を積み上げてゆくことによって、この領域の発展と創造に資する存在となりたいと考えております。日頃から考えるところをお持ちの方、記録として紙上に残しておきたいと思うことをお持ちの方は、ぜひ本誌に御寄稿ください。批評・批判・誌上討論も歓迎いたします。表紙の写真・イラスト等も募集しております。原稿料や掲載誌は差し上げられません。各年度末の収支状況に応じて、薄謝進呈いたします。詳細は本誌HPをご覧ください。

チョコレートを御馳走してください

本誌は明日会同人(主として落合と赤野)によって運営されておりますが、両人ともチョコレートが好物であるにも関わらず、バレンタインデーに予定された収量が確保できなかった為に糖分に飢えております。このままでは、糖分不足により頭が回らなくなり、本誌の発行が滞ってしまいます。

両人が本誌の編集作業を続けられるように、皆様のご支援をお願い致します。クレジットカード(Paypal)にて、1000円より承ります。ご協力頂いた方には金額に応じて粗品をお送り致します。詳細は本会HPを御覧ください。

収支状況

収入：販売(45部)・・・22500円(電子版売上は未集計) / 郵送料代・・・720円 / 寄付・・・10000円

支出：印刷費(1+2号)・・・27100円 / 郵送料・・・1312円 / 決済手数料・・・825円 / その他経費・・・1387円

差引：2596円(2016/5/21現在 詳細な内訳はWebを御覧ください)

バックナンバー

本会ホームページよりご注文いただけます。残部僅少となっておりますので、お早めにご注文ください。

No.1(創刊号)：吉川清作と乞食の家(1)・復刻「現代の住宅」・明日の建築会のこれまで(1)ほか・・・残部6部

No.2：吉川清作と乞食の家(2)・モダニズムの虚 実存主義と建築・象設計集団 樋口裕康氏講演録・第一逸脱速度展報告・韓国の建築学徒ほか・・・残部7部(2016/5/15現在)

次号予告

「建築非芸術論」再読—石原智成 / 復刻 野田俊彦卒業論文『鉄筋混泥土と建築様式』(1915) / 野田俊彦卒業論文の簡易な検討—落合悠斗 / 吉川清作と乞食の家(4)一同 / 設計演習A展報告—江尻悠介ほか / 二人展報告—Pham Ngoc Thanh Phuc / 私の研究(2)：生命化学の最新トピック—中島大暁 ほか

編集後記

今号は多くの方に御寄稿いただき、創刊号以来の大部となりました。大変うれしく思います。吉川清作研究も戦前の山を越えて一安心です。次号は合理派建築会結成に切り込みます(落合)例のごとく発行が遅れてしまい申し訳ありません。次号以降はなるべくご心配を掛けない範囲で遅れることにしたいと思えます。なお、小生記事の「明日日のはなし」というフレーズは中山氏の発言から拝借しました。御礼申し上げます。(赤野)

本誌について

刊行の目的

- いま書き残さなければ失われてしまう事柄を積極的に取材・記録・整理し、後世の学究に役立つ資料群を形成すること
- 継続的に書き綴る場を用意することによって、自らの論理的思考力を鍛錬できるようにすること
- 堅実な相互批評と議論を通じて他分野・他領域を含めた見識を深化させること

編集方針—「堅実に・実直に・誠実に」

- 資料としての信頼性を担保した記事とすること
- 各記事・各号の間を体系だった構成とすること
- 批評・討論等なるべくインタラクティブな記事を増やすこと
- 文理を問わず他分野・他領域と交流を深めること
- 出来るだけ密度のあるページをより多く重ねること

建築都市文化史誌 aft 第3号(不定期刊)

発行日：2016年5月1日

発行人：落合悠斗

発行所：明日の建築会

〒248-0034 神奈川県鎌倉市津西1丁目3番5号 電話：050-3746-9540 FAX：0467-33-1887

メール：asunokenchiku@yahoo.co.jp ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/aftkenchiku/>

Twitter：@asunokenchiku / @asuno_future_t

印刷所：株式会社 栄光 印刷版価：500円

Print edition ISSN 2189-5600

本誌所収の記事は特記無き限り CC-BY-NC-ND 4.0 ライセンスのもとで、自由に複写・複製して頂けます。

